申越候段、御附衆被達候旨、御内儀觸有之、

〔示羊記〕○野宮定祥日記　宮内省圖書寮所藏本

六月十六日、己巳、天晴午後陰、少雷鳴、○中略、女院今曉頗御出來、且御背御腫物始出現、自御違例始、御背ニ床疽ヲ生ジ給フ仰臥御、到今曉不能奉動、今曉不意動御〻便見出之云〻、大町□□守、又高階清助今曉俄推任敍云〻等奉拜診、全御床疽、床スレヨリ爲疽物之云〻、難治、且於今去無可施術由、申之云〻、仍今日御容體甚恐入〻處、今朝來、先御靜謐云〻、先恐悅、但於今去、無賴次第、恐怖無極、

六月十八日、辛未、○中略、子半剋前、女院御違例、追〻不被爲勝御容體候旨、内府公(沢藤忠朗)被命〻間、爲心得被示旨、三條亞相(實萬)被示、于時御格子後、入臥床〻後也、送返報、直本役示達、丑剋許、追〻被參集、同半剋許、東坊城(聰長)參上、先是殿下(鷹司政通)有命、參女院、相次殿下令參給、事〻被示仰、但未令參御前給〻間、先可參御前給、暫可候被命、暫る御退下被命云、未非御危篤〻御容體、以前被命商量〻事等可見合、尤如此御容體〻後、可令經日數給哉難計、全内府麁忽也云〻、於如此七、參集無益、且却る有恐者歟云〻、一同更驚、各可分散被示合退出了、

六月廿日、癸酉、陰晴不定、未剋許、兩役可參集、殿下被命候旨、橋本黄門當番被示、卽著衣冠參内、追〻本役參集、小時殿下亦令參給、事〻被仰合、酉剋過、令退出給、亥剋許、各退出、但新亞相(廣橋光成)・新宰相(東坊城聰長)共被參女院、予直退出、但酉剋前、白地退出、參女院、伺御氣色、直退出、又歸參内、依諸臣今日中可伺御氣色也、仍所參入也、

廿一日、甲戌、陰晴不定、卯剋過、女院昨夜亥剋崩御〻旨、橋本黄門被示、直束衣冠參　内、本役各參集、三條不參如昨日、伺　天氣、

崩御發表

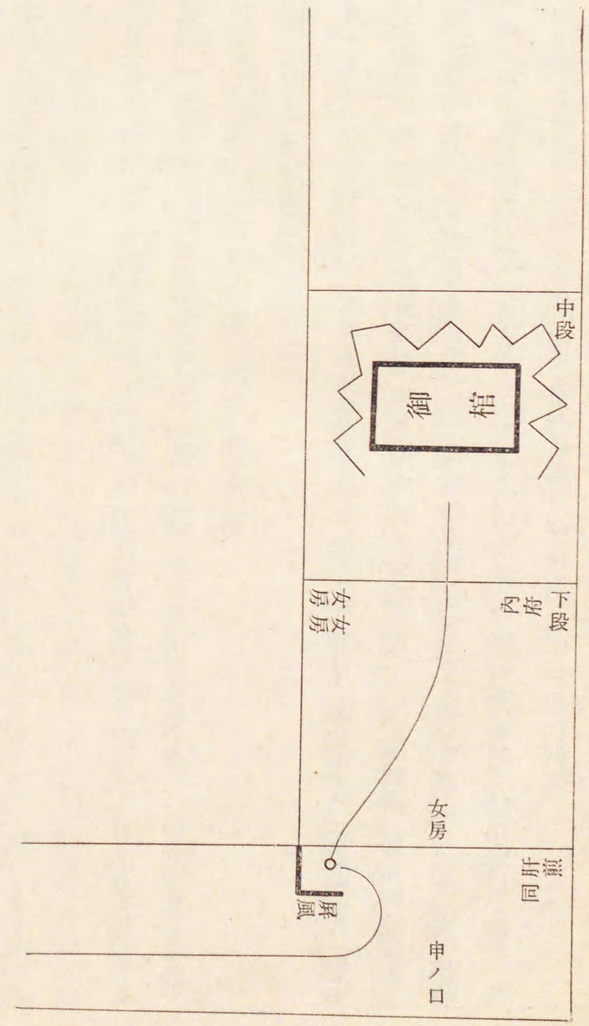
但三條不被參、〻女院云〻、飛鳥井參上〻後、直被參女院、

六月廿三日、丙子、○中略、女房素服十一人下萬迄、可賜之旨、且院女院等御服以下、自文化御讓國時被改、内藏寮不調進、高倉調進御治定、仍於今度る高倉調進被仰下候、如先例可有取計、傳奏中山黄門・奉行藏人左少辨可申渡、殿下被命、卽示仰了、

素服調進

〔野宮定功日記〕○東京帝國大學所藏本

七月十九日、壬寅、霽、午斜、著布衣奴袴亮陰、參本所、良久無音、漸及申許、肝煎卿源三位(東久世通禧)示云、今日御用召、過日願申御燒香事、可被許之、歸非常付候所、洗手卽參進、肝煎卿被誘引、參御在所邊、先三條亞相(實萬)・橋本黄門(實久)已上去十四日不參之等被拜禮了、退去〻後、予經申ノ口於下段襖外屏風内、一拜、起る斜入下段、自中央膝行入中段、參御棺前、取出香、初懷中、燒于香爐、膝退、於中段闇外奉拜、了退去、於初所一拜退去、謁源三位申畏、申半許退出歸宅、



來廿六日、初七日御佛事、泉涌寺散華役被仰下〻由、奉行觸之、

追申、刻限各午剋、無遲〻可令參集給候也、

奉爲

前新清和院御中陰間、於泉涌寺可被行御法會、可令參勤給〻旨、被

光　愛

仰下候、仍申入候也、

七月十八日

初七日來廿六日　野宮少將（定功）殿　小倉大夫（輔季）殿

四七日來三十日　八條侍從殿　梅園大夫（實紀）殿

盡七日來月八日　清水谷中將（公正）殿　中務權少輔（勘解由小路資生）殿

加奉返遣了、著座公卿等、同被催仰云〻、

〔萬里小路正房日記〕（東京帝國大學所藏本）

七月三日、丙戌、曉來風雨、終日空朦、自今日觸穢也、今夜戌刻、前新清和院御入棺也、申半刻過、參于准后御方、本所〻御使勤仕、亥刻過、御入棺無異相濟旨、御肝煎通岑（東久世）卿被申出、歸參言上如例、有別記、

院司之輩、自分御燒香之事、於本所謁御肝煎卿、願申、追而有御沙汰旨也、

七月廿二日、乙巳、晴、巳半刻、參　内、番也、宿右三位中將へ番代退出、橋本中納言被申渡、如左、

就　女院崩御着御錫御否(紵カ)之事、近　中和門院御事時無著御、又敬法門院之時、爲　靈元院著御中依有　叡慮、脫御一箇日被延引、先蹤此如、且令條逡候、今度無著御了(可カ)有御心喪之處、亮陰一朞之間、乍　御殘念無御沙汰候事、

敏宮、御同樣可有御心喪之處、諸臣一同不待除服　宣下出仕、御時節候故、不被　仰出候事、

右番へ小番未勤申傳候、　修理職奉行加勢宮內可被仰出、兩職申渡之、中山凶事傳奏被執奏御用等、依無人也、

〔女院御所御腦御祈御祓獻上〕○神宮司廳所藏本

女院御平癒祈願

弘化三丙午年四月

女院御所御腦御祈御祓獻上、神宮使就在京中、兼勤井面兵部守城、

一四月二十二日、於祭主殿(藤波敎忠)政所川合信濃殿被申聞候ゝ、

女院御所御腦ニ付、

兩宮ニ御祈被　仰出、仍爲御心得申入候、勢州ニ御用向有之候ゝ、唯今ゟ宿次差出候間、書狀被遣候ハヽ、料紙可進候間、御認可被成との事ニ付、仍相認御賴申入候事、

一御祈ニ付、

禁裏御所

女院御所ニ御祓獻上被仰出候由、仍兼勤可致旨、家司大夫ニ文通、尤熨斗八把万度貳合當方ニ有之候段、申遣、右ゝ

准后樣獻上之分、兩度〻分、不用ニ相成、當方ニ有之候段申遣、其餘取揃、可被差登旨、申遣候事、

一廿六日、家司大夫ゟ返書、宿次ニゟ至來〻由ニ而、祭主殿政所中ゟ旅宿へ被遣候、

御祈御祓獻上可仕旨〻返書、尤獻上物御祈滿座之上、著登可申旨申來、書面略之、

一廿七日・廿八日、正三位御禮獻上勤之事、

一五月朔日、無用事、

一二日、祭主殿ゟ至來、

勢州ゟ昨夜、油紙包至來候間、右早〻御渡し申入度候間、只今御參殿可有之候、以上、

五月二日　　川合信濃
　　澤池筑後

井面兵部殿

右、承知〳〵旨、請書遣、

〔酒井家御代記〕○酒井忠義記 伯爵酒井忠克所藏本

六月二十日、女院御違例ニ付、伺御機嫌參内、同二十一日、女院崩御ニ付、參内、同廿四日、伺御機嫌參内、同廿五日、禁裏ヘ爲伺御機嫌、檜重一合進獻、同廿六日、准后ヘ同斷ニ付、薯蕷進獻、

〔新清和院尊儀女院御凶事一會之日記〕○宮内省圖書寮所藏本

女院御諱欣子、後桃園院皇女、光格天皇之后也、

安永九年十二月十三日　内親王宣下
寛政五年十二月廿四日　准后宣下
同　六年三月一日　御入内
同　年同月七日　立后中宮
文化四年七月十八日　寛宮、爲中宮、御實子被定儲君候段、被仰出也、右寛宮ハ仁孝天皇御叓也、
文政三年十二月十四日　御轉昇皇太后宮、奉稱太宮御所、
天保十一年十一月十九日　光格天皇崩御

同　十二年後正月廿二日　院號宣下新清和院奉稱女院ヶ、
弘化三年二月六日　主上崩御也仁孝天皇崩御實ハ正月廿六日也、
同　年六月廿日　崩御當春、仁孝天皇崩御、仍此節諒闇中也、
同　年七月廿三日　泉涌寺御葬送也
同　四年七月十日　前清和院舊殿、以來後院北殿ト被稱候段、被仰出也、

〔纂輯御系圖〕

第百十七
後桃園天皇英仁
母藤原富子、太政大臣兼香女、寶暦八年七月二日生、明和七年十一月廿四日踐祚、同八年四月廿八日卽位、安永八年十一月九日崩、二十二、葬泉涌寺陵、
○中略、
(以下補)新清和院欣子内親王、母藤原維子、太政大臣内前女、
(執)(近)(譜)

〔傳奏達〕○東京帝國大學所藏本 德大寺實堅武家傳奏記錄(二條往來)所載

○所司代ヘ

女院崩御ニ付、普請鳴物等停止被差免候程合〳〵儀、

弘化三年六月二十日

門院御方〻

崩御〻節ニ別紙〻通、日數區〻相見候、尤御續柄等ニ寄、次第も可有之哉ニ付、勘考候る申入候樣被致度、依之例書被差越、被及御内談候旨、令承知候、然處、

（舎子、櫻町天皇女御）
靑綺門院崩御〻節ニ、當地火災後市中ニ別る家作不建揃時節ニ候得共、格別〻譯を以、普請停止、日數七日ニる被免、渡世〻鳴物ニ、十一日ニる被差免候趣ニ相見、

（桃園天皇女御）
禮門院崩御〻節〻、普請幷渡世〻鳴物共停止、日數十一日ニる被差免候事ニ候得共、於此度ニ、普請ニ來月四日より被差免、

（維子、後桃園天皇女御）（富子、盛化門院）
御葬送迄ニ御間ニ有之候間、以　御憐愍、渡世〻鳴物ニ同日より被差免、

御葬送御當日より、猶又右鳴物停止被申付可然存候、且

御所近邊ニ、渡世ニ共可爲遠慮候、尤御盡七日翌日より渡世〻鳴物、其外共一同可被差免候、仍被差越候例書令返却候事、

六月

〔別紙〕

（房子、霊元天皇中宮）
正德二辰年四月十四日
新上西門院崩御

普請日數廿五日、停止鳴物日數三十日ニる差免、

享保五子年正月廿一日
（富子、中御門天皇女御）
新中和門院薨去

普請日數九日、停止鳴物日數十六日ニる差免、

同年二月十一日
（幸子女王、東山天皇中宮）
承秋門院崩御

普請幷渡世〻鳴物日數十一日ニる差免、

右者御凶事打續候付、末〻難儀可致候間、鳴物差免可然哉、其節〻傳　奏衆被申聞、赦免相觸、

御葬送、相濟不申候得共、普請幷渡世〻鳴物、日數十二日目ニ差免、

御葬送ニ、日數廿五日目ニ相濟候付、惣る〻鳴物ニ日數廿六日ニる差免、

天明三卯年十月十二日

盛化門院崩御

普請幷渡世〻鳴物、日數十二日目より差免、

一同年十一月十三日

御葬送ニ付、同日朝より渡世〻鳴物停止、普請ニ無構、

一渡世〻鳴物其外共、

御葬送御當日より日數廿日目より差免、

右〻通最初日數十二日目より差免、御葬送御當日より又候停止申付、日數廿日目より渡世其外共鳴物差免、都合日數三十日渡世鳴物停止申付、其外〻鳴物ニ、

弘化三年六月二十日

弘化三年六月二十日

崩御御當日より、日數五十日目より差免、

寛政二戌年正月廿九日

青綺門院崩御

普請日數七日停止、渡世鳴物十一日ニ付差免、

御葬送より猶又停止、渡世〻鳴物、惣而〻鳴物共、日數四十日ニ付差免、

寛政七卯年十一月晦日

恭禮門院崩御

普請日數十一日停止、渡世鳴物十一日ニ付差免、十二月廿九日、

御葬送ニ付、廿五日より渡世鳴物猶又停止、渡世鳴物、惣而鳴物共、日數四十九日ニ付差免、

文政六未年四月三日

(繁子仁孝天皇女御)新皇嘉門院薨去

普請日數十日停止、渡世鳴物十日ニ付差免、五月二日、御葬送ニ付、御當日より渡世鳴物猶又停止、渡世鳴物、惣而鳴物共、日數四十八日ニ付差免、

以上

〔土山武宗日記〕○宮内省圖書寮所藏本

七月三日

一從今日觸穢、

一女院樣崩御ニ付、普請鳴物停止〻處、普請ハ明後四日ヨリ差免、鳴物ハ　御葬送マテ御

普請鳴物停止ヲ令ス

間有之、以　御憐愍、渡世鳴物ハ同日ヨリ差免、尙又御葬送御當日ヨリ可爲停止、御所近邊ハ渡世タリトモ可有遠慮旨、被觸候段、御附衆ヨリ被達候旨、昨日觸有之、

〔壬生輔世日記〕○宮内省圖書寮所藏本

八月九日、壬戌、陰、

一○中略、

一就女院御凶事、鳴物停止〻事、職業者以下一同從今日被　免由云〻、

職業鳴物ヲ許ス

〔老中觸書〕○東京帝國大學所藏本　高麗環雜記所載

七月十九日、阿部伊勢守殿御渡貳通○高麗環雜記

阿部伊勢守殿御渡、　大目付ニ○(正弘、老中)令

(本莊遣實者年寄)安藝守殿御渡○弘化丙午三年御觸留

女院、去月廿日、

崩御ニ付、今日ゟ廿一日迄鳴物三日停止候、

但、普請ハ不苦候、

右〻通、可被相觸候、

七月十九日

弘化三年六月二十日

(教令弘化丙午三年御觸留)

二十一日甲戌　忍藩松平忠國、相模・安房沿海防禦不備ノ狀ヲ幕府ニ具陳ス。

〔忍藩城使和田孫兵衛願書〕（○維新史料編纂會所藏本　滿泣輕書所載）

防禦ニ對スル船備大銃少キ旨ヲ陳述ス

弘化三丙午年六月廿一日、浦賀沖ゟ異國船渡來〻節御備方〻儀、松平下總守樣御家來、海岸防禦筋〻儀、御用番（正弘老中）阿部伊勢守樣御勝手迄、御内意相伺候書付、

此度異國船渡來ニ付、警衛船ゟ戰士乘組、相州野比濱沖迄、出船相固メ罷在候處、此度〻異國船行粧不一通ニ付、歸帆被　仰渡候得共、異變を生ー可申も難計候間、歸帆被　仰渡候節も、貫目以上〻大銃、大和守樣（松平齊典、川越藩主）・下總守兩手ニる、異國船ゟ仕掛有之、一倍數大船ゟ仕掛差出候樣、因幡守樣（六代保忠、浦賀奉行）・一太郎樣（初代直方、同）被　仰渡候得共、貫目以上〻大銃數挺〻手當無御座、御臺場ゟ居付有之候大筒も、目方重く、容易ニ船積難出來、急速〻間ニ合兼、且海岸警衛大切ニ付、難取揚、假令數挺〻大銃ニる相仕懸候とも、船打十分〻業も、三百目を限り〻儀ニ付、貫目以上船備〻大銃數挺手當も無之旨申上候處、大和守樣ニるも、大銃多數も無之趣御答申上候、右一太郎樣手厚〻儀も難申旨、御察當有之、恐入罷在候儀ニ御座候得共、船備〻大銃數多無之ニ付、手厚ニ無之旨、被　仰聞候も、迷惑ニ奉存候、

奉行ト忍川越二藩トノ防禦方意見ヲ異ニス

一歸帆被　仰渡候節、異變を生ー候ハヽ、何樣〻策可然哉〻旨、御談有之、大和守樣御家來、大船ニ大銃を仕懸、異船間近備置、打拂候方可然旨、申出候處、浦賀奉行御同案〻趣ニる、御取極ニ可相成哉ニ相聞候付、一旦御席を下り、申談度旨申上置、大和守樣衆ゟ大船〻計策も甚不宜、大船ニ大銃を數挺備置、打拂〻手段、一通り尤ニ相聞候得共、第一進退も不自在、其上千石余積候船ニるも、異船ニ準ー、數挺仕掛候譯ニも難參由、外見計ニる實用無之、若異船ゟ打掛候ハヽ、大船〻底を打碎候ハヽ、一發ニる破船ニ及、仕掛候大銃海底ニ沈ミ、番船〻者共ハ素ゟ空敷溺死致、不辨も可有之哉も申談、其旨奉行衆ゟ可申上候處、御趣意ニ反ー候儀ニ付、一應與力中ゟ及内談候上、申上候方も申談、前書〻趣意與力中ゟ内談仕候處、甚以不許容ニる、今更右樣〻儀申出、此場〻取計如何いたー候心得ニ候哉、此場ニ至り候ても、死を以　公儀ゟ申譯致候ゟ〻外無之儀ニ付、奉行初必死〻覺悟ニ候旨、被申候ニ付、私共方ニても、必勝〻利を極候も、陸地ゟ陣を取、上陸致候ハヽ、打取候手段〻外無之、要害堅固〻大船を、日本〻小船を以爭戰いたー候も、不戰ーて敗北〻姿、眼前〻趣も、兼ねる申上置候旨申談候處、左樣〻儀ニるも、御談難出來旨被申候、勢ひ難止ニ付、必敗軍も乍存、一手〻軍勢討死も覺悟爲極、御差圖〻御趣意相立、大船ニ大銃仕懸候ゟ、相備船軍〻者共ハ、此場ニる必死〻苦戰可致旨申談、其段奉行衆ゟ御答

可仕心得〻所、翌日御呼出ニる、奉行衆御直ニ大船六艘ッヽ、兩家ニ用立候積、船主共ニ聲懸置候間、備方と勝手次第可致、大船ニる嚴重ニ相固候樣御達ニ付、大船ニ大銃を仕懸、相固候得共、最初申上候通、大船と進退自在難相成候付、押送船ニ百目以上〻筒數多相仕掛、追打〻心得ニる、鍛錬〻者相撰、壹人ッヽ乘組、右大船〻間ニ相固罷在、御奉行御手筈〻通相心得、御差圖次第打拂候手筈ニ仕置候處、何等〻故障も無之、穩ニ被仰渡相濟、其後平根山御臺場ニ御呼出ニる罷出候處、異國船少〻故障〻儀有之、此上申渡〻節、如何躰野心差挾、出帆〻節大銃ニるも打拂、警衛船〻内何もニるも打碎候ると、誠ニ大死ニ付、平根山下より觀音崎邊迄、大小船とも一同引上、無滯歸帆いる〻候ハヽ宜候得共、万一江戸海ニ乘入候形勢相見候ハヽ、富津觀音崎〻間要地ニる、死力を盡〻、打沈可申旨、御談御座候ニ付、最初ゟ海岸を嚴重ニ相固罷在、要地を乘入候節と、必死〻働を以打沈可申と、兼る〻計策ニ付、無異儀御請も可申上候得共、右等ハ最初ゟ手筈ニる、且敵船近く相固居候處、故障出來ニ付、警衛船引上候と、臆候樣ニも相見、且と却る疑念を生〻候も難計、右等如何〻趣申上候得共、最早御決心〻樣子ニ付、御差圖〻通、夜〻密〻引上、觀音崎邊海岸近く屯〻罷在候處、七日朝、出帆仕候趣ニる、引船可成丈數艘差出候樣被　仰付、早〻引纏、洲之崎沖迄引出させ候儀ニ御座候、一体海岸近く引取候儀ニ御

風浪荒キ時ハ我小船自由ナラス外船横行ニ委ス

座候得と、觀音崎邊ハ大和守樣御人數罷在候處ニ有之、入混〻進退〻差圖も難行屆候間、富津〻方ニ引退、相固候方相當ニ御座候得共、差掛候儀ニ付、御差圖〻通、觀音崎邊相固メ罷在候、且又滯船中、異國人折〻小船ニ乘、野比濱沖所〻測量〻躰も相見、不審ニ存罷在候處、御趣意も御座候哉〻風聞有之、如何〻儀と奉存候内、異國船測量致候趣ニ付、番船ニる急度心を付可申旨御沙汰ニ御座候付、晝夜心を付、小船ニる用辨罷在候節、三艘ッヽ附添〻者差出候儀ニ御座候得共、風波荒き節と、異船近く相固候在元ゟ假令如何樣亂妨仕候共、海上〻儀と製(制カ)〻がさく、異國〻小船と荒波も不厭、漕歩行候樣子御座候間、數百艘船を以相固罷在候とも、平穩〻日和〻外、何〻用ニも難立、無益〻固と奉存候、一城郭ニ等敷要害堅固〻大船ニ武器夥敷仕掛、全軍船と申聞候由〻處、一二手〻勢數艘〻小船を浮へ、高波〻海上ニ漂ひ罷在、番士徒兵共晝夜ニ苦辛格別〻事ニ御座候間、聊も守衛〻詮無御座候、風荒候ハヽ、直樣海岸ニ退き、波穩ニ相成候得と、間近く漕寄、相守居候處業甚拙き儀と奉存候、尤大船大銃を仕懸、嚴重ニ武威御示〻被成候趣ゟ御座候得共、日本〻大船と、進退不自由ニ付、中〻以武威嚴重〻譯ニと無御座、却る敵方ニ計策〻拙きを見透され候儀共、右等も申上度と奉存候得共、御奉行御差圖を拒ミ、且ハ手薄ニ相聞候姿も、御座候付、御差圖通り、大船借請相固候儀ニる、其實合戰と相成候ハヽ、勝

我大船大銃ノ固メハ全ク無用ノ備ニ過ギズ

相房海上ハ長崎ノ比ニアラズ其警備至難ナルノ事情

利〻期不相心得、番船を初異國船出帆〻節、手向致〻候得ども、大船乘組ども元ゟ、其外番船〻者共ども、空敷討死〻心得ニ御座候處、無滯出船仕候得共、此上再渡來〻節ども、敵〻玉先ニ番船數艘差置(イ、置)、戰士〻者多勢無組候る甚〻不覺ども奉存候間、以來ども異國船番船用辨船見計ニる附置、警衛船ども、何ゟニも要害〻場所、船懸り宜敷所に相固居、海岸ども、又〻手配仕、嚴重ニ相固、江戸内海に乘入候形勢相見候ハヽ、於要地必死〻力を盡〻、防戰仕候方相心得置度ども奉存候、唯今ニも再渡來難計、此度〻御固通ニるども、空敷士卒を溺死爲仕候ゟ、無難ニるも、數日風波ニ漂され、身躰勞ゟ、非常〻用難相勤、防禦〻御用ニ難立哉ども、奉恐入候儀ニ付、數艘〻番船差出〻儀無盡(盡カ)〻處御察被成下、兼る見込〻通、海岸嚴重ニ相固メ罷在、依時宜臨機〻取計候樣致度ども奉存候、免角士卒を勞〻候儀、歎敷奉存候、且又海岸嚴重ニ相固候儀ども、兼る相心得罷在候得共、段〻申上候通、場廣〻儀、中〻以手配行屆不申、長崎表抔ども、兩海岸ニる、凡六七里、海にども千七八町ども申事ニ承(イ、及)およひ、相州路大和守樣御持場ども、内海五六里〻間、浦賀奉行二手ニる御固、下總守持場ども、内海十八里、外海共廿八里〻場所、中〻以小高〻人數ニる嚴重〻固難行屆、甚以心配當惑罷在候儀ニ御座候、就るども此度海岸警衛〻儀も手配〻及候丈ども、精〻申付候得共、甚以手薄〻儀ニる、恐入罷在候(イ、得共)、内海計ニるも十七八里〻海岸、人數行渡不申、心配〻儀ニ御座候、何ゟ追〻可申上候得共、出帆中〻儀、内〻各樣迄荒增申上候間、宜敷御差圖有之候樣仕度奉存候、右ども日本國〻武備、外國に不見透樣仕度奉存候ニ付、不放(敢カ)顧尊慮御内〻申上候間、宜鋪奉願候、以上、

六月廿一日

松平下總守家來
和田孫兵衛

（弘化雜記　大槻清崇雜記）

蘭國商船長崎ニ入津ス

蘭國商船一艘、長崎ニ到リ、幕府委囑ノ銃器及軍艦模型ヲ齎ラシ、且恒例ニ依リ、歐亞ノ時事ヲ報ズ。

〔長崎奉行上申書〕○内閣記錄課所藏本　弘化雜記所載本

阿蘭陀船咬嚩吧出壹艘、人數四拾三人乘組、昨廿一日申ノ中刻、入津仕候、當年〻船數壹艘ニる、跡船ゟ無御座候旨、阿蘭陀人共申之候、則申口書付横文字和解共貳通、入御覽候事、

一阿蘭陀人持渡候荷物帳面ゟ、船中相改、追る差上可申候事、

以上

弘化三年六月二十一日

御老中御連名様

一九八
（直信、日付）
山口内匠
井戸（覺弘、長崎奉行）對馬守

〔和蘭風説書〕○内閣記錄課所藏本 弘化雜記所載

弘化三丙午閏五月、入津、○異船渡來一件

風説書

一當年來朝〻阿蘭陀船壹艘、閏五月廿一日、咬嚕吧出帆仕、海上無別條、今日御當地着岸仕候、右壹艘〻外、類船無御座候、

一去年御當地ゟ十月三日、歸帆仕候デンエルス（イ、デンエルス）ホウト、船號、日數廿七日經、海上無別條、十一月朔日、咬嚕吧着船仕候、於洋中唐船見掛（イ、懸）不申候、唐國（イ、オ、當國ヵ）に罷越候歐邏巴（マヽ）〻蒸氣船壹艘、且阿蘭陀國領地邊ニおいて、歐邏巴（マヽ）〻商船數艘見掛申候、

一去年歸帆（イ、國）〻阿蘭陀船を以、御差送ニ相成候江府ゟ阿蘭陀國王（イ、ナシ）に〻御返翰、ブリツキ軍船の一種、スワーリユ船號、を以、十一月四日、阿蘭陀國に差送り申候、右軍船とカビタイン（イ、ナシ）ロイテナントテルゼー官名、エフセーベーヘツトホーフト人名、ノ支配ニ御座候、且又右御返翰一同被下置候御品〻、十二月十三日、フレガツト軍船の一種、ヤーソン（イ、セーハン）船號、を以差送申候、右船ゟカビタ

蘭領東印度總督ノ更迭

インロイテナントテルゼー官名、イーエフボウリフシユース人名、〻支配ニ御座候、

一阿蘭陀國領地東印度ゴウフルニユール（イ、ユ）ゼヲラール官名、エムデーメルキユス人名、之跡職（イ、ナシ）國王〻命ニ依て、阿蘭陀領地東印度のゴウフル（イ、ユ）ニユールセヲラール官名、オツプルベフエルヘツブルフアンデホルランセゼーエンラント（イ、ヲンセ）（イ、ウマグトオーステン）マグトベオーステンメデカープデクーデホープ官名、〻（ミ脱カ）ニストルフアンスタート官名、兼ゴロートコロイスデルオルデアンデンヲートルランツレーウ官名、イーエスロギユスト（イ、ユ）人名、去年八月廿七日、阿蘭陀國より咬嚕吧に到着仕、即日フイセレシデントフアンデンデンラードワールヲーメンデゴウフルニユールゼヲラール官名、イーセーレインスト人名、とり諸用引請申候、

瓜哇入港ノ船舶數

一去ル辰年、爪哇に船〻船〻千七百六艘入津仕候、右〻内千三百七拾五艘ゟ阿蘭陀船にて、三百三拾壹艘ゟ外國〻船ニ御座候、同年、爪哇ゟ千六百五拾八艘出帆仕候、右〻内千三百三拾八艘ゟ阿蘭陀船にて、三百廿艘ゟ外國〻船ニ御座候、

一去年五月廿九日、アジヤ州中トルコ國〻港ニおいて大火有之、十七時（日本八時半ニ當ル）〻間ニ家數五千軒（イ、餘）燒失ニおよび、貳千四百万ギユルデン（日本拾五萬貫目ニ當ル）〻損失相立申候、

和蘭國王ノ英國訪問

一去年六月比、阿蘭陀國王、エゲルス國に見舞候處、エケレス國女王甚叮嚀〻饗應有之、エケレス軍陣〻フエルトマール（イ、ナシ）シカルク官名、〻禮を取扱申候、

英國女王ノ獨逸訪問

一去年七月頃、エゲレス國女王、ドイツ國に見舞申候、右道中レイン地名、河邊ニ有、プロイス國王待請面會ゐたし、歸路エゲレス國女王フランス國王を暫時見舞申候、

一北アメリカ〻一致國〻内、クイベツキ地名、ふおゐそ出火有之、家數貳千軒燒失ゐあり、九百万ギュルテン日本凡五萬五千貫目ニ當ル、損亡相立、又同國ニーウヨルク地名、ふおゐそ、家數百軒燒失ゐあり候、

一去年十二月比、魯西亞國帝イタリヤ國に見舞申候、

清國ヨリ歐洲ヘ輸出ノ茶

一去年五月廿七日ゟ當正月下旬比迄、唐國ゟ茶左〻高八拾壹艘ニ積分、歐邏巴(マヽ)に運送ゐあり候、

一黑茶　三千三百六拾五万六千三百拾七ホンド、

一青茶　五百八拾万七千五百貳拾四ホンド、

〆三千九百四拾六万三千八百四拾壹ホンド、

此斤數、凡三千三百万斤餘、

但、壹ホンドハ八合餘ニ當ル、

一當年正月廿一日、薄暮、アトラン海シンヘレナ嶋名、港ニおゐて、海震有之、始〻程ゟ不烈候得共、終夜次第ニ烈敷相成、翌日ニ至り、船繫りゐあり居候拾三艘〻船及破損、陸手おいてハ損毛(イヽヒ)不少有之候、

一爪哇近邊ニ有之候バリー島の近邊ニおいて、ビリソング(イヽヒリング)地名、〻船と阿蘭陀國〻船と出會〻節、旗引揚候義ニ付、出入有之、且同所國王と阿蘭陀國領地東印度奉行所と申究有之候處、ビリ、ング(イヽヒリング)〻國王相背候ニ付、海陸軍〻内一組バリー嶋ニ差向申候、右ゟ全く是迄〻主意を相立候ためニ御座候、夫ゆへ當年閏五月五日、パレイン邑〻東方(イヽヒ)ゟ陣を構へ、其上船手〻援兵有之、石火矢六拾挺備有之候同所を責(マヽ)取申候、翌日ニ至り、右軍勢シンガレデイヤ地名、ふ趣(マヽ)き、速り王〻城邑を取卷、其後燒拂(イヽヒ)候、多分其王ゟ纔〻近習と共ゟ、山中ニ逃去候ゟ被察申候、

一爪哇中物靜ニ御座候、此節咬嚼吧より御當所に〻洋中ニおゐて、唐船見掛不申候、

右〻通、船頭幷通詞ゟ阿蘭陀　かひゐん承(イヽヒ)り申上候ニ付、和解差上申候、

かひゐん
よふせゆゐんまゐ
まひたん

（異船渡來一件）

午六月廿一日

弘化三年六月二十一日

通詞目付　本木昌左衛門

〔和蘭船來着屆〕（○弘化雜記所載）

弘化三年丙午年六月廿一日、紅毛商賣船壹艘入津、此分ハ例年渡來〻船ニゐ、事替義無之候、

一剣付筒（小筒ニゐ玉目八匁）　百挺

同　西與一郎
通詞　楢林鐵之助
森山源左衛門
植村作七郎
小川慶左衛門
西記志十
志筑龍太
岩瀨彌七郎
名村貞五郎
横山源吾
楢林定一郎

一鐵鑄立モリチル（ステイン玉量目五十ホント凡拾四貫匁餘）　壹挺
一フレカット〇モーレン（異國軍用船ニゐ極念入鑓形之）　壹組

右〻通、
公儀御用ニ付、持渡被　仰付、追〻御用意ニ相成義と奉存候、

右持渡品書

午阿蘭陀船本方

一色大羅紗　五十反半　但（猩〻緋十反黑大二反）
一同ふらた　二十反
一同小羅紗　十反
一同羅脊板　十反
一同ゐゐ（マヽ）ととん　百反
一同吳羅服連　十七反
一同杢織同　十反
一同テレフ　廿一反
一奥嶋類　千四百七十六反内（新織九百反上奥二百反並三百七十六反）

弘化三年六月二十一日

弘化三年六月二十一日

一皿紗　千三百反
一辨柄同　千八百反
一上皿紗　百十九反
一赤金巾　百反
一メリノス　廿反
一ヒケイ　廿八反
一象牙　二千二十斤程
一丁子　六千二百二十斤程
一胡枡（椒カ）　一万三千四百四拾貳斤程
一白砂糖　六十貳万五千斤程
一蘇木　十五万六千百四十五斤程
一錫　三万六千三百斤程
一鉛　貳万六千斤程
一龍脳　廿七斤程
一人頭銀錢　數三千五百

一荷包船　五千二百五斤程

別段商法

一紫柤　五百二十斤程
一水銀　貳千十七斤程
一象牙　六百二十二斤程
一周豆　五千二百七十五斤程
一苗香　三万斤程
一蘇木　六百二十斤程
一人參　一万九百十斤程

別段持渡り

一蘇木　二十四反
一奥島　半反
一色大羅紗　十五反
一色吳羅服連

弘化三年六月二十一日

弘化三年六月二十一日

御用御誂

一奥島　二百反
一色海黄　百反
一龍脳　三十斤程
一白金巾　百反
一ろ皿紗　百反
一咬嚼吧暦　壹冊
一濘海暦　同
一ろ皿紗　百十三反
一は同　十二反
一劍付筒　百挺　但小道具添
一火打石　數一万
一書籍類　二十一卷
一帆木綿　一ッ
一金袂時計

但、金長鎖付、　壹挺
一鐵鑄筒五十ホンテンステンモルチール　一挺
但、ホンベン玉其外道具類添、
一フレガットモーレン
但、極念入〻軍船〻雛形之、
〻

脇荷

一硝子器類　四十二箱
一硝子板　二箱
一硝子鏡類　一箱
一燒物類　四箱
一小間物類　十貳箱
一酒類　十箱
一羊毛　壹俵
一同皮　貳箱

弘化三年六月二十一日

弘化三年六月二十一日

一ブレツキ板　拾箱
一マルムス石乳鉢大小　三十八
一藥種類　五拾四箱と三桶

但、内譯凡左〻通、

ホツクホウプートル　千三百七十斤
白サポン　五百斤
青同　六百斤
飛同　貳千七百八十斤
セメンシーナ　百四十五斤
キナソウナ　貳拾瓶
セーアユイン　百貳十壹斤
テリヤアカ　七百鑵
タンキリ　千四十斤
サフラン　百九十六斤
タマリンテ　八百貳拾斤

右〻外、例〻藥種類桁〻有之候得共、有來候品略ス、

一水牛角　九千三百斤
一目爪　千七百五拾斤
一籐　三万九十五斤
一白柤　三千百貳拾斤

品代り

一類達皿紗　五百廿反
一花毛氈　五拾反
一アラビヤコム　千五百斤

〃

文成尼王御不例ニ付キ侍醫ヲ遣サル

二十二日乙亥　圓照寺宮大機文成尼王○有栖川宮織仁親王女　薨ズ。

〔示羊記〕○野宮定祥日記　宮内省圖書寮所藏本

六月四日、丁巳、天晴、圓照寺宮依不例、醫師被願申候間、小林豐後守可被遣、伊豫被申出、

東坊城（聡長）示達、參朝〻上、被商量了、取次面會被申渡御内儀、其旨○中被申入、以前殿下被申入了、略、（壬生敬子、命婦）

弘化三年六月二十二日

鳴物停止ノ件

廿三日、丙子、天晴、〇中略、　圓照寺宮薨去ニ付、廢朝有無〻事、武傳吟味〻所、先住先〻住、雖廢朝、寶曆四年爲靈元院皇女、猶無廢朝、仍今度無廢朝、可然殿下被命、雖不被止物音、是亦當時被止物音中〻間、別不被伺旨、薨奏一紙、（容躰書添）、武傳被附、以女房申入、可爲伺〻通、被申出、武傳申渡了、

〔土山武宗日記〕〇宮内省圖書寮所藏本

三ケ日宮中物音停止

六月廿三日

一圓照寺宮、昨廿二日、薨去ニ付、從今晩三ケ日、宮中被止物音候得共、此節之故、別段被仰出無之候段、職分ニテ傳奏衆ヨリ被相觸、御内儀ニテハ、別段觸無之、

〔有栖川宮系譜〕〇孝明天皇紀所載

大機（織仁親王女）文成尼王、天明七年正月十六日、誕生、號淑（ヨシ）宮、寛政十年正月、入于圓照寺室、享和元年三月、得度、十五歲、文化十三年五月、爲光格天皇御養子、弘化三年六月廿二日、薨、六十歲、七月五日、葬于山村、號常應心院宮、

〔老中達〕〇維新史料編纂會所藏本　教令所載

大目付ヘ

圓照寺宮、去月廿二日、薨去ニ付、

（徳川家祥、後家定）右大將樣御母方御伯母定式半減〻　御忌服可被爲　請處、　御忌日數相立候ニ付、今日一日御遠慮可被遊候事、

七月十九日

徳川家祥一日遠慮

〔高麗環雜記〕〇東京帝國大學所藏本

徳川家祥忌明

右大將樣御忌、今日ヶ被爲　解候樣、

公方樣ヶ被　仰進候ニ付、最前相觸候、明日出仕等〻儀、最早不及其儀候事、

右大將樣御忌解ニ付ゐて、不及出仕候事、

右〻通、向〻ヘ可被相觸候、

七月廿日

（弘化年錄）

老中阿部正弘、琉球外艦ノ事アルニ依リ、鹿兒島藩主島津齊興ニ問フニ其沿海防備ノ狀態ヲ以テス。齊興、乃チ狀ヲ具シテ之ニ答フ。

〔鹿兒島藩城使早川五郎兵衛書翰〕〇公爵島津忠重所藏本　島津家國事執掌史料所載

〇同藩家老調所廣鄕宛

弘化三年六月二十二日

領内ノ海防處置ニ就テ問フ

右御用人中ヨリ致面會度儀御座候間、今日中御勝手迄罷出候樣ニトノ切紙致到來、罷出候處、今般琉球國ヘ異國船渡來ニ付、先達而御伺被成候儀有之候處、御手前樣御呼出、御直ニ品々被仰含置、猶

（島津斉興）太守樣ヘモ御直話被爲在候ニ付而者、定而少將樣（島津斉彬）ヘモ御趣意被仰進候儀共者、無御手拔御取計（行カ）爲被爲在筈之御事ナカラ、此節之儀者不容易御筋合故、イツレ

少將樣御旅中ニテ御承知相成、國許　御光着ノ上、則御取扱無御座候而者、御不都合ニモ被思召、誰ソヘ厚ク被仰含、可被差遣儀ニ候哉、極内御模樣被成御承知度、左候而御領内之儀者、海岸引受之場所柄ニ付、被仰進迄モ無之、防禦筋古來ヨリ御嚴重之儀トハ被思召候得共、此節之儀付而者、別段御備場所可被相重儀共ニ而モ可有之哉、尤右御備場等何方ヘ何ケ所御究之場所聢ト御辨ヘモ不被成候間、御心得迄ニ、是又被成御承知度、且又

少將樣御當地　御發駕前、伊勢守樣（阿部正弘、老中）御方ヘ　御出逢之砌、何レ御國元御着之上ハ、海岸諸

御老中
阿部伊勢守樣
御用人
高木三太

所御臺場等御見廻リ被爲　在、猶御備之式モ有之候ハ者、別而御嚴重之方ニモ可有之哉之趣共、御噺合被成置候、定而右等者、

太守樣ヨリ　少將樣ヘ御嚴重之御取計向、悉ク爲被仰含筈ナカラ、右樣御取計モ御座候ハ者、可御宜哉、猶又被仰進度ト思召候、右廉々之儀者、御續柄ト申シ、殊ニ別而御親敷御事ニ而、此節之儀者實ニ不容易御筋合、

此御方樣御同樣ニ御配意被成候ニ付、御失敬ト被思召候得共、御心配之餘リ、右等極御内々被仰聞候趣トモ、右三太ヲ以テ致承知候間、則可申上、御手前樣ヘモ御達申上、何レ其上御答等ニ可被及旨、程能演說仕置申候、

右之通、今夕私相勤、此段申上候、以上、

午六月廿二日　　早川五郎（敬）兵衛（使）

笑左衛門（諏訪廣郷、江戸詰家老）樣

追而、申上候右三ケ條之内、

御旅中ヘ爲被仰進候哉之御廉者、明日モ御答可被仰進方ニ可有御座哉、其外之儀者御取調之上、御書出ニモ相成可然儀ト奉存候、此段モ申上候、以上、

特使ヲ下シテ齊彬ノ後ヲ追ハシム

右御勝手へ參上仕、右三太へ出會、昨夕御内々御尋被爲在候廉々、
太守様へ御直ニ申上候處、當時御役柄之御儀ナカラ、別段之御譯ヲ以被仰進候趣、被遊御
承知、忝被思召候、先達而御手前様へ品々被仰含、太守様へモ、御直話被爲在候趣、不容易
御筋合ニ付、則御側御用人御留守居兼大迫源七・御使番新納四郎右衞門へ厚ク御意味合等
被仰含、中途差急キ、
少將様御旅中へ被仰進候ニ付、御承知之上者、猶又御差圖モ可被爲　在候、尤右兩人御國
元迄被差遣御家老中へモ被仰達、夫ヨリ四郎右衞門儀者、琉球國へ可致渡海、猶於御國許
モ御番頭之者渡海被仰付置候ニ付、御達之趣、厚ク被仰含、四郎右衞門一同以飛船被差渡、
中山王幷攝政三司官へ御厚キ御趣意之程、難有爲承知、異國人共へ申諭、無異儀取計、其外
御取締向等之儀共、分而被仰付越候、且又
少將様御國許　御光着之上、海岸諸所御見廻等之儀者、御發駕以前、

御老中
阿部伊勢守様
御用人
高木三太

海岸警備ノコトハ書面ヲ以テ答申セン

太守様ヨリ御品々御嚴重之御取締向、綿密ニ被仰含候事故、定而右等之御手續可被爲　在
御事ナカラ、被仰進候趣者、近便ヨリ被仰遣筈ニ御座候、海岸之儀者、東南西手廣ク御引受
之御領内ニ而、古來ヨリ防禦御備モ被定置、聊御手拔者無之候得共、猶又此節一涯御手厚
ク御取計之御差圖可有之候、乍去御備向等以前ニ相替不申候、右諸所場所柄等之儀者、先
前ヨリ御屆被仰達置候通之儀ナカラ、御取調、兩三日中御書出可被成、旁之儀共程能演說
仕置候、且以來何篇思召被付タル御廉モ御座候者、聊無御隔意被仰進候樣被遊度　思召候
趣共、猶又御挨拶取繕申述候處、伊勢守様唯今御用御取掛ニ付、追而可申上御委敷御返答
之趣、御承知被成候者、嘸御安心御大慶可被成旨、右三太ヨリ承申候、
右之通、今夕私相勤、此段申上候、以上、
午六月廿三日　早川五郎兵衞
笑左衞門殿

御老中
阿部伊勢守様
御用人

其狀ノミニテハ嫌疑ノ虞アレバ重臣ヲ遣サン

右御勝手へ參上仕、右九十郎へ出會、先達而極内々御尋等之趣御達ニ付、御返答被仰進置、猶御領内海岸御備等者、先前ヨリ被仰立相成居、此節之一條ニ付而モ、何篇爲相替儀無御座候得共、防禦御手當筋之儀、委ク御書面御取仕建有之、可被差出、猶又得ト御勘考被爲在候處、伊勢守樣ニモ別而御配慮被成、御手厚ク被仰進候趣、被遊　御承知、別而忝被　思召候ニ付、外々へ被差出候儀者無御座候得共、御別段之御譯柄ヲ以、海岸筋御麁繪圖被相添差出、併右御繪圖而已御一覽被成候迄ニ而者、御惑之基ニモ可相成哉、就而者御手前樣、度々御逢モ爲有之事、其上海岸筋等御辨へ之儀故、被差出不苦候ハ者、ケ樣々々ト申儀御屆被成進候ハ者、御樂ミ御安慮可被爲在趣共、御口上取繕申述候處、伊勢守樣具ニ被成御承知、此御方樣御厚キ　思召之程千萬忝至極、御尤ニ　思召候、被仰進候通、御書而已被差出候而モ、御繪圖面被相添候得者、猶又御心得ニモ可相成候得共、又却テ御疑ヲ被爲增候歟ニ付、聊モ不苦候間、御手前樣被差出度、勿論彼ノ御方ヨリモ被仰進度程之儀ニ而、別而々々御大慶被成御逢之砌、委細被仰上候者御安心、且者御心得ニモ可御宜、早速御逢之思召ニ候得共、當分御同席樣御人少、殊ニ來月御用番ニ付、前廣御調事モ有之、頓ト御寸暇無御座候間、近日中御繰合御手透之砌、可被仰進、右旁御相應可申上旨、右以九十郎被仰聞候間、

服部九十郎

御返答之趣承知仕、可入御聽旨、程能演說仕置候、

右之通、今夕御内使者私相勤、此段申上候、以上、

午六月廿八日　　早川五郎兵衞

笑左衞門樣

追而申上候、本文之通、近日中御逢ニ付而者、御都合次第、私共迄可被仰遣候間、左樣御心得居候樣御沙汰之趣、右同人ヲ以致承知候間、此御方樣、何ッニテモ御差支者無御座筈候間、御達被下候ハ、、則可被成御出旨、是又申述置候、以上、

〔鹿兒島藩江戸詰家老用狀〕○島津家國事御掌史料所藏

○七月四日國家老宛

右者、先月廿二日、御用人中ヨリ御留守居へ面會イタシ度、御勝手迄罷出候樣申來、早川五郎兵衞罷出候處、琉球へ異國船渡來ニ付、先達而御伺被成候儀有之、拙者へ御直ニ品々被仰含置、尙

太守樣ニモ御直話被爲　在候付テハ、定而少將樣へ御趣意被仰進候儀共、無御手拔御取計之筈ナカラ、此節之儀ハ不容易御筋合故、

領内沿岸警備ノ狀況ヲ報告スベシ

少將樣御承知相成、御國許
御光着之上、則御取扱無之テ者、御不都合ニモ被思召候付、誰ソヘ厚被仰含、爲被差立儀ニ
候哉、極内御模樣被成御承知度、且御領内之儀海岸御引受之場所柄ニ付、被仰迄モ無之、防
禦筋古來ヨリ御嚴重之儀ト思召候得共、此節別段御備場所被爲相重ニテモ可有之哉、右御
備場所何方ヘ何ケ所御究之諸所御辨モ不被爲　在候間、御心得迄ニ被成御承知度、且
少將樣御發駕前、伊勢守樣ヘ御逢之砌、イツレ御國許御着之上者、海岸諸所御臺場等御見
廻リ、尙御備向之儀モ有之候者、御嚴重之方ニモ可有之哉之趣共、御嘶合モ被成置、右等者
定而　太守樣ヨリ悉〳〵被爲仰含タル筈ナカラ、右樣御取計モ被爲　在候者、可御宜思召候、
右廉者御續柄、殊ニ別テ御親敷御事ニテ、此節之儀、實ニ不容易御筋合、
此御方樣御同樣御配意被成候付、御失敬ナカラ、御心配之餘リ、極御内々被仰進候ト之趣、
御用人ヲ以致承知候段、申出候付、達
貴聞、翌廿三日、被仰進候趣共、
太守樣委細被遊
御承知、別而忝御大慶被　思召候御直話等之廉々、不容易御筋合ニ付、則御側御用人御留
守居兼大迫源七・御使番新納四郎右衞門ヘ厚御意味合等被仰含、中途差急

沿岸防備報告書作成ニ關シテ打合セヲナス

少將樣御旅中ヘ被仰進候ニ付、
御承知之上者、猶又御差圖モ可被爲
在、左候テ御國許ヘモ被遣、御家老中ヘモ被仰達、夫ヨリ四郎右衞門ニ者琉球ヘ可致渡海、
尙於御國許モ御番頭之者渡海被仰付置候付、御達之趣厚被仰含、四郎右衞門倶々飛船ヲ以
被差渡、中山王初攝政三司官ヘモ　御趣意之趣難有承知爲仕、異國人共ヘ申諭、無異儀取
計、其外御取締向之儀共、分而被仰付越、且　少將樣御光着之上、海岸御見廻等之儀者、綿
密ニ　太守樣ヨリ被仰含候御事故、右等之御手續可被爲　在候御事ナカラ、被仰進候趣ハ、
猶又近便ヨリ可被仰進、且海岸防禦之儀ハ聊無御手拔候得共、此節一涯御手厚御取計者有
之候得共、御備向等以前ニ相替候儀ハ無之、尙取調御書上可被成トノ趣共、程能御返答被
仰進候、左候テ海岸防禦筋之儀、去ル寅年、別紙書拔帳面之通御屆相成居候付、右ヘ基キ、
尙致吟味、別紙之通被差出筈候、然處御領内之儀、三方海岸ニテ御臺場等兼而究置候樣ニ
者難被成候付、海岸麁繪圖可被差出、乍然繪圖御一覽迄ニテ者御疑之基ニモ可相成哉、拙
者儀度々御逢モ爲有之事候付、不苦候ハヽ、被差出、ヶ樣々々ト申所御聞屆モ被成進候者、
御互ニ御安慮可被爲　在趣共、先月廿八日、被申込候處、伊勢守樣被成御承知、御厚キ　思
召之程、千万忝、至極御尤ニ思召候、聊モ不苦候間、拙者被差出度勿論、彼御方ヨリ被仰進

度程之儀ニテ、御大慶被成候、仍テ早速御逢之思召ニ候得共、當分御同席様御人少、殊ニ當月御用番ニ付、前廣御調事等有之、頓ト御寸暇無之候ニ付、近日中御繰合御逢可被成トノ御返答有之候、就テ者別紙御屆書等御互ニ御安慮可被爲　在趣共、被仰込候處、委細被成御承知、御繰合御逢可被成トノ御事候ニ付、御屆書等持參、御直ニ委細申上賦之段ハ、先便申越通ニ候、然處去ル六日五ツ時罷出候様、前日御用人中ヨリ御留守居迄申來候付、參上、御勝手ヘ罷通、御用人ヘ出會、御答書等御留守居ヨリ差出、無程御逢之席ヘ御用人致案内候付、次之間ヘ扣居候處、御小書院二之間ヘ御出、是ヘト御沙汰有之候付、御側近ク相進ミ繪圖面等ニ而、防禦之儀ハ勿論、三ケ國御領内ニ而者、諸郷百二拾餘ケ郷有之、其郷々都而士被召置、又他國境ニ者、堀切リ有之、諸所ヘ番所被建置士番被召置、海岸他國境共、兼而嚴重ニ被仰付候段モ序ニ申上置候、然處右様何歟御備モ御行屆之儀ト、拙者持參細事御直ニ申上賦ニ候、此段極御内用ヲ以申越候條、

少將様可被達　御内聽候、以上、

午七月四日

調所笑左衞門

島津豐後殿（久寶、國家老）
島津壹岐殿（久武、同）
島津石見殿（久淳、同）
島津將曹殿（久德、同）

右ニ付、海老原宗之丞（側役）ヘモ書拔等相添申越候、略ス、

右回答

本文致承知、

少將様達　御内聽候、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

午八月五日

御老中

阿部伊勢守様

〔鹿兒島藩城使半田嘉藤次書翰〕（○島津家國事鞱掌史料所藏）

○七月六日同藩家老調所廣郷宛

右ヨリ海岸防禦御手當之儀ニ付、先達而御内々御尋被　仰進候趣有之、右御答書幷御繪圖面等被差出度、併書面等迄ニ而ハ、事情御分リ兼候儀可有御座ニ付、御手前様被差出、御直

調所廣郷阿部正弘邸ニ至ル

ニ亘細被仰上度旨、先日被仰入候處、今朝五時被差出候樣、昨日御用人中ヨリ之切紙致到來、今朝御參上ニ付、私致御同伴御勝手ヘ罷通、御用人山岡衞士ヘ出會御出之趣申述、且本行書面等差出置候處、無程御用人服部九十郎出會、御逢之席ヘ御通候樣致御案内、御次之間ヘ被成御扣候處、直ニ御出座被成御進候而、御領内海岸防禦御備等之儀、巨細ニ被爲仰上候由御座候、左候而直ニ御披キ、御門前ヨリ再ヒ御立歸、御逢之御禮、右九十郎ヘ被仰置候、

右之通、今朝御同伴私相勤、此段申上候、以上、

午七月六日　半田（城）嘉藤（使）次

笑左衞門樣

追テ申上候、御逢相濟候ニ付、

太守樣ヨリ御挨拶之御使者立歸リ、九十郎ヘ御相應申達置候、此段モ申上候、以上、

〔鹿兒島藩使者口上書〕○島津家國事史料所収

○七月六日老中阿部正弘宛

薩州御領内之儀、海岸引請之場所ニ付、防禦筋往古ヨリ嚴重之義ニ可有之ト被思召候得共、此節柄別段御備場所等爲被相重ニ而モ可有之哉、右御備場所何方ヘ何ケ所、

薩藩領内ノ警備

究リ之諸處、御辨ヘモ不被爲　在候間、御心得ニ御承知被成度、且　修理大夫樣御發足前御逢之砌、御國許御着之上者、海岸諸所御見廻モ有之、尙御備向嚴重有之度趣共、御噺合モ被成置候、定而　大隅守樣ヨリ委細爲被仰含筈ナカラ、右等尙又被　仰進度、被思召候、右者御續柄、殊ニ別而御親敷御事ニ而、此御方御同樣御配意被爲　在候付、極御内々被　仰進候趣共、大隅守樣被成御承知、不一通御懇切之御事共、別而忝御大慶思召候、依而御領國中海岸防禦旁之儀形行、左ニ申上候樣被仰付候、

本文ニ付、寅年御屆相成候別紙之儀ニ而、異國船渡來之節、以來取計向、從公儀被仰渡候一卷帳ニ有之、尤異國船御手當入箱ヘ入附有之候爲見合記置候事、

御領内儀西南之端ニ而、北一方地方ヘ相續東南西者、皆共數十里之間、大洋海ヲ請候國柄、其上島々ヲ抱ヘ、長崎最寄第一之異國口ニテ、折々異國船等致漂來候故、往古ヨリ薩隅日共數多之郷々相分置、其郷毎ニ城郭ニ備リ候場所ヲ城山ト號シ、其麓ニ士族數多居住罷在、地頭假屋ト唱、平日年寄幷組頭等之役目申付置、右假屋ヘ役所ヲ建、致日勤、尤御用人等以上之者ヘ地頭被　仰付置、一郷中之仕置被任置候ニ付、兼而何篇致差圖士共ニ者、組頭支配ニ而、學文武藝等致修練候事ニ御座候、勿論異國船等漂着、依時宜者地頭モ出張、致下知候儀ニ御座候、且又他國境ハ堀切等申付、通路口ニハ士勤番所建置、海岸之場所ハ、猶以右

地頭假屋

假屋

同様ニテ、假屋ニ大筒ハ勿論、防禦之武器、悉ク格護有之、右通大洋海ヲ請候場所ハ、平日油斷難相成候間、遠見番所數十箇所建置、晝夜共士勤番申付、白帆之異國船等帆影相見得候得者、致相圖候ニ付、年寄組頭其外士共、兼而御手當之人數則其場ヘ駈セ付、勿論近郷方限ヲ以、組合定メ置候ニ付、早速漂着場ヘ駈付候儀共、兼而嚴重申付置候事ニ御座候、尤モ御城下ヘハ、異國向之義一篇ニ承候役所被建置、御家老之内壹人、御用人二人、其外數多之役目差分置、注進次第直ニ出張、様子次第ニハ御手當之人數幾組モ追々被差出候御手當ニ御座候、尤掛役目之者毎度郷々差廻武器之改方、又ハ手配等之義嚴重申付候儀ニ御座候、

異國船掛

數十里ノ大洋海ヲ引請候得ハ、湊之外海岸ニ人家建置候場所數多御座候ニ付、風並次第ニハ異國船何方ヘ渡來モ難計、兼而壹場ト究置候様ニハ難致候付、前條通假屋ヘ炮器等致格護置、異國船漂着之節ハ、直ニ其場ヘ繰出、近郷ヨリモ同様繰出其外駈付、人數モ身分ニ應シ、所持之大筒小筒等持越候儀ニ御座候、

修理大夫様御國許御着之上者、諸所御巡見被成候而、尚御備向嚴重御下知御座候様、

山川港ノ警備

大隅守様ヨリ被仰含、第一山川ト申所、去ル酉年モ異國船漂來之場所、勿論琉球等ヘ渡海之湊口故、往古ヨリ番所被建置、大筒等被備置候得共、尚又近年ハ大筒等被相重、御城下ヨリ掛リ役目之者多人數、兼而出張居、其外郷々ヘモ目附役之者被差出、漂着船等之節、手配ハ勿論、御城下ヘ注進等之儀無手拔、致下知候様申付、差出置候儀ニ御座候、

右者、異國船御手當向鎖細ニ申出候様、去ル寅年被仰渡候付、其砌御屆申上候ニ、何モ相替義ハ無御座候得共、度々被仰渡之趣モ御座候ニ付、前條申上候通、異國船方掛御役々繁々郷々ニ被差廻御手當向等、尚嚴重申付聊無手拔様取計仕候義ニ御座候、去ル寅年異國船御手當向御屆申上候、別紙寫三通相添、此段御内々申上候様、被　仰付候事、

七月六日　半田嘉藤次

右書面ニ相添、

一口演書一通

但、御領内海岸防禦筋之儀ニ付、御内々御尋之趣有之、委細御答之儀ニ付、私名前、

一右ヘ相添御國元亀繪圖一枚

一書附一冊

但、海岸防禦筋之義付、天保十三寅年　公邊ヨリ御達之趣有之、往古ヨリ御嚴路御手當御治定之廉御屆被仰達候、井上逸作名前ノ書附寫

〔鹿兒島藩江戸詰家老用狀〕○島津家國事掌史料所藏

○七月十六日國家老宛

御老中　阿部伊勢守様

右者、海岸防禦御手當筋御内々御尋之趣有之、右御答書幷海岸麁繪圖被差出度、乍然麁繪圖御覽迄ニテ者、却而御疑之基ニモ可相成哉、拙者儀度々御逢モ爲有之事候付、被差出、ケ様々々ト申所委敷御聞屆被成進候者、承居候、如何様左様之御事ニ候半ト、御沙汰之事ニ候、別紙首尾書相添、此段申越候條、

少將様可被達　御聽候、以上、

但、御答書等者先便差上越置、相替儀モ無之候付、別段不差越候、此段者爲御心得ニ候、

午七月十六日　調所笑左衛門

島津豐後殿
島津壹岐殿
島津石見殿
島津將曹殿

右ニ付、海老原宗之丞ヘモ申越候、

右回答

本文致承知、

少將様達　御聽、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

午八月十五日　御老中　阿部伊勢守様

老中阿部正弘ヨリ琉球警備ノ兵數ヲ問ヒ來ル

○此後、阿部正弘、再ビ琉球警備ノ兵數兵器ヲ内問シ、鹿兒島藩、其員數ヲ擧ケテ之ニ答ヘタリ、以下參考ノ史料ヲ載ス。

〔鹿兒島藩城使早川五郎兵衛書翰〕（○島津家國事掌史料所藏）

○同藩家老調所廣郷宛

右御用人中ヨリ掛御目度儀有之候間、四五日之内、御勝手迄御壹人被成御出候様ト之儀、切紙到來仕、私罷出候處、高木三太致出會申聞候趣ハ、一昨年琉球國ヘ異國船渡來ニ付、其節御人數被差出、又追々同様致來着候付而者、增御人數等モ被差出相成爲申哉、尤先達而、御手前様ヨリモ伊勢守様ヘ御直ニ被差渡置候御人數等之儀モ被仰上置候故、大意御承知之御事ニ者候得共、當時ニ至リ、上下何人、又者琉球ヘ御定例以前ヨリ、何人御差渡相成居リ候哉、且又大炮幷小筒之儀モ同様、何挺ト申儀迄モ、委細書面ニ而御差出相成候様被仰聞候、右者表立御達ト申儀ニ而者無之、伊勢守様全ク御心得ニ御承知被成度ト之趣ニ御坐候間、何モ御差急之儀ニ而無御坐、兩三日中被差出宜旨、右同人ヨリ申聞候間、委細奉畏候、則

弘化三年六月二十二日

琉球警備ノ薩藩兵數錄上書

弘化三年六月二十二日

太守様へ申上、イツレ御取調之上、兩三日中御指出相成候様可致、旁差含居呉候様申演置候間、御吟味之上、御書面御取仕立可被差出儀ト奉存候、此段申上候、以上、

午十二月十三日

笑左衞門様

早川五郎兵衞

○十二月十六日

琉球國へ一昨年異國船渡來、其節人數被差渡、又追々來着ニ付、增人數被差渡候人數等之儀者、大意御承知之御事候得共、當時ニ至リ、上下何人、又者以前ヨリ定例何人差渡相成候哉、且大炮幷小筒何挺ト申所、御承知被爲在度承知仕、左之通御坐候、

備二組

一番頭二人、其外鑓・弓・銃炮奉行以下六百九拾六人、

但、一組三百四拾八人ツヽ、

右之通、兩度ニ差渡置候人數ニ御坐候、

一物頭壹人、其外代官役以下上下百人餘、

右、定例差渡置候人數ニ御坐候、其外足輕格式之者等二百人餘罷渡居、右外ニ運送大船、年々二十艘餘居船御坐候付、小者以下急變之節、入用之場所へ者、右水主等召仕申候、

一五百目ヨリ壹貫目内外ノ大炮二十挺、

内、拾挺兼而差渡有之候、

一小筒五百挺、

兵數錄上書ヲ阿部閣老ニ呈ス

内、二百挺、兼而差渡有之候、

右外、小筒之儀ハ、自分銃炮銘々持越、壹人ニテ二三挺、其上ニモ持越候者モ有之、極而之員數難申上御坐候、

一銃楯之板三拾挺、

右、一昨年差渡申候、

右之通御坐候間、御内々申上候様被仰付、此段申上候事、

書付一通

但、一昨年琉球國へ異國船渡來付、追々御人數被差出、當時ニ至リ、上下何人、又同國へ定例以前ヨリ何人被差渡候哉、且大炮幷小筒等之員數迄モ書面ニ而御内々御承知被成度、御答之儀付、

御老中

阿部伊勢守様

御用人

山岡衞士

右御勝手へ持參仕、右衞士へ出會、先達而御内々御心得迄ニ御尋被爲在候廉々、

太守様へ具ニ申上、御取調相成、右書面被差出候旨演說仕、差出申候處、伊勢守様御承知被成御落手候由、併御不審之御廉、又者御尋被成候儀モ有之候ハ者、可被仰聞ト之趣、同人へ承申候、奉畏何ニ而モ被仰越被下候ハ者、則罷出相伺候様可仕趣共程能申述置申候、

右之通、今朝私相勤、此段申上候、以上、

午十二月十六日

笑左衞門様

早川五郎兵衞

弘化三年六月二十二日

琉球警備兵數ヲ阿部閣老ニ上申セル旨ヲ報ズ

弘化三年六月二十二日

〔鹿兒島藩江戸詰家老用狀〕○島津家國事顧問史料所藏

○十二月十八日國家老へ

御老中

阿部伊勢守樣

右者、御勝手迄御留守居御呼出付、早川五郎兵衞、去ル十三日罷出候處、琉球國へ一昨年異國船渡來之節、御人數被差渡、又追々致來着候付、增御人數被差渡候儀、大意御承知ニ者候得共、當時ニ至リ、上下何人、又者御定例以前ヨリ何人御差渡相成居候哉、且大砲竝小筒之儀モ何挺ト申儀書面ニ而差出候樣、右者表向御達ト申儀ニ而者無之、全御心得御承知被成度、御用人ヲ以被仰聞候段、別紙首尾書之通申出候付、得ト致吟味、達　貴聞、別紙○前掲ノ兵數錄上書ヲ指ス　寫之通、去ル十六日早川五郎兵衞持參、御勝手ヨリ差出候處、伊勢守樣御承知被成、御落手候段、御用人ヲ以テ被仰聞候段、是亦別紙首尾書之通申出候付、相添、此段御内用ヲ以申越候條、少將樣可被達　御聽候、以上、

午十二月十八日

島津壹岐殿

島津石見殿

島津將曹殿

調所笑左衞門

柳河藩主立花鑑備左近將監卒ス三月二十四日

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

是日、從弟次郎鑑寛○後左近將監○立花壽淑男封ヲ嗣グ。

三月廿二日

誓詞見屆トシテ戸川安鎭ヲ差遣ス

立花左近將監病氣ニ付、在所ニ而ハ隱居幷養子相願候、依之誓詞判元爲見屆可被差遣間、可致用意候、

右、於御右筆部屋緣頰、若年寄中出座、遠藤但馬守(胤緯)申渡之、

西丸御目付

戸川中務少輔(安鎭)

〔筑後柳河立花家譜〕○雜新史料編纂會所藏本

鑑備　從四位下　左近將監　左近　初鑑廣　幼名萬壽丸

母鑑壽女

實妾腹

文政六年癸未八月廿一日於柳河生

十三年庚寅八月十九日家督

天保六年乙未六月廿三日改左近十一月朔初謁將軍家齊十二月十六日敍從五位下

改左近將監

弘化三年六月二十二日

八年丁酉八月廿五日敍從四位下

弘化元年甲辰七月阿蘭陀本國船來于長崎發物頭一員輕卒一隊守藩邸

三年丙午三月廿四日於柳河卒行年二十四葬于同國福嚴寺法諡曰常明院叡智紹賢

柳河ニ於テ卒ス

- 女子　早世
  - 妾腹
- 女子　早世
  - 妾腹

家督相續

鑑寛　從四位上少將　左近將監　飛驒守　幼名淳次郎　次郎

- 實立花右京源壽淑男
- 實母立花大學源通厚女
- 妻田安一位德川齊匡女

文政十二年己丑六月廿五日於柳河生

弘化三年丙午三月廿四日鑑備卒依無嗣子鑑備生中以願六月廿二日爲養子同日家督

十二月廿八日敍從五位下改左近將監

〔愼德院殿御實紀〕（○續德川實紀所載）

四月朔日、（○中略）、立花左近將監、病により封地にして、致仕かつ養子の事請ひ申せしかば、誓詞見とゞけとして、西城目付戸川中務少輔に命ぜられ、その封地筑後國柳川へいとま下さる、

〔弘化年錄〕（○內閣記錄課所藏本）

十二月廿八日

四品

諸大夫

遠江守嫡子

伊達兵五郎（大膳大夫ト改）

立花次郎（左近將監ト改）

右、於御白書院緣頰、老中列座下野守申渡之、（青山忠良、老中）

左近將監ト改ム

二十三日丙子　幕府、山形藩主水野金五郎（忠經○後忠精○和泉守）ノ領地一部ヲ上地セシメ、長瀞藩主米津政懿（越中守）・白河藩主阿部正備（能登守）・棚倉藩主松井康爵（周防守）・小見川藩主內田正道（豐後守）ニ、村替ヲ命ズ。

六月廿三日

白河藩村替

其方儀、村替被　仰付候領分出羽國村山郡〻内、高壹萬八千四百八石餘上地被　仰付、右爲代地、遠江國豐田郡・山名郡・麁玉郡・引佐郡、播磨國加東郡、信濃國伊奈郡〻内、込高共三萬四百六十八石餘被下候、委細〻儀ヒ、御勘定奉行ニ可申談候、

阿部（正備、白河藩主）能登守　松平（松井康載、棚倉藩主）周防守

棚倉藩村替

其方儀、村替被　仰付候領分陸奥國標葉郡〻内、高五千五百七十七石餘上地被　仰付、右爲代地、陸奥國白川郡、近江國蒲生郡・甲賀郡・野洲郡〻内、込高共貳萬千五百八十六石餘被下候、委細〻儀ヒ、御勘定奉行可申談候、

小見川藩村替

内田（正道、小見川藩主）豐後守

長瀞藩村替

其方儀、村替被　仰付候領分陸奥國白川郡〻内、高三千六百四十石餘上知被　仰付、右爲代地、下總國海上郡香取〻内、込高共四千六十八石餘被下候、前同斷、

米津（政鑑、長瀞藩主）越中守

其方儀、村替被　仰付候領分出羽國村山郡〻内、高千九百三拾八石上知被　仰付、爲右代地、武藏國埼玉郡〻内、込高共貳千十三石餘被下候、前同斷、

山形藩領地一部召上

父越前守元領分遠江國近江國〻内、高七萬六百五十七石餘〻内、改出新田共壹萬千七百八十八石被　召上候、

水野（忠精、山形藩主）金五郎

高壹萬五百八十一石七升五合　遠江國〻内

高五千八百四十七石三斗五升五合　播磨國〻内

同九千百五十一石貳合貳勺

同四千八百八十八石七斗九升五合　信濃國

伊奈郡〻内

合高三萬四百六拾八石八斗

阿部能登守

弘化三年六月二十三日

高三千六百四拾石五斗貳升　奥州　白川郡〻内

同九千六百四石七斗壹升七合　近江國　蒲生郡（マヽ）郡〻内

（宋書）
「四千二百十石二斗七升三合八勺」

同四千三百七石壹斗六升　近江國〻内

合高貳萬千七百六拾貳石六斗七升八勺　松平周防守

高合四千六百八石五斗六升九合壹才　下總國〻内

高合貳千拾三石貳斗六升九合五勺壹才　内田豐後守

村替右〻通

高四萬石　武藏國〻内

同五千石　米津越中守

同　山形〻内

高合五萬石　印幡沼邊〻内

近江國〻内

水野金五郎

五月朔日

金三枚充

弘化三年六月二十三日

御勝手たり

遠江國濱松城

引渡御暇

御使番
御書院番　淺野一學

弘化三年六月二十三日

金二枚充

金三枚充

右、御目見被下之、

○欄外記事
三城共引渡日限閏五月七日、

逸見甲斐守組
松平登之助

上野國館林城
引渡御暇

御使番
櫻井庄之助

御小性組
室賀美作守組
松平万三郎

出羽國山形城
引渡御暇

御使番
本多丹下

西丸御小性組
齋藤伊豆守組
戸田七内

六月朔日

弘化三年六月二十三日

御勝手より

遠江國濱松城引渡歸

御使番
淺野一學

同

御書院番
逸見甲斐守組
松平登之助

上野國館林城引渡歸

御使番
松平庄之助

御小性組
室賀美作守組
松平万太郎

出羽國山形城引渡歸

御使番
本多丹下

西丸御小性組
齋藤伊豆守組
戸田七内

右、御目見、

〔山形藩主水野金五郎屆書〕○内閣記錄課所藏本　弘化雜記所載

○七月二十日老中阿部正弘へ

弘化三丙午年七月廿日、御用番阿部伊勢守(正弘)様に差出之、

私元領分遠江國濱松村〻〻内、百姓共去月廿二日廿三日寄集騷立、庄屋共居宅打毀、及亂妨候に付、右村〻に濱松表に差殘置候家來共差出、利害申聞、取鎮候旨、同所に差置候家來共方申越候、郷村引渡以前、多人數騷立候義に付、此段御屆申上候、以上、

七月廿日　水野金五郎

〔柳營秘書〕○維新史料編纂會所藏本

領地替ノ爲村民騷擾ス

弘化二年十一月晦日、井上河内守(正春)上州館林ヵ遠州濱松(領所替、城受取ハ御使番淺野一學・御書院番逸見甲斐守組松平登之助に被仰付、秋元但馬守(泰朝)羽州山形ヵ上州館林(所領替、城受取、御使番櫻井庄之助・御小性組室賀美作守組松平万三郎、水野金五郎遠州濱松ヵ羽州山形に所領替、城受取ハ御使番本多丹下・西丸御小姓組齋藤伊豆守組戸田七内之、右之通、領知替被仰付、

〔武藏川越松井家譜〕○維新史料編纂會所藏本

弘化二年乙巳十一月晦日、領地ノ内、村替ノ恩命ヲ蒙リ、翌年丙午六月、遂ニ舊封奥劦楢葉郡ノ内、五千五百七拾七石余ヲ收メ、代ルニ奥劦白川郡、江劦蒲生郡・甲賀郡・野洲郡ノ内・

外船房州洲之崎邊ニ至ル

丁抹船ノ裝備

込高共二万千五百八十六石余ノ地ヲ賜フ、

二十八日辛巳　丁抹國測量船「ガラテア」Galatea　相模海上ニ假泊ス。浦賀奉行所屬吏及川越藩ノ警兵、就テ其狀ヲ偵シ、近海ノ諸侯、亦之ニ備フ。

〔浦賀奉行大久保忠豐屆書〕○内閣記錄課所藏本　通航一覽續編所載

○六月二十九日幕府へ

今朝申上候鎌倉霜ヶ岡邊より沖合ニ相見候異國船爲見屆、差出候組與力同心、未立戻候得共、右船秋谷村沖合より房州洲之崎邊漂能在候旨、三崎詰與力共より只今午中剋注進申越候間、此段御屆申上候、尤御備場〻義も無油斷、心附候樣申渡置候、以上、

六月廿九日　大久保因幡守(忠豐、浦賀奉行)

〔尹隷秘藏〕○通航一覽續編所載

六月二十九日浦賀奉行御屆、

追〻申上候異國船爲見屆差出候組〻もの幷通詞、相州秋谷村沖合ニる異船に乘組、以通辨爲相尋候處、本國歐羅巴デヲマルカ軍船ニて、凡長貳十四間程、船中人數貳百人程ニ

て、大筒貳拾六挺、小筒鎗劍斧〻類澤山有之由、去巳年六月頃出帆、國〻測量いたし、清朝へ罷越、當五月中彼地出帆、夫より御當國に罷越候由、先達る渡來〻亞米利加船〻義尋候に付、最早歸帆〻段申諭候處、右〻場所に船掛いたし居、四五日逗留、薪水等望候段申之外、子細も無之趣に相聞候間、鐵砲類取揚、湊内に引入可申處、軍船〻儀容易ゝ差出申間敷奉存候間、浦賀より二里程隔り候野比濱沖に掛留可申旨、組〻もの共并松平大和守・松平下總守家來申合せ、警衛爲仕、私儀人數召連、平根山御臺場へ相詰罷在候處、風波强、何分地方に難乘入、最早薪水〻望無之間、歸帆いたし候旨申之候に付、乘組〻ものも共、漸上陸仕候處、右異國船、今九時過辰巳風にて、午未〻方に紛走去候旨、併此上順風にも相成候ハヽ、亦候内海に乘入可申も難計奉存候間、番船〻もの共、三崎御役宅に引揚、海面見張心附罷在候段、只今申下剋御備場迄注進申越候、尤御備場〻義も、無油斷心附候樣申渡置候、依之此段御屆申上候、以上、

測量ノ爲メ世界ヲ廻航ス

薪水ヲ望ム

外船南東ニ去ル

領分海岸ノ警備ニ就ク

六月廿九日　　大久保因幡守

〔佐賈藩主阿部正身屆書〕（維新史料編纂會所藏本聞見錄所載）

相州一色村下山口村沖間、異國船壹艘滯留罷在候に付、固人數手配仕候段、（松平忠國、浜藩主）下總守富津ゟ私在所に申越候、依之早速領分八幡浦海岸に、兼る申付置候固人數差出置申候、此段御屆申上候、以上、

六月廿九日　　阿部駿河守（正身、佐賈藩主）

在所日附（弘化雜記）

（弘化雜記）

海岸警備兵ヲ派遣ス

川越藩警備ノ兵外船ニ乘組ム

去月廿九日、（齊典、川越藩主）松平大和守領分相州一色村下山口村海岸上に、異國船相見候趣に付、松平下總守・保科（正丕、飯野藩主）能登守人數差出候段、私在所に差置候家來承候に付、不取敢海岸固人數差出候段申越候、此段御屆申上候、以上、

七月朔日　　林肥後守（儒學守ゟ、忠旭、貝淵藩主）

〔外艦渡來聞書〕（内閣記錄課所藏本弘化雜記所載）

六月廿八日夜明七時分、松平大和守樣注進有之候ゝ、昨夕七時頃、異國船壹艘、鶴ヶ岡ゟ凡五六里沖に、小田原〻方を向走居候由、領内蘆名村漁船見屆候段、早馬を以申來候に付、早速御備船に乘組、明六時頃北風にゟ出帆、同日五時頃相州秋谷村沖凡貳里程〻場にゟ、異國船に乘組名前、左に記、

川越侯家來、

三崎詰

弘化三年六月二十八日

藤井龍八郎　引續中嶋三間介　二番香山久藏

堀行造　中村容助　太田量兵衛

丹下清兵衛　古屋榮五郎　田中宗兵衛

橋本源美　金澤紋三郎　込山磯之助

今唯五郎　田中榮助　齋藤三平

三崎詰　三番船　四番船

近藤政藏　松村源八郎　佐倉桐太郎

大久保龍司　山元和多五郎　金澤元吉

種村道助　服部健藏　山本鎌兵衛

吉村喜右衛門　今西順藏

田中乙吉　岩田原佐

外船武装ノ狀況

異國船武器上〻段

一唐銅筒　四挺
巢口徑二寸八分

一鐵鑄筒　六挺
小〻方巢口徑四寸三分大〻方五寸

船左右ニ配有之
一鎗　拾九本

船左右矢車の如く餝有之
一斧　廿挺

一鐵玉壹挺ニ付
一數玉一丁ニ付
下〻段

一鐵大筒　貳拾貳挺
巢口五寸徑位

船左右ニ十本宛
一鎗　貳拾本

摺火仕掛
一同中筒　拾六丁

一劍　三拾九振

一劍　同斷

右、貳品、大筒壹挺ト二挺二振充、添有之、

一艫〻方船主部ヤノ入口長壹間程〻唐金筒三挺操筒有之唐銅ニるて口〻徑二寸位筒數大小百八拾挺

〆人數貳百人　但、士官所持〻貳挺、カラクリトントル筒并帶劍類數多有之候得共、其員數不相分、

一船長百三拾五フート　廿七間

一同幅三拾貳フート　六間半

弘化三年六月二十八日

五玉充
二玉充添

トントル仕掛
一劍付長筒　五拾三丁

一短筒　三拾五丁

一トントル筒　四拾貳挺

一帆柱長百四拾五フート（二拾九間）　一深サ三拾六フート（七間二分）
一船主名ステシンビルレ
一船名　カラテア

右、武器〻外、士官銘〻取持〻長筒トントル筒劍等有之候得共、員數不相分、

一測量船　昨年六月廿四日出帆、（我五月廿日ニ當ル）清朝サンハイエ入津、十日滯船、當年八月九日出帆、（我六月十八日ニアタル）右船江戸ニ入津可致〻所、北風強難乘寄、無余儀鎌倉海ニ入津、廿八日江〻島沖ニ船掛いたし候樣子、翌廿九日ニ野比沖ニ入津〻積ニ候へとも、晝九半時、辰巳風雨強、何分入津六ケ敷ニ付、急ニ入津出來不申候間、直樣退帆、最早日本へ寄セ不申候由、通詞ヲ以申聞候所、城ケ嶋沖ニ船を寄候ニ付、乘組〻者一同上陸いたし候、

測量ノ爲メ世界ヲ周航ス

渡來〻異船ゟ差出候横文字和解、

デチマルカ國王ノフカラテヤレ（イハア）と申軍船ニゐ、地理ヲ精密ニ相學候爲、地球ヲ周り申候、就ゐて江戸湊ニ逡罷越度奉存候、尤兩三日〻中歸帆可仕候、

曆數千八百四十六年八月廿日　ステンビルレ

右〻通、和蘭語ニゐ無之ニ付、大意和解仕奉差上候、以上、

六月廿九日　堀達之助

日本地圖并浦賀港・其外港圖・富士并長崎港異國船入著〻節、肥前・筑前御張出〻寫眞圖等所持、

〔通航一覽續輯〕（○内閣記錄課所藏本）

弘化三丙午年六月廿九日、きのふ相模國鶴ケ岡沖合ゟ（鎌倉郡ゟ屬ス）、異國船一艘見ゆるよし、大津陣屋詰松平大和守齊典家人及ひ同國三崎詰（三浦郡ゟ屬ス）、與力より追〻浦賀奉行所ゟ注進そ、よそ在勤ゟ奉行大久保因幡守ゟも〻〻言上ゟ及ひ、組與力ゟも異船處置ゟとを沙汰そ、この日齊典乃家人等秋谷村沖ゟて（同郡ゟ屬ス）、ろの船ゟ乘止むる旨、奉行所ゟ注進ゐり、

川越藩警備兵外船ヲ秋谷村ニ乘止ム

六月二十九日、因幡守平根山ゟ出張ゐりしろ、やゝて退帆せし旨、番船より注進ゐり、されとも再渡計り難々れて、兼そ老中より下知の旨趣を與力同心等ゟ沙汰そ、但し異船ゟ第那瑪爾加國王府の軍艦ゟして、船中武器等數多積乘そ、江戸海ゟいさらんと歟乞ひ、横文字一通を出し、まゝ薪水逡望そしろ、風雨烈しく、碇泊あり難き歟もて、遂ゟ歸帆せしゐり、よてその横文字和解及ひ帆影、いよ〻〻見えさふゟより、御備場その外、平常ゟ復そへき旨等、奉行言上ゟ及ゐり、

外船風波ノ爲メ碇泊スルヲ得ズ

〔川越藩主松平齊典屆書〕（○前橋市立圖書館所藏本川越藩相州四番記錄所載）

弘化三年六月二十八日

○幕府へ

一自江戸御用狀到來、左〻趣申來ル、

御用番青山下野守殿（忠良、老中）、海岸御懸り御月番阿部伊勢守殿（正弘、老中）に左〻御屆書壹通ッ、持參〻、下野守殿御取次關戸善助、伊勢守殿同杉浦門藏を以差出候處、被成御落手〻旨、同人共を以被仰聞之、右〻通に御座候、以上、

御留守居代　本間貳平

六月廿六日

去ル廿三日巳上刻頃、大岡主膳正（忠固、岩槻藩主）領分上總國夷隅郡澤倉・新官・部原右三ヶ村沖合、西〻方ゟ東〻方に向、異國船壹艘相見候段、同村村役人共ゟ訴出候由、尤五六里遠沖に〆、朝霧相立、船形帆影等聢と難見分候得共、子丑風に〆、東眞沖に相走、自然と帆影相見不申候旨、主膳正家來共ゟ註進有之旨、昨廿五日松平下總守富津陣屋詰家來〻者ゟ、相劭大津陣屋詰家來〻ものへ註進有之、右に付、浦賀奉行ゟ物見船差出候段、達有之に付、手前方ゟも物見船差出置、人數〻義去、觀音崎臺場下へ繰出、固罷在候段、彼地家來共ゟ註進申越候に付、此段致御屆候、以上、

六月廿六日　御名

一左〻趣、御用番幷海岸御懸御月番、御屆被差出候旨、申來ル、

沿岸ノ警備ニ就カシム

去ル廿三日、大岡主膳正領分上總國夷隅郡澤倉・新官・部原右三ヶ村沖合に、異國船壹艘相見候旨、委細註進に付、物見船差出置、人數〻義去觀音崎臺場下に繰出、固罷在候段、一昨廿六日致御屆置申候、然ル處、物見船房劭洲之崎迄罷越、見糺候得共、帆影等も一切不相見候旨、歸船〻上申出候、右に付、廿六日酉〻剋、人數引揚候段、彼地家來共ゟ註進申越候、此段致御屆候、以上、

六月廿八日　御名

〔川越藩相州四番記錄〕（○前橋市立図書館所藏本）

一異國船壹艘相見候旨、今夜九ッ時頃、左〻趣矢頭庄左衞門ゟ申出之、

今廿八日、七ッ半時頃、鎌倉霧ケ岡ゟ南に當り、五里程沖、帆柱三本有之候船壹艘、東〻方ゟ小田原〻方を向走り居候を、蘆名村文左衞門船、地方ゟ壹里程沖合に小漁に罷出、慥に見受候旨、只今註進申出候、此段申上候、

矢頭庄左衞門

六月廿八日

一右に付、不取敢、浦賀三崎幷向地にも註進申遣之、

一右に付、御屆〻義去、御三手申合〻うへ、宜取計候樣、江戸表へ申遣之、

一右に付、檢使副使、不取敢、西浦蘆名村を差、罷出候樣及差圖之、

外船一隻鎌倉沖ヲ通過ス

一先ツ警備人數ヲ撤ス

一右ニ付、賄方見計蘆名村ニ出張候様、在方ニ申聞之、

一右ニ付、腰越村御臺場ニ大筒方、左〻面〻早速罷越可取計旨、佐々木三内ニ及差圖之、

但、右ニ付、兵粮〻義も腰越村名主ニ申付候様、三内ニ申聞之、尤在方ヶ去別ニ不申付候間、其心得ニる申付候様申聞之、

大筒方　森川志津馬　西野藤右衛門
篠田忠曹　今村良平
富樫久右衛門　大屋督三郎

偵邏船ヲ出シ且警備ノ部署ニ就ク

一右ニ付、此上〻模様ニ寄、西浦爲御固一ノ先物頭出張可被仰付ニ付、此段爲心得申聞置候様、常盤甚五兵衛方へ申遣之、

〔川越藩主松平齊典屆書〕○川越藩相州四番記錄所載

○幕府へ

昨廿八日、申中剋頃、鎌倉霜ヶ岡ヶ南ニ當り、五里程沖、帆柱三本有之異國船ヶ相見候船壹艘、東〻方ヶ小田原〻方を向走り居候を、領分相劦三浦郡蘆名村百姓文左衛門ヶ申をの船、地方ヶ壹里程沖合ニ小漁ニ罷出、見受候旨、註進申出候ニ付、早速物見船差出、鎌倉郡腰越村遠見番處ニ、大筒役を始差向、手當致置、浦賀奉行并松平下總守富津陣屋(ヲ脫カ)も及通達候段、彼他家來共ヶ注進申越候ニ付、此段致御屆候、以上、

外艦ヲ秋谷村沖ニテ差押ヘ久里濱沖ヘ廻航セシム

六月廿九日　御名

異國船壹艘、領分相劦一色村下山口村海上ニ掛り居候旨、猶又村方ヶ註進申出候ニ付、人數差出し、領分秋谷村沖合ニる差押、浦賀奉行組與力申談〻上、久里濱沖ニる警衛可致積〻旨、尤未同所ニ去引付不申由申出候段、彼地家來共ヶ註進申越候ニ付、此段致御屆候、以上、

六月晦日　御名

〔川越藩主松平齊典屆書〕○川越藩相州四番記錄所載

○七月朔日幕府へ

一御用番并海岸御懸御月番阿部伊勢守殿ヲ異國船歸帆御屆書、伊藤源五兵衛持參〻、御取次三上三平を以差出候處、被成御落手〻旨、以同人被仰聞之、○川越藩相州四番記錄

此度異國船渡來ニ付、物見船并副使船差出、引續人數差出候處、領分相州秋谷村沖合ニる差押、久里濱沖ニる警衛可致積、致御屆置、觀音崎臺場下へ(イ、ロ)も人數操出、海岸ニ相固罷在候

外艦城ヶ島方面ニ退去ス

處、一昨廿九日午剋頃、二町谷村ゟ壹里程沖ニる、異人申聞候由ニ、何分陽氣不宜、殊ニ外波高く間、早ゝ歸帆致度旨申聞候ニ付、再應異人に申諭も有之候得共、是非歸帆致度趣、浦賀奉行組與力ゟ談有之候間、乘組ゝ(イ、者)もの共、追ゝ下船致候、仍る(イ、依)異國船城ヶ嶋ゝ方を向走り去候旨、乘組居候家來ゝ者ゟ申出候段、彼地家來共ゟ註進申越候ニ付、此段致御屆候、以上、

七月朔日

御　名　(イ、松平大和守)　(聞見錄)

〔小田原藩通牒〕○川越藩相州四番記錄所載

○六月二十九日川越藩相模警備役へ

一大久保加賀守殿衆ゟ左ゝ趣、御通達有之、

以剪紙致啓上候、然ニ今廿九日曉、相劦餘綾郡大磯宿浦ゟ一里半程沖合ニ、異國船壹艘、同劦江の嶋沖合ニ壹艘、都合貳艘相見候段、宿村ゝゟ追ゝ註進申出候間、領分海岸夫ゝに固人數差出候付、此段及御通達候、右可得貴意如此御座候、以上、

大久保加賀守内
井澤門太夫

六月廿九日

外船相州海岸ニ碇泊ス

御　名　様

御役人中様

大橋儀兵衛
加藤東馬

追る、海面霧高波ニる沖ゝ方難見定船懸りゝ様子相分り不申候、以上、

〔飯野藩主保科正丕屆書〕○内閣記錄課所藏本　弘化雜記所載

六月晦日、御用番并阿部様に御屆、

昨夜御屆申上候異國船、松平大和守領分相州一色村下山口村海上ニ滯留罷在候段、松平下總守富津陣屋ゟ申越候由、同人家來ゟ案内御座候、依之即剋壹番手人數差出候趣、承り來候間、私領分上總國青木浦に壹番手人數差出申候、猶陣屋内ニ貳番手人數相揃置、此上樣子次第、直樣繰出候手筈罷在候段、在所家來共ゟ申越候間、此段御屆申上候、以上、

六月晦日

保科能登守

〔韮山代官江川太郎左衛門通牒〕○前橋市立圖書館所藏本　川越藩相州四番記錄所載

○七月朔日川越藩相模警備役へ

一從江戸御用狀到來、江川太郎左衛門殿手附手代ゟ左ゝ通御案内申來候付、爲心得、申來

之、

御名様

御役人中様

江川太郎左衛門内

長澤與四郎

根本又市

津田橋六

外船江ノ嶋沖ニ假泊ス

以手紙致啓上候、然ハ相劦高座郡馬入川尻海岸ヶ凡拾町程沖ニ、帆柱四本立凡長七十間程ニ相見候異國船壹艘、去月廿九日、明六ツ時頃相見候處、北風ニゐ同郡辻堂村浦ニ向ケ走參、夫より七時頃江の嶋沖三拾町程沖迄走り候處、風ニ相成、同處ニおゐて汐掛致居候義ニ御座候哉、進退不致段、右海岸附鵠沼村外三ヶ村役人共訴出、尤川ゝ出水泊船無之處、右ハ非常〻義ニ付、廻道致、到着致候段、只今訴出申候、右〻段不取敢御案内、可得貴意如此御座候、以上、

七月朔日

〔勝山安房藩主酒井忠嗣居書〕○内閣記錄課所藏本　弘化雜記所載

○幕府へ

六月卅日、御用番青山様・御掛り阿部様ニ御屆、

近領ヘ警報ス

領内沿岸ニ警備兵ヲ出ス

私領分安房國平郡勝山浦漁業罷出候者、昨廿九日朝、相州鎌倉沖ニ異國船壹艘相見候趣、申出候ニ付、早速遠沖迄見分〻者差出候處、風雨ニゐ何分難相分候由御座候得共、右異國船相州アハギ沖ニ碇卸候由ニ相聞候、依之固人數用意、夫〻申付、近領ニも申通、濱手ニ人數差出可申趣、在所家來共ヶ申越候、此段御屆申上候、以上、

六月晦日

酒井安藝守

午七月朔日、御用番井阿部様ニ差出、

昨晦日、御屆申上候相州鎌倉沖ニ相見候異國船、同州一宮村下山口村沖合ニ彌滯船仕候趣ニ付、兼ゐ申付置候固人數、在所安房國勝山濱手ニ差出、警衛爲仕候段、彼地家來共ヶ申越候、此段御屆申上候、以上、

七月朔日

酒井安藝守

〔川越藩主松平齊典居書〕○前橋市立圖書館所藏本　川越藩相州四番記錄所載

○幕府へ

一御用番井海岸御懸御月番阿部伊勢守殿ニ出、相劦御人數御引拂〻御屆書持參之、御取次古川貞之助を以差出候處、被成御落手〻旨、同人を以被仰聞之、

右〻通ニ御座候、以上、

弘化三年六月二十八日

七月三日　伊藤源五兵衛

去月廿九日、異國船歸帆致候ニ付、見屆船差出候得共、風波荒く見合罷在候、然ル所、異國船彌帆影も不相見由ニ付、人數可引拂〻處、浦賀奉行人數引拂不申趣ニ付、見合居候處、一昨朔日引拂、彌帆影も不相見ニ相違無之旨、歸船〻上申出候、右ニ付、同日酉剋、人數引拂候段、彼地家來共ゟ註進申越候ニ付、此段致御屆候、以上、

御名

外船退去ニ付警備兵ヲ撤ス

七月三日

先達る異國船壹艘、領分相劦一色村下山口村海上ニ懸居候ニ付、人數差出、領分秋谷村沖合ニる差押候旨、其砌不取敢致御屆置申候、追〻取調候處、彼表詰〻家來五人水主差配壹人乘込差押申候、尚又此段致御屆候、以上、

外船ヲ秋谷村沖ニテ差押フ

七月十日

御名

外船警備ノ入費

〔川越藩上申書〕（○川越藩相州四番記錄所載）

○七月幕府へ

鴨居詰

一押送り船百五拾四艘　但、一日壹艘ニ付、銀四匁五分ツ、

此銀六百九拾三匁

一天當船三百四拾貳艘半　但、一日壹艘ニ付、銀壹匁五分ツ、

此銀五百拾三匁七分五厘

一水主三千貳百四拾五人半　但、一日壹人ニ付、銀壹匁五分ツ、

此銀四貫八百六拾八匁貳分五厘

一夫人五千百八拾貳人　但、一日壹人ニ付、銀七分五厘ツ、

此銀三貫八百八拾六匁五分

一天當船五艘

此銀貳百拾貳匁五分

內

三艘　但、江戸表へ早船壹艘ニ付、銀五拾貳匁五分ツ、、內壹艘米眞木代銀拾匁、

貳艘　但、富津行早船壹艘ニ付、銀貳拾貳匁五分ツ、、

〆

一押送船壹艘　但、江戸表へ早船、

此銀九拾匁

一夫馬拾七疋半
　此銀六拾五匁六分貳厘五毛　但、一日壹疋ニ付、銀三匁七分五厘ッ、

一御飛脚四人
　此銀八拾匁
　　内
　　貳人　　但、江戸表へ時切御飛脚壹人ニ付、銀貳拾貳匁五分ッ、
　　貳人　　但、川崎宿迄時切御飛脚壹人ニ付、銀拾七匁五分ッ、
　　〆
　銀拾貫四百九匁六分貳厘五毛
　此金百七拾三兩壹分貳朱分
　　銀七匁壹分貳厘五毛

三崎詰

一押送船七拾五艘
　此銀三百三拾七匁五分　但、一日壹艘ニ付、銀四匁五分ッ、

一鰹船三拾七艘
　此銀百六拾六匁五分　但、右同斷、

一天當船貳百拾五艘半
　此銀三百貳拾三匁貳分五厘　但、一日壹艘ニ付、銀壹匁五分ッ、

一餌活船拾貳艘
　此銀拾八匁　但、右同斷、

一東海船三艘
　此銀拾三匁五分　但、一日壹艘ニ付、銀四匁五分ッ、

一水主三千貳百三拾八人半
　此銀四貫八百五拾七匁七分五厘　但、一日壹人ニ付、銀壹匁五分ッ、

一夫人千四百五拾九人
　此銀壹貫九拾四匁貳分五厘　但、一日壹人ニ付、銀七分五厘ッ、

一夫馬六疋　但、一日壹疋ニ付、馬士共銀三匁七分五厘ッ、
　此銀貳拾貳匁五分
　　〆
　銀六貫八百三十三匁貳分五厘
　此金百拾三兩三分貳朱分
　　銀七分五厘

二口〻銀拾七貫貳百四拾貳匁八分七厘五毛

此金貳百八拾七兩壹分貳朱分

銀三分七厘五毛

右去、當午六月廿五日ゟ同廿六日迄、同廿九日ゟ七月朔日迄、異國船渡來ニ付、兩度爰元
并三崎御人數被差出候節、船〻水主夫人足を始、右兩所詰差出候所、日〻入狂ひ茂有之、
跡片付等ニゟ、二日引取〻分茂有之候ニ付、日〻ニ仕、惣高を以申出候、尤夫馬并江戸富
津行早船其外時切御飛脚等迄、爲取調候處、前〻〻振を以取調、書面〻通申出候間、何卒
御手當被成下度奉存候、左候得ゝ、已後〻御爲ニも相成可申ゝ奉存候、此段申上候、已上、

午七月　　矢頭庄左衛門

江川太郎左衛門伊豆七島ヲ巡視ス

是月　韮山伊豆代官江川太郎左衛門英龍　伊豆七島巡視ノ狀ヲ幕府ニ稟ス。

〔韮山代官江川太郎左衛門上申書〕　○維新史料編纂會所藏本　江川英龍建議書拔萃所載

○六月幕府へ

伊豆國附島々回島ニ付、樣子申上候書付、

私支配所伊豆國附村々回島被仰付候ニ付、新島利兵衛船御雇申付、當四月十六日、鐵
砲洲ヨリ乘船、同十八日、相州浦賀湊出帆、同日、豆州下田湊入津、私豆州韮山屋敷ヲ

リ取寄候武器、下田町ニテ買入候飯米等積込、同廿四日、同湊出帆、同日、新島へ着、上
陸仕、同島手始ニテ八丈島渡海、往返モ日和宜、追々回島、同六月六日迄、島々見分取
調、不殘相濟、同七日、利島出帆、同日、下田港へ入津、武器陸上ノ上、〻日、同湊出帆、
同日、浦賀湊入津、〻日、同港出帆、〻日、鐵砲州着岸、上陸歸府仕候間、島々ノ樣
子一ト通、左ニ申上候、

一新島ノ儀、東西三拾町、南北二里三拾町、周圍六里半程、島回嚴石峙チ、海淺深ハ、地方ヨ
リ壹町程沖ニテ、四五尋ヨリ二拾五六尋有之、本村並枝郷・若郷村兩村ニ相成、本村ハ西
諸國村前砂濱ニテ、大小船共着寄候得共、船繫難相成揚船場ニ有之、北ノ方若郷村ハ西
北請ニテ、村前砂濱本村同樣、船ハ着寄候得共、大船難乘寄、南ノ方ニ式根島山申枝島有
之、往古ハ本島地續ノ處、年曆不知、津波ノ節打坊(切カ)、無民家離島ニ相成候由、東西十五町、
南北五町、周回一里餘、四周岩石峙チ候得共、島上ハ平坦ニテ樹木多ク、本島ノモノ共、
薪伐出、字中ノ浦・泊・野伏ト申三ヶ所ハ、船繫場ニテ、八丈島御用船、又ハ神津・三宅等
ノ廻船、風待致シ候處ニ有之、濱邊ニ溫泉三ヶ所有之、本島ノモノ濕疾相煩候節、湯治致
シ候由、島西拾町程隔、地内島ト申、南北三町、東西壹町程ノ小島ハ、茅多ク、本島ノ者共
屋根ヲ葺候ニ用、右式根・地田島(内カ)廻ニ漁場モ有之、島爲相成、廻船漁船共有之、艫腕ハ神

津島ニ引續達者ニテ、漁業專ラニ致シ、八丈・小島・三宅・大島同樣、野牛有之候得共、遣不申、耕地ハ麥畑ニ候得共、山寄ハ切替畑重モニテ、何レモ砂地而已、土氣薄ク、其上風早ノ損毛間々有之候ニ付、取實少ナク、サツマ芋ハ土地ニ應シ候故、多ク作リ候得共、夫(扶カ)食引足リ不申、元來此島ノ儀古風ニテ、能ク法ヲ守リ、至テ取締宜、一島ヲ一家ノ如クニ思ヒ、先祖神佛ヲ崇敬致シ、親ノ喪ヲ愼ミ、別テ婦人ハ朝夕墓所ヘ詣、掃除ヲ淸ク致シ、水花ヲモ不絶、容チノ儀ハ、髮ハ聊カ椿ノ油ヲ用ヒ、頭ニ束置候迄ニテ、衣類ハ袷布子ヲ着用致サス、夏冬共短キ紺染ノ單物ヲ着シ、又女ニ限リ、酒莨ヲ一切不相用、第一朝早ク起キ、一二町モ隔候處ヨリ、二斗餘モ入候桶ニ水ツヲ汲、頭ニ頂キ、家々ニ持歸、炊致シ、親夫ニ食サセ、其身ハ朝ノ食物ヲ携ヘ、是ヲ乍食耕地山等ヘ參リ、薪ヲ取、又ハ肥桶ヲ天秤ニテ頭ニ頂キ罷越、耕作致シ、却テ男子ヨリ荒キ働仕リ、島柄ハ貧窮ノ趣キ候處、耕地ノ義、往古ヨリ家則過不及ナク、所持罷在候樣、(イ、賃施)地抔致シ候儀、曾テ無之故、末代地所ニ離候モノ無御座、貧福共、都テ島一躰ニ心得營候故、極々貧窮ノモノハ、邂逅モ有之、併去ル巳年、サツマ芋ハ箇成取上候得共、其餘ノ作物不宜、當麥作モ半毛位ノ取實ニ付、漸取續罷在候由、人氣ハ流人有之候ニ不似合、直實成島方ニ御座候、惣テ此島婦人ノ力、男子ニ勝ト、大體三十貫位ノモノハ頭ニ頂キ、五六町ノ路ヲ幾度位(往カ)返致シ、健ナルハ四十

貫餘ノ品ヲ頂キ、木口或ハ椿ノ實艸木實等採候砌、木ニノホリ攀候事、甚身輕ニテ、枝ヨリ枝ヘ移リ、セシ(イ、ゆシク)テ間隔ヲ候得ハ、飛移候由、

一八丈島ノ儀、東西二里半、南北四里半、回リ拾里餘、四周共岩石峙チ、惣體水中ニ根石張出、海淺深、地方ヨリ一町程沖、七尋ヨリ四十尋程、東西ニ高山有之、其間平坦、北ノ方三根村ヨリ西ノ方大賀郷ヘ居村耕地打續、南樫立村中ノ郷東末吉村ハ、山間海手ヘ寄住居致シ、坂下右貳ケ村ヨリノ往來、山坂嶮敷、船着場ノ儀、大賀郷ノ內八重根湊、三根村ノ內神湊、中ノ郷ノ內藍ケ江浦、都合三ケ所ノ處、藍ケ江浦ハ先支配ノ節、去ル未年中、船着場取立相願、拜借金等被仰付、丑年中迄ニ凡普請出來候得共、東西請ニテ船着不辨利ノ上、船幷荷物上ケ卸シ、格別難場ニ付、去ル亥年六月中、八丈島御用船、纔一度着命(岸カ)仕候而已、八重根ノ方ハ、西南請ニテ三方岩石高ク、荷物積下シ難場ニ有之、風樣ニ寄、邂逅掛船相成候得共、多クハ荷揚ノ上、最寄前崎濱ヘ四五町モ相廻、揚船ニイタシ、神湊ノ儀モ東北ヲ請、是又三方岩石高ク、荷物上ケ卸シ難場ニテ、掛船不相成、上ケ船場ニ有之、右兩所トモ湊ト申名目ニテ、湊ニハ無之、風波穩ノ節出入仕候而已ニ御座候、島方ノモノ所持ノ廻船、先年及破船、當時無之、御用船三艘有之、漁船所持致シ、大賀郷ハ元村ト唱、御反物取扱候陣屋御染屋等有之、同郷三根村中ノ郷ハ、少々ツヽ、漁業致シ、末吉村・

樫立村ハ山稼重ニテ五ヶ村共、耕地ハ眞土勝・田方モ有之候得共、畑方多ク、其上山方切替畑ニテ、風水旱損ノ外、汐風又ハ霧浪ト唱、海上ヨリモヤ吹掛、作物相痛候儀度々有之、無難ニ取入候年柄ハ稀ノ由、平年迚モ夫食乏(扶カ)シキ處、近年打續作方不宜、別テ去巳年ハ度々ノ汐風諸作ニ相障、其上國地穀類高直ニ付、反物交易致候テモ、石數少ク、船便モ不自由故、當然夫食差支候モノ多、艱難罷在候由、人氣ハ宜相見候得共、柔輭ニテ萬事勵無之、男ハ農業ノ間、漁業山稼テモ致シ候處、耕作致シ方甚麁略ニ有之、漁業モ地方ヨリ海上漸一二里ヲ限、罷出、鰹漁仕候餘、少々ツヽ、磯物ヲ取候迄ニ付、島益相成候程ノ儀無之候、女ハ織物重ニ致シ、素々女人數多渡世薄ノ由、其上流人多、旁困窮ナル島方ニ御座候、

一八丈島持小島ノ儀、八丈島ヨリ西海上一里程、東西凡十八町、南北一里程、廻リ二里程ノ島ニテ、四周海岸切立候岩石、水中ニハ根石張出、海淺深、地方ヨリ一町程沖、拾五六尋ヨリ二拾四尋迄ノ由、東ニ宇津木村西ニ鳥打村有之、船着場ノ儀、宇津木村前ハ東請、字和田湊ト唱、鳥打村ハ西請、字フノウチト唱、極風日和ノ節、岩石ノ間ヲ漁船出入致シ、大船着寄不相成、二ヶ所共道筋ハ岩上ヲ傳テ、通路絶候處、棧ニテ登リ候樣致シ、島中ノ漁船岩上ヘ引上置、至テ難場ニ御座候、耕地ハ眞土勝ニ候得共、一圓切替畑ニテ、年々ノ

樣、汐風霧波等吹掛、無難ニ作物取入候儀無御座、平年夫食乏敷處、別テ去ル巳年ハ度々ノ汐風ニテ諸作物相痛、八丈島同樣、當然夫食差支候モノ艱難罷在候由、呑水ノ儀、岩間清水ヲ用候處、甚乏敷故、天水取溜置、至テ大切ニイタシ、農業漁業モ相働キ、女ハ織物又農作ノ手傳ヲモイタシ、萬事八丈島ノ差配ヲ請、人氣ハ宜樣子ニ候得共、甚困窮(イ・ナ)スル島方ニ御座候、

一八丈島持青ヶ島ノ儀、八丈島ヨリ南海上ニ拾里程ト申傳、凡東西二里、南北壹里、廻リ五里程ノ燒島ニ有之、四周共海岸ヨリ切立候燒岩ニテ海淺深、地方ヨリ一町程沖、三尋ヨリ拾二三尋迄ノ由、北ノ方ニ居村有之、船着場ノ儀、西ノ方字西浦ハ海岸ヨリ岩上迄、凡二三町ノ間、眞直ニ登リ候嶮敷道有之、右道絶間ニ、長二三間、幅一尺位楷子ノ樣成足代四ヶ所有之、夫ヨリ三四町山道ヲ登リ、末吉郷ニ至リ、北ノ方字ミコノ浦ハ、海岸ヨリ凡三四町程ノ間、是モ嶮敷、岩上ニ登越、體戸郷ニ至候儀ニテ、大船着場無之、八丈島ヘ渡海シ、小船一艘着岸、直ニ引上ケ、船圍イタシ、通路渡海トモ危險ノ島方ニ御座候由、耕地ハ皆畑ニテ、天明年中、一島不殘山燒亡所相成、民家モ相潰候得共、精力ヲ盡シ、近々切開候處、燒砂深ク諸作實法不宜、年々汐風ニ相痛、夫食不足イタシ、八丈島ノ儀、去巳年ハ格別汐風吹掛諸作相痛候、當然夫食差支候程ノ儀、青ヶ島ハ、別テ洋中ノ孤島故、猶

更艱難ニ罷在、呑水ハ居村ヨリ三拾町程隔、一ヶ所有之候得共、照續候節ハ、度々不足仕候由、農業漁業ヲ專ニ致シ、八丈島ヘ渡海、萬事差配請候處、七月ヨリ翌年八十八夜過迄ハ渡海不相成、去巳六月、靑ヶ島役人、八丈島ヘ着、同七月中歸帆ノ積、同島出帆後、今以テ出島不仕候ニ付、樣子難相分、掛隔ノ離島、極困窮ニ相聞申候、漁舟引上ヶ候節、大綱ハ盡女共多人數罷出、引上事ニ御座候、

一御藏島ノ儀、東西壹里、南北同樣、廻リ四里程有之、突出候島山ニテ、四周岩石峙チ、西北ノ方居村下ニ纔ノ濱邊有之候得共、大船難掛リ、小船ニテモ着岸、直樣引上置候難場ニテ、小島ニ準シ、人別モ多ハ無御座候故、漁船上ヶ下シニモ、女共多罷出、大綱ヲ以引上候儀ニ有之、沖拾尋ヨリ二拾尋程ノ由、居村ヘハ濱邊ヨリ勾倍急ニ四五町登、呑水ハ字フナ本山ヨリ清水筧ヲ以居村迄引相用、耕地ハ至テ小ク、畑方屋敷共五町程ナラテハ無之、居村ヨリ二里程嶮敷山道ヲ登リ、字南郷ト申場所ヘ小屋建置、年々冬春ノ内罷越、數日滯留山稼耕作イタシ候由、一體岩石故地味薄ク、殊ニ風損・旱損等時々有之、取實薄ク、漁業迚モ差テ無之、女ハ木綿ヲ少々織候由ニ候得共、當島第一ノ產黃楊木近來直段下落イタシ候上、去巳年、諸作皆無同樣、當麥作モ漸半毛ノ取實、其上穀類高直、旁別テ困窮罷在候趣ニ有之、人氣ハ宜樣子ニ候得共、元來艱難ノ島方ニ御座候、

一三宅島之儀、東西二里、南北三里、周廻八里程ノ島方ニテ、中央ニ雄山ト申高山有之、頂上其外所々燒出候、火氣多、正德元卯年、寶曆十三未年、文化八未年都合三度、燒石砂等吹出、隣島迄モ鳴動イタシ、東山字新明ト申所、竪三町、横二町計ノ池有之、右ハ寶曆十三未年燒石吹出、鳴動ノ節、一夜ノ内池ニ成候由申傳、猶又天保六未年、字笠木山ヨリ燒石砂等吹出、五町四方程、薪山燒拂候由、右雄山四方ヘ五ヶ村共平曠ノ地少ク、四周燒石峙チ、西ハ阿古村・伊ヶ谷村、北ハ伊豆村、東ハ神着村、南ハ坪田村ニテ、伊ヶ谷村前少シク湊形有之候得共、船繫難相成、揚船場ニ有之、伊ヶ谷村・阿古村・坪田村ハ漁業專ニイタシ、伊豆村・神着村ハ農業山稼重ニ仕候、海淺深ハ、地方ヨリ壹町程沖ニテ七尋ヨリ貳拾尋位ノ由、農業漁業ノ外、近來炭燒相始、女ハ木綿ヲ織、耕地ハ皆畑ニテ、燒島ニ不似合、土性宜候得共、年々ノ樣荒吹ノ節、汐氣吹上、皆損同樣ニ相成、高場所ハ旱損勝ニ有之、人別モ以前ヨリハ格別相增、流人モ多、平年夫食モ引足不申、其上去巳年不漁、麥作ハ凡二歩程ノ出來方、其餘諸作皆無同樣、尙麥作ノ義モ平均漸ク三歩程ノ取實故、夫食差支候モノ共多分有之、一體流人多ニ付、自ラ困窮成島方ニ御座候、

一大島ノ儀、東西二里、南北五里、周廻拾里餘ノ島方ニテ、中央ニ三原山ト申高山有之、頂上ヨリ硫煙立上リ、燒强キ時ハ里方迄モ鳴動致シ候由、右山四方ヘナタレ、島中平曠ノ

地少ク、東北ノ方ハ別テ海邊迄山ニ連リ候得共、村々トモ牛馬ハ通ヒ道筋有之、西ハ新島村・野增村、北ハ岡田村・泉津村、南ハ差木地村ニテ、東西ノ方ニ波浮島湊有之、四周共海岸燒岩峙チ、新島・岡田村ハ船着場有之候得共、揚船場ニテ、海淺深ハ、地方ヨリ壹町程沖、淺キ所六尋ヨリ二拾尋、深キ所ニテ三拾尋ヨリ七拾尋位迄ノ由、波浮湊ノ儀、切立候山ニ圍マレ、湊口至テ狹ク、深サ八九尺程ニ候得共、湊内ハ東西三町、南北二町、深サモ拾四五尋餘有之、島々ヘノ通船オヨヒ陸奥筋ノ廻船等、此湊ニ日和待イタシ候由、新島村ノ儀ハ、五ケ村ノ内ニテ元村ト唱ヘ、同村幷岡田村・波浮湊共耕地・山稼ノ外、漁業相勵、野增村・差木地村・泉津村ハ耕地・山稼重ニ仕、五ケ村共砂地ノ皆畑ニテ、切替畑多、荒吹ノ節ハ、三原山ノ硫烟山下ヘ覆ヒ掛リ、作物枯痛旁島中ノ諸作ニテハ、夫食引足不申由ニ候得共、山稼ノ村方ハ、年中江戸表ヘ薪伐、出漁船多分有之、廻船數艘所持罷在、江戸表ヘハ纔三拾六里ノ海上故、運送都合宜、困窮ノ島方共相見不申、家造ノ樣子、其外トモ七島中、最第一ノ島方ト相見、尤去巳年ハ不作ノ上、漁事モ少ク及困窮候由、申立候得共、當麥作ハ相應ノ出來方、漁業モ少々ツヽハ有之候ニ付、當然夫食ニ差支候モノハ纔ニテ、箇成取續罷在、人氣ハ素々淳朴成島方ニ候處、近來出入絶不申故、自ラ押移候哉ニテ、淳朴ノ大風ヲ傷候樣子ニ御座候、

利島

神津島

一利島ノ儀、東西貳拾町、南北貳拾町、周廻二里程有之、一ツノ山島ニテ、海淺深ハ、地方ヨリ壹町程沖、貳拾尋ヨリ貳拾四五尋有之、岸波高ク大小船トモ片時モ繫留難相成、北風ノ度々濱手打崩候間、其時々丸石ヲ敷並ヘ、濱形ヲ造リ、積荷ノ儘引揚候難場ニテ、御倉島同樣、女共多罷出候儀ニ有之、右濱邊ヨリ人家迄坂道四町程登リ、山裾切開候場所故、二軒ト續候家居無之、耕地ハ眞土ニテ地味宜、作物相應ニ生立候得共、少反別ノ皆山畑風當强ユヘ、取實少ク、漁業ハ島廻ニテ、鰹漁少々ツヽイタシ、產物モ椿ノ油絞リ候而已、其餘ハ聊ノ儀、呑水ハ清水モ無之、天水ニテ家々大木ノ下ニ水溜ヲ据置、樹ノ雫ヲ取貯置、其水ヲ遣ヒ候儀ニ有之、照續候節ハ、隣島新島迄、三里ノ海上漁船ニテ水汲ニ往返仕候由、元來艱難ノ小島ニ有之、人氣ハ眞實ニ相見申候、

一神津島ノ儀、東西壹里半、南北同樣、周廻五里餘ノ島ニテ、中央ニ白島ト申高山有之、居村ハ西ニ向、村中平地ハ纔計ニテ、山坂而已多、四周共岩石峙チ、海淺深ハ、壹町程沖、大概貳拾尋ヨリ四拾尋程ノ由、村前ニ丸石濱湊形チ御座候處、風波極靜成節ノミ船繫候迄ニテ、揚船場ニ有之、耕地ノ儀一體砂地ノ島方ニ御座候得共、風雨無之年ハ、箇成取實有之由、乍然皆畑少反別故、夫食引足不申、此島ノ男ハ漁業專一ニ致シ、女ハ耕作山稼重ニ仕、諸事新島同樣ノ振合ニテ、野牛有之候得共、仕ヒ不申、人氣ハ剛强成方ニテ、艦腕ノ

島々ノ作方

達者成ㄱ、七島第一ニ有之、遠沖迄骨折候故、他島ヨリハ取揚高多ク、右故以前ハ島柄宜敷ニ（眼脱カ）御座候處、近來不漁打續、其上去巳年不作、當麥作ノ儀モ漸平均四分程ノ取實ニテ、當然夫食差支候得共、不少、當時ハ困窮成島方ニ御座候、

一島々作方ノ儀、八丈島ニ田方有之而已、其餘ノ島々ハ皆畑ニテ、反畑ハ至テ少ク、切替畑ト唱、二ケ年・三ケ年モ作付イタシ候テハ、其餘苗木植付、拾ケ年又ハ拾五六ケ年モ雜木立ニ致シ、落葉等腐シ、肥氣出來候頃、伐木薪ニイタシ、又ハ作リ畑ニ仕リ、右ノ通リ順々ニ切替作付候山畑多分有之、當作方廻島中及見候處、同島ハ出來方實入共不宜、新島ハ凡五分作ノ由、八丈島田方ハ植付中ニ有之、麥作ノ儀外島ヘハ麥取入後相廻リ候ニ付、承リ糺候處、三宅島凡三分程、御倉島ハ半毛、神津島ハ四分、大島ハ相應、利島ハ八分通ノ取上ニ相成候由、夫食第一ハ芋類粟等ハ草生宜樣子ニ御座候間、此上汐風ノ障無之、順氣ニ候ハヽ、土地相應ノ出來方ニ可有之ト奉存候、

諸島ノ漁業

一島々漁業ノ儀、利島ハ不漁、八丈島・御倉島・新島・大島共少々ツヽノ漁業有之、三宅島・神津島ハ箇成、別テ神津島ハ私逗留中、鰹漁相應ニ有之、尤島々秋漁重ノ由ニ御座候、

諸島民ノ生活

一島々夫食ノ儀、平常共雜穀芋類アシタ草ヲ第一ニイタシ、其餘山海糧草相交、食料ニ仕、魚ノ腸ヲ鹽辛ニイタシ、味噌醤油代リニ相用、八丈島ノ儀、魚類多クハ漁シ不得候ニ付、鹽辛ハ上汁ヲ汲取候跡ヘ、順々ニ鹽又ハ汐水ヲ汲入置貯、相用候由ニ候間、同島御用取調中、取寄見候處、小ナル蛆生、國地魚肥ニ同樣ノ體ニテ、臭氣甚敷、島民食シ候テモ、時ニ寄リ吐シ候由、アシタ草、生山海糧草汐水ニテ煮相用候得共、夫而已ニテハ腫病相煩候故、臭氣有之候テモ、無據、食シ候由、外島ヨリ取別麁食ノ島方ニ有之、七島共米飯食候モノ、正月三日、盆三日、其餘病人ノ外無之由、去巳年、違作ノ島々、飢餓ノモノ不少、役人共種々差働差引仕、漸當日ヲ送候迄ニテ、艱難罷在候趣ニ付、極難ノモノ爲御救、島々ヘ用意米金ノ内、都合米五拾六石四斗四升、金四十兩貳分貳朱被下切ノ積申渡、米ハ壹人別計立相渡、私手許ヨリモ私ヘ被下候御合力米ノ内、二十三石五斗四升差送候間、渡方小前帳相添、別紙ヲ以テ申上候、

右ハ島々ノ樣子見聞仕候趣、書面ノ通リ御座候、八丈島持青ケ島ノ儀ハ、八丈島ヨリ巳午ノ方ニ當リ、凡ソ貳拾里餘相隔、格別危險ノ海上ニテ、一ケ年一兩度ナラテハ往返不相成、其上大船着場無之、八丈島ヘ渡海ノ小船一艘有之、去巳年七月中歸島積、右船ニテ青ケ島役人、八丈島出帆後、出島不仕、私乘船差支候間、八丈島役人共承糺候趣ヲ以申上候、且本文ノ外、島々取調可相伺儀者、追々申上候樣可仕候、依之島々麁繪圖八枚相添、申上候、以上、

午六月

伊豆國附島々取調候趣、申上候書付、

私支配所伊豆國附島々廻島被仰付候ニ付、島々ノ様子取調、取締教諭等仕置候趣、左ニ申上候、

諸島ノ困窮

一近來違作ノ年柄多、國地穀類直段引上候ニ付テハ、島方夫食行屆兼、拜借物等相願候島方モ有之、追々御貸渡相成候處、去ル卯年半高被下切、殘半高永年賦ニ被仰付、其上此度廻島ニ付テモ、極窮ノ者共ヘ、米金被下候段、格別ノ御救助ニ有之、元來島方ノ儀ハ、作物少ク、土地ノ産物ヲ以テ、國地穀類交易イタシ、取續候土地柄ニテ、右體拜借物等相願候ハ、無餘儀次第トハ乍申、適凶荒有之候迚、夫食差支候ハ、畢竟兼テノ心懸不宜故ノ儀ニ付、先前幷去々辰年被仰渡候通相心得、平常無油斷、何品ニ限ラス、夫食相成候品々積貯置、凶荒ノ節差支無之樣可致旨申渡、精々教諭仕置候、

備荒穀ノ貯蓄

一御用穀ノ儀ハ、全非常手當ノタメ、厚御趣意ヲ以テ被仰付候事ニ候間、是迄拜借人分、年賦割合ノ通無相違詰戻、猥ニ拜借不申付、凶荒等ニテ夫食差支、及飢候程ノ節ニ至、正路ニ人別取調、拜借申付、小前帳取揃置、便船有之次第、役所ヘ差出、詰戻等差圖請、是又年賦割合通、急度詰戻、尤年々新設ニ引替ヘ、不更痛樣大切ニ相圍、其年々有高帳可差出旨、八丈島ヘ申渡、當時有高見分仕置候外、島々ノ分見分仕候處、有高等相違無御座候、

産物密賣ノ取締

一島々産物ノ儀、江戸鐵砲州十軒町會所ノ外、町(聊カ)ノ品タリトモ交易堅御禁制ハ勿論ニ付、田口五郎左衞門支配ノ節、羽倉外記回島ノ砌、産業營方、且拔荷取締ノ儀申渡候得共、兎角心得違ノモノモ有之、駿州清水湊・豆州下田・相州浦賀邊、又ハ江戸川入船ノ上、産物拔散、或ハ船頭帆待物抔ト唱、是又拔亂候風聞有之、不埒ニ付、向後心得違無之、聊ノ品タリトモ、會所ヘ差出、都テ御法度ノ趣、堅ク相守、正路ニ産業出精可致、右ハ先年御改正、御救ノタメ、諸産物賣捌會所取建被仰付、厚御世話モ有之候ハ不容易儀難有可存、猶此度回島ニ付、被仰渡候御趣意モ有之、前文ノ通申渡候ハ、全小前末々迄渡世向安心致シ候儀ニテ、銘々取續方專一ノ儀ニ付、聊心得違無之樣可致、別テ八丈島ハ御用船預リ、並地役人共御船ヘ乘組候儀ニ付、産物拔散候筋無之筈ニ候間、若此上如何ノ風聞於有之ハ、急度遂吟味候條、其旨相心得、精々取締可致旨申渡候、

産物送狀ノ取締

一島々産物送狀之儀、島役人共連印ニハ候得共、右産物ノ員數ハ、船方勝手儘認入候ニ付、江戸川着船改ノ節、時々相違モ有之、右ハ荒濱ノ由ヲ申出(イ、立)ニイタシ、積込ノ砌、過不足出來候趣、船頭共申立候趣ハ、無據譯ニモ可有之哉ニ候得共、右ノ内ニハ、如何ノ取計モ有

農業ノ奬勵

之趣相聞、不埒ニ付、此上如何ノ儀相聞ニ於テハ、吟味ノ上急度申付候條、向後嚴敷取締イタシ、正路ニ取計可申旨申渡候、

一島々農業ノ外、有來產業ノ儀、無油斷相稼可申ハ勿論ノ儀ニ候得共、仕來候漁業山稼等ノ外無之樣相心得罷在候ハ、全事馴サル故ニテ、畢竟ハ渡世向心掛薄キユヘニ有之、仕來ノ外ニモ其場所ニ應、格別益ニ相成候親規ノ漁事モ有之、山稼ノ儀モ炭燒出カ、其外銘々手業ニテモ土地ノ產物ト相成候儀可有之、植物ノ儀モ是迄木立無之、原地抔見立、夫食足合ニ相成候品見立候カ、小苗木ニテモ格別世話致シ、植付候ハ、、往々島爲ニ相成候儀ニ付、地役人重立候モノ共、厚勘辨工夫イタシ、土地相應爲筋ニ可相成見込候儀ハ、其段可申出立、小前末々ノモノトモイタシナレサル儀ハ、差當リ心入モ薄キモノニ候間、能々呑込、相勵候樣可申諭、右ノ趣ハ、羽倉外記回島ノ節モ申渡置候處、其後島爲可相成儀申出候島方モ無之、產物相增候儀モ勿論無之、却テ島々產物ノ內、近來强テ不差出品モ有之、又ハ出方候品々モ不少、畢竟地役人幷村役人重立シモノ共申諭方世話向不行屆故ノ事ニ有之、前文ノ通リ、小前ノモノ共ハ致馴サル儀ハ心入薄ク、容易ニ呑込不申モノニ付、前書ノ趣、能々申諭、爲相勤、島爲相成候樣取計、其次第具ニ可申上、且先年ヨリ差出來リ候產物、當時實ニ出產不致品々ハ無據候得共、都テ心得違ノ儀無之樣、

船ノ難破處置取締

諸島入用ノ減

正路ニ取計可申旨申渡、精々敎諭仕、椎茸作仕譯書等相渡置候處、新島ノ儀是迄椎茸作、幷炭燒仕候儀無之候得共、申諭ノ趣、厚差ハマリ候樣子ニテ、炭燒出可仕、椎茸作リ相勤候樣可仕旨申、早速書付差出、猶亦屋鋪廻リヘ桐木植付度候處、苗無之候ニ付、渡方相願候間、追テ私豆州韮山屋鋪ヨリ桐苗差送候積ニ御座候、

一諸國御廻米積船、洋中逢難風、島方ヘ漂着イタシ候ハ、、島役人共早速罷出、逢難風候次第無紛候哉、事實篤ト相糺、無相違ニオイテハ、乘組ノモノ共一同爲立會、打米濡米等嚴密ニ相改候ハ勿論、右ノ趣注進申越、入札ノ上御拂ノ積、及下知候上ハ、元來夫食乏敷、土地旁格別踏込、正路ノ直段ヲ以、入札可致處、御拂相成候ヲ見込、馴合不正ノ入札イタシ候哉モ相聞、且又諸家回米積船幷商船等漂着ノ節モ、不正ノ難破船ト乍存、穀類諸荷物等買請、又ハ船方ト島方ノモノ共ト馴合、諸荷物買取、上方筋ヘ持渡、賣捌候由相聞、實事ニ候ハ、、不屆至極ニ付、向後右體ノ儀風聞タリトモ於有之ハ、急度遂糺明、可處嚴科候條、萬一右樣ノ儀有之ハ、速可申出、若見遁候カ、タトヘ其始末不存役人共ニテモ、是又吟味ノ上、御科被仰付候間、精々取締可致旨申付置候、

一島々入用帳見屆ノ上、小入用減方ノ儀、精々申付置候、八丈島入用帳ノ面、御船揚下シ、其外ニ付、多分ノ人夫相掛、困窮ノ島方小前末々ノモノ及難儀候間、自今以後、無益ノ人

夫相省ハ勿論、御用船ノ權威ヲ以、餘慶(ママ)ノ人夫遣申間敷、都テ村入用相減候樣、專一ニ心掛可申旨、申付置候、

流人ノ脫走取締

一流人共ノ内、人撰ヲ以世話役相立、取締爲致候由ノ島方モ御座候處、素々流罪ニ罷成候程ノ不屆モノニ候上ハ、流人共ノ取締ハ勿論、世話向等可行屆筈無之、却テ不取締ノ基ニ候間、向後世話役ノモノ相止、地役人・村役人共、精々取締可致旨申渡候、

八丈島年貢及注文反物ノ改良

一島々流人ノ内、島拔有之候ハ、畢竟地役人始、村役人共不取締故ノ事ニ候間、濱番ノモノ不絶見廻、御條目ノ趣堅相守、向後島拔等無之樣、精々取締申付置候、

一八丈島御年貢並御注文御反物ノ儀、去巳年納ノ分、地合相省(劣カ)、染ムラ等モ有之、一體ニ出來方不宜ハ、畢竟地役人・村役人トモ不行屆故ノ事ニ候間、以來絲性相撰、染方・織立方共精々入念可申、且又賣反物ノ儀モ、近來別テ地合相省(劣カ)、絲目等モ輕ク織上候ニ付、自ラ入札、直段ニモ相響、却テ島方不爲ニモ相成候間、絲目不減地合等、都テ前々ニ不劣樣、織立可申旨精々申渡置候、

八丈島御船積荷方ノ取締

一八丈島御用船ヘ積入候荷物ノ儀、役儀相勤候モノ、又ハ身元宜モノ共ノ分而已多積込、小前末々ノモノ、分ハ、少々ツヽ積入、又ハ相劣候節モ有之候由相聞、實事ニ候ハヽ、不埒ノ至ニ付、向後平等ニ割合積込可申旨、地役人・村役人共ヘ申渡、御船預リノモノ共ヘモ、依怙贔負ナク、積入可申旨、是又申渡置候、

八丈島御用船預リノ取締

一八丈島御用船預リノモノ共ノ内、病氣ヲ申立、數年江戸表ニ罷在、代乘致サセ候段、不埒ニ付、自然以後御用船預リ、地役人・村役人共ニ至迄、實以テ大病ニテ歸島難相成モノハ格別、無謂滯府致間敷旨、申渡置候、

御用船頭水夫ノ取締

一御船預リ、並年寄水主共儀、御扶持方被下之、年來海上乘馴候身分ノ處、年々一上下不致御船モ有之、畢竟御船乘方未熟ユヘノ儀、且又以前ハ江戸川並口嶋等ニ越年致候ハ、邂逅ノ趣ニ候處、近年ニ至リ、江戸川又ハ大島等ニ於テ、度々越年イタシ候ユヘ、島方ニ相殘候モノ共、格別及難儀候由相聞候間、以來出精乘廻、可成丈越年不相成樣可致、若此上未熟ノ乘方イタシ候カ、如何ノ風聞於相聞ハ、其次第ニ寄、無用捨御船預リ、並年寄役共取放候間、其旨兼テ相心得、未熟ノ水主ハ、速ニ引替可申旨申渡候、

御用船乘組員積荷賣買ノ取締

一御用船ニ乘組、江戸表ヘ罷出候モノトモ、歸島ノ節買入持渡候絲類、其外諸色共小前ノモノトモヘ、高直ニ賣渡候由相聞、實事ニ候ハヽ、不埒ノ至、若此上不正ノ賣方致スニ於テハ、吟味ノ上、急度申付候條、向後正路ノ直段ヲ以、取引可致旨申渡候、

他家ト稱スル民習打破

一八丈島ノ儀、從古來他家ト唱、人家ヲ隔、山野ノ側抔ニ床モ無之、小家ヲ作、臨產幷徑水ノ婦人ヲ一(入カ)家人ト一切往來致サス、父母大病ニ候共、看病イタシ候儀モ不相成由、甚人

諸島ノ流人ヲ他ニ移スヘシトノ説

情ニ違候事ニテ、産婦手薄ノモノ等ハ、濕邪瘴氣等ニ感、夫カタメニ持病等引出、甚敷ハ不治ノ難症ニ至候モノモ有之候由、且又小婦淫行ノ階梯ニモ相成、以ノ外ノ事ニ有之、先前支配御代官廻島ノ砌、他家取毀申付候得共、今以テ不相止趣、尤折惡敷不漁凶荒有之ヲ神明ノ祟ト心得違致間敷、凡神ハ非禮ヲ受候者ニ無之處、御大法ヲ以申渡候儀ヲ背、神佛ニ祈念致シ候迚、其驗有之儀、絶テ無之事ニ候間、能々相辨可申旨申渡、猶精々教諭イタシ候處、私滞島中山野ノ他家悉取毀候趣ニ御座候、

一八丈・新島・三宅三島共流人被差遣候島方ニ御座候處、追々人數相增、當時在命流人、八丈島ハ浮田一類ハ相除、二百七拾七人、新島ハ百九拾八人、三宅島ハ二百七拾五人有之、右ノ内ニハ、長脇差ヲ帶、横行、又ハ博奕ヲ渡世ニイタシ、流罪ニ相成候惡黨・無宿・無賴ノモノ多、其餘武家・出家等何レモ手業等覺候モノハ少ク、大概其日ノ稼難出來モノ而已ニ有之、邂逅耕作ノ手傳ニ相雇候テモ、島民ヲ輕蔑致シ、働不申ユヘ、日雇稼モ難爲致、無據困窮ノ島民共ヨリ、折々ハ食物ヲ與ヘ、露命爲相繋候樣子モ粗相聞候ニ付、取締方申渡置候得共、素ヨリ流罪相成候程ノ不屆モノニ候間、島役人共ノ申付行屆兼候由ニ有之、流人相增候ニ隨ヒ、夫食不足ノ島方、自然困窮モ彌增、惇朴ノ上風ヲモ傷リ候儀ニテ、甚過慮ノ至リニハ候得共、異國船渡來ノ節、島役人共狼狽罷在候砌、流人共ノ内、萬一存外ノ儀引出可申モ難計、旁島爲第一ト申候得ハ、流人不被差置方ニ可有御座、輕重御權度ハ思召御座候事故、存付ノ儘申上置候、

八丈島々民ノ出稼

一八丈島ノ儀、元來夫食不足ノ島方ニ御座候處、連年人數相增候上、流人モ多ク、旁何分ニモ夫食引足不申、島中一體ニ困窮仕候ニ付、先前支配ノ節ヨリ、國地入百姓相願、追々引越候得共、未格外ノ人數多ニテ取續兼候間、機織不出來女ハ、出島奉公稼ノ儀願出申候、右ハ從前女人別多相續相成兼候段無相違、出百姓ト違ヒ、下物モ無之儀ニ付、願ノ通被仰付候樣仕度、別紙伺書取調、追テ申上候樣可仕候、

八丈島著船場ノコト

一八丈島着船場、八重根湊・神湊共、三方岩石高ク、掛船不相成候ニ付、荷物陸上イタシ、上ケ船ニ仕候儀ニテ御用船上ケ下シ、御反物共積荷物積上ケ共、極難澁ノ場所ニ御座候處、右兩湊村役人共儀、海岸其外難場ノ岩石追々切開キ、自普請致シ候ニ付、御用船上ケ下シ、荷物積入湊上ケ等致シ能相成候ハ、、格別骨折出精仕候故ノ儀、以後勵ノ爲ニモ相成候間、御褒美被下置度段、地役人共相願候ニ付、場所見分ノ上、篤ト取調候處、申立ノ趣無相違相聞、困窮ノ島方右體普請致シ候ハ、格別人力入費モ相掛、奇特ノ筋、以後ノ勵ニモ罷成候間、可相成御儀ニ御座候ハ、、相當ノ御褒美、又ハ御手當被下置候樣仕度、委細ノ儀ハ、別段取調申上候樣可仕奉存候、

新島ノ産業振興

一新島ノ儀、漁業専一ニ相稼候處、元島ノ振合ヲ以、生魚并干魚ノ類御當地へ差出候得ハ、島爲相成候趣ニテ、八ケ年以前、戌年中、羽倉外記廻島ノ御取調相伺候趣モ御座候間、猶又篤ト取糺候處、鰹節并干魚ハ悉手數相掛候ノミナラス、直段下直ニ付、押送船有之時節ニ寄、鮮魚ニテ差出候得ハ、格別島益相成、島一體別テ漁業相勵可申旨申之、押送船三艘打立御免相願候間、篤ト取調、別紙ヲ以テ相伺候積ニ御座候、

八丈島農作奬勵

一島々産物ノ内、出劣又ハ出産不仕分モ御座候趣ニ付、取糺候趣、別紙ヲ以テ委細申上候、

一八丈島ノ儀、山畑切替畑多旱魃ノ節、諸作一時ニ枯痛根絶ニ相成、毎々夫食差支候處、土佐國薩摩芋ノ儀ハ、至テ根強ク、旱魃ノ節ニテモ枯痛不申由ニ付、右芋種植付土地相應仕候ハヽ、一廉ノ夫食ニ可相成候由ニテ、種芋渡方相願候ニ付、八丈島ハ勿論、外島ニテモ試作申付度候間、右芋種御取寄、御渡被下候樣仕度、委細別紙ヲ以テ申上候、

孝子表彰

一神津島百姓兵吉・三宅島百姓源吉・同伊右衞門悴寅松・同彦右衞門娘サヨ、親へ孝行致シ候段、地役人共申出候趣、無相違相聞、兵吉ハ別テ孝心ノ趣ニ付、同人へ金貳兩、源吉外二人へ金壹兩貳分宛被下候段申渡、用意金ノ内ヲ以テ相渡、私手元ヨリモ兵吉へ米貳俵、源吉外二人へ金貳分宛差遣、右ノ外島〻長壽人并引船人足手當共、都合、米三石壹斗、金拾三兩貳分、是又用意米金ノ内ヲ以テ相渡申候、且新島ノ儀、一體ニ取締宜候間、私手元ヨリ米五俵差遣申候、委細別紙ヲ以テ申上候、

右ハ、伊豆國附島〻廻島見分取調ノ上、取締等仕候趣、書面ノ通御座候、依之一ト通申上候、以上、

午　月

（維新史料）

〔江川家系譜〕○維新史料編纂會所藏本

弘化三年丙午、伊豆國付七島を巡回取締并教諭致し候、右教諭中八丈島は古來他家（タヤ）と唱へ、人家を隔候山野の側抔に、床も無之小家を作り、臨産并經水の婦人を入、家人と一切往來致さす、父母大病に候とも、看病致し候義も不相成惡弊有之、因て産婦手薄の者等は濕邪瘴氣等に感し、夫か爲め病難に罹り候もの多く、且又婦女淫行の楷梯にも相成候こと故、先前支配代官より取毀ち申付候得共、神明の祟有之、不漁を來し候抔と深く迷溺いたし、今以て其儘仕來候に付、今般篤く教諭を加へ候處、孰れも了解致し、滯島中他家盡く取毀候、

同年六月、巡島より歸り、伊豆國島々の風度（土カ）人情營業物産に付申立候、又た別に伊豆國島々への取締方法及教諭いたし候儀を申立候、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

七月朔日

右、御目見

御納戸構

伊豆國附嶋ゝ

見分御用仕廻被歸候

御代官

江川太郎左衛門

鹿兒島藩主島津齊興、英・佛船琉球渡來ノ狀ヲ長崎奉行井戸覺弘・同在勤目付山口直信内匠○後丹波守及大坂城代松平忠優後忠固○伊賀守○上田藩主ニ報ズ。

〔鹿兒島藩屆書〕○公爵島津忠重所藏本 島津家國事鞅掌史料所載

長崎奉行所へ

一筆啓上仕候、先達而申上置候琉球國ノ内那覇港へ、當四月七日ヨリ卸碇居、同五月七日、同國之内、運天港へ乘廻リ候「フランス」船一艘、同十三日、右同湊へ卸碇候「フランス」大總兵乘船二艘、都合三艘共三司官初悉ク差越、晝夜勤番、左候而、大總兵ヨリ琉球總理大臣へ致面會、和平之事申談度申出趣有之、追テ可及返答旨申達候處、是節總理大臣之名目ニテ國頭案司悉ク召列、大總督乘組船へ差越、致面會候處、外兩艘之乘頭ニモ列席ニゐ、滯留唐人ヲ以テ、本國皇帝之命ヲ請、差越候旨申出、左候而、歐羅巴數國ノ樣子、强大申立、琉球ニモ必佛國へ親ミ候樣、且佛國清國和好交易免許之文書差出見セ、其外商道ノ儀共申ニ付、終ニハ此國ヨリ和好致和平交易度趣、國頭按司へ申聞候ニ付、此儀者國家之大事故、國王へ申聞、何分可返答旨申達置、猶亦篤ト免許之儀、兎角琉球之儀者、小島ニシテ屬島モ偏小、全體產物相少ク、勿論金銀銅鐵類者全ク無之、清國之屏藩ニ而、德加喇島迄致通融候、尤モ清國へ代々貢職ヲ供フ故、入貢之便ニ日用品物買取、又藥用ヲ求メテ療用相達シ、非命ノ死ヲ免レ候、右貢物并清國へ持渡候品物、皆琉球之產ニテ無之、專德加喇島ヨリ買求メ、是ノ而已ナラズ、國用之米穀・材木・鐵鍋其外器具等彼島之商人持來、漸致用辨候、且風事之逢災難候節者、都而蘇鐵ヲ致食用、專度德加喇島之商人持來候米穀ヲ以テ、食ヲ繼キ、活命ヲ得、窮國之實情、右次第ニテ、廣ク他邦ヨリ和好交易致候儀者、實ニ不及國力候、適々遠國ヨリ渡來好意ノ程、誠ニ以テ感激不淺候得共、何分ニモ應貴意難候、深ク仁慈ヲ加ヘ、致許容、歸國之後、宜敷取計吳候樣、折角丁寧相斷候處、大總兵篤ト承知候得共、前文窮苦之次第等ハ不致信用、再往申掛候ニ付、猶又無餘儀、再三及理解候處、申立之趣、皇帝へ可致

佛艦渡來ス

奏達、然レ𪜈大總兵ニハ不致頓着候間、國體之樣子見屆候形行、奏聞致候得者、皇帝何分議定可有之、然者皇命之旨爲可申添、今一ヶ年程ニハ可致來着、去々年以來滯留之佛朗西人幷唐人ニハ、其節列歸リ、三四月後右之佛朗西人、又々可差渡、外ニ佛朗西人一人、重テ皇命到來之節、通事トシテ殘置候間、琉球國語可相敎旨、申聞候ニ付、國禁之旨、譯而御斷リ一同列歸リ候樣申達候得共、更ニ不聞入、右之者卸置、左候テ先達而乘移居候佛朗西人ハ勿論、外佛朗西船ヘ乘移居候唐人モ大總兵船ヘ召乘セ、都合三艘、去月廿四日、一同出帆、子之方ヘ乘行キ、帆影不相見得候、滯船中任望食料等相與ヘ、尤モ殘置候佛朗西人一人ハ、近邊寺中明除キ召置、柵ヲ結ヒ、番所數軒相搆ヘ、三司官初メ悉ク晝夜勤番、堅ク取締申付置候、且又同十四日、同國之中、豐見城間切沖ヘ異國船一艘卸碇候ニ付、差越候處、干瀨ヘ走揚難儀之體見受、早速小舟差遣、挽卸相助候得共、乘組異國人之內、一人溺死、死骸ハ不相見得候、翌十五日、那覇港ヘ挽入、本國幷漂着之次第等相尋候處、言語文字不相通、佛朗西國ノ船乘組拾六人來着、挽檣相損居候間、右調用之木所望致度、修補相調候者、可致出帆旨、手樣ヲ以テ漸ク相通シ、三司官初悉ク晝夜勤番前條同斷申付置、所望之木相與候、然處乘頭ヨリ運天ヘ差越、大總兵ヘ致面會度、手樣ヲ以テ相達、强而難差留役々附添ヒ差越爲致面會、直チニ列歸候處、未タ滯船致居候ニ付、猶又取締申付置候、尤當四月五日、那覇ヘ

渡來、滯留致候英吉利國之醫師幷妻子唐人共者、無異事罷在候旨、琉球國ヨリ飛船ヲ以テ申越候、此段爲可申上如斯御座候、

銘々別紙所附差上候、恐惶、

六月十八日

井戸對馬守（覺弘、長崎奉行）樣　　久浮（島津石見、鹿兒島藩家老）

山口內匠（直信、目付）樣　　久武（島津壹岐、同）

參人々御中　　久寶（島津豊後、同）

一筆啓上仕候、琉球國之內運天港ヘ卸碇候佛朗西大總兵乘船等、都合三艘、去月廿四日、一同致出帆候、形行等ハ先達テ委細申上置候通リニ御座候、然ハ又候異國船可致來著儀ハ勿論、旁々不容易譯柄ニ付、別段手當致置候、一組之人數、則琉球國ヘ差渡候樣、大隅守（島津齊興、鹿兒島藩主）申付越、早速取計候、此段爲可申上如斯御座候、恐惶、

六月廿五日

弘化三年六月是月

井戸對馬守様
山口内匠様
參人々御中

久　久
武　寶

〔鹿兒島藩大阪藩邸留守居屆書〕○島津家國事纂掌史料所報

○六月大阪城代へ

琉球國へ當四月五日、英吉利國之船一艘渡來、乘組二十人、乘頭之醫師ヨリ、本國皇帝之命ヲ受ケ差越候間、地方買取致住居度段申出、不相成國法之儀申出候得共、更ニ不聞入、醫師夫婦、子供兩人、唐人一人上陸、荷物卸置、本船ハ同八日、致出帆候ニ付、無是非近邊寺中明除召置、晝夜勤番堅ク取締申付置、任望食料等相與候、尤醫人ヨリ病人有之候得者、療治致度旨申出候得共、相斷置候、同七日、同國へ異國人一艘卸碇候ニ付、役々差越、相尋候處、言語文字不相通、滯留唐人ヨリ佛朗西國之船三百人乘組致來著、大總兵船二艘追々渡來之筈ニ候間、夫迄ハ滯船可致段申出、晝夜勤番前條同斷申付候、五月十三日、同國へ異國船二艘卸碇候ニ付、同斷相尋候處、佛朗西國之船三百人乘組、并同國之船五百人大總兵乘組到

英船琉球ニ渡航ス

佛艦隊渡來ス

來之旨、手樣ヲ以テ相通シ、是亦嚴重取締申付置候、然處大總兵ヨリ琉球國總理大臣へ面會致度申出候趣有之、總理大臣之名目ニテ、國頭按司面會致シ候處、外兩船之乘頭ニモ列席ニテ、滯留唐人ヲ以テ本國皇帝之命ヲ請差越候トノ旨申出、左候テ琉球ニモ佛朗西國ト親ミ候樣、且和好交易致度旨、申聞候ニ付、琉球之儀ハ、全体產物相少勿論、金銀銅鐵類ハ全無之國柄ニ候得共、和好交易致候儀ハ、實以不及國力候而、叮嚀相斷候得共、右次第不致信用再往申越候ニ付、猶無餘儀及理解、再三相斷候處、皇帝ニ可致奏達、然共大總兵ニハ不致落著候間、國體之樣子見屆候形行致奏聞候ハ、、何分議定可有之、就テハ皇帝之命爲可申諭、今一ヶ年程ニハ來著可致、去々年以來滯留之佛朗西人并唐人ハ、此節列レ歸リ、三四ヶ月後、右之佛朗西人ハ、又候可差渡、外ニ佛朗西人一人、重而皇命到來之節、爲通事殘一人置候旨申出、譯而相斷候得共不致承引、右之者卸置滯留佛人并ニ唐人ハ大總兵船ヘ召乘セ、去月廿四日三艘共一同致出帆候、滯留中任望食物等相與、尤モ殘置候佛朗西人一人ニハ、近邊寺中明除、召置、堅ク取締申付置候段、琉球ヨリ申來候、

右ニ就テハ、去々年一組ノ人數差渡置候得共、又々異國船可致來著儀ハ勿論、旁々不容易譯柄ニ付、別段致手當置候一組之人數、此節琉球ヘ差渡候、依テ長崎御奉行ヘ追々御屆申出置候段、國許ヨリ申越候ニ付、此段申上候、右之趣、御用番之御老中樣ヘモ申上候、以上、

佛國水師提督應接ノ經過

廿四日退帆ス

琉球ヲ警備ス

松平大隅守内
高崎金之進

水戸藩士高橋多一郎愛諸密ニ前藩主徳川齊昭前權中納言ノ解慎宥免ニ奔走ス。

〔高橋多一郎書翰〕○高橋堀所藏本　遠近橋所載

齊昭在邑ノ辯明

一中納言殿(徳川齊昭)儀、在府を好ミ不申様〻意味ニ、御疑察を蒙り候義も有之ハ不ニ承り候得共、是ハ全く　中納言殿を忌ミ憚り候ものゝ讒口か唱出ー候義ニも可有之哉、内實〻義、左ハ委曲申上候、抑天保十一庚子〻春、土地方改正幷學校取建等〻義ニ付、親ら世話不被致候て〻行屆不申、依るハ保養旁在邑御暇を蒙り、下國被致、翌年參府可被致〻處、右學校取建願〻義ハ、同年九月中願濟ニ相成候義ニ御座候へハ、僅カ四五ヶ月〻間ニハ普請等ハ申ニ不及、地行等ニも至りかゝ、尚又土地方改正〻義ハ、不容易事業ニハ有之、不行屆儀勿論ニて、殊ニ其砌小石川屋形向焼失被致候ニ付てハ、旁以差支多端ニ候へハ、此上壹ヶ年〻御暇被相願可ニ相整被申度との存意ニ有之候處、願〻通り壹ヶ年御暇延被仰出、益精〻世話被致候所、翌辛丑〻春、

齊昭ノ心事

(十一代將軍德川家慶)文恭院様薨御被遊候ニ付、早速參府可被致と用意等迄相整、參府〻程御老中衆へ被及御内問候所、其義ニも被及間敷との御差圖ニ付、被相扣候處、程ふく、ある御老中衆か御暇御年限中ニハ候へ共、御在邑〻義餘り御永引ハ御好ミ不被遊哉〻御模様ニ奉伺候、此節御參府ニも相成候ハヽ、御場合も宜敷御事ニ可有御座哉ニ感察仕候、萬一御沙汰も被爲在候上ニるハ廉立云ミ、全く平生御懇意〻好ミを以て、内〻被申越候處、其節　中納言殿存意ハ、御暇年限中ニて有之、當春
前大將軍様御喪事ニ參府可致と及内問候處、其節さへ其儀ニも及不申旨被申越候故、相扣罷在候處、只今何〻名目もふく、一老中〻内〻勸めよりぢゝと參府致候義、躁進〻謗りを招キ可申ニも、近く表向被爲召候ハヽ、何時ふり共速ニ參府可致、兎角此方ニてハ表向被仰出候廉を相守り、翌年參府可仕との存意ニて、委曲懇ニ被申遣候所、其後間もふく右御老中御役御免退隱被仰出、此方へハ土地方幷文武〻義格別御世話有之旨、入　御聽、不一方御配慮〻義と被　思召、其儘五六ヶ年も御在邑御暇被　仰出、其砌御老中水野越州殿(忠邦)より書を被寄候て、中納言殿ニて參府を好不申故、右〻
台命も有之云ミ被申越候、扨　中納言殿被申候て、
當將軍様御庶政御中興〻折ニて有之、乍不肖三藩〻員ニ備り罷在候得て、何卒區〻〻志、

日光社參ノ辯明

萬分〻一も
公邊〻御裨補ニも可罷成と、家督以來致憂慮候處、參府を好み不申樣被申越候義、如何ふる旨義ニ可有之哉、併
公邊さへ御中興被遊候へハ、國許等〻義申迄も無之、不日ゟ御政敎ニ風靡可仕理ニ候へと、何れニ罷在候るも、
公邊御爲專一と被相悅、何等〻懸念も無之、御政事御中興〻義、追〻建議被致、殊更日光山
神廟御社參〻儀、
御先代樣ゟ久敷御沙汰不被爲在候處、
當將軍樣ニた御賢明ニまーノ〳〵、就中御庶政御一新〻折ニた有之、第一日光山
神廟御社參被遊候義、御追孝〻御美德、御政道〻大本ニ可有御座候段、このゟて申立ニ相成居り候處、天保癸卯〻歲ニ罷成、日光山
神廟御社參可被遊旨、御內沙汰御座候ニ付、其節又〻申立ニ相成候趣ハ、日光山
神廟御社參〻義、無此上御美事ニた御座候得共、近來異舶〻取沙汰追〻有之、殊ニ巳申兩歲〻凶荒ニて、天下一統國財窮乏致候折柄ニ候へハ、
公邊御始メ、諸大名ニ至るまて、日光御供等〻用途を以て、當節〻急務武備手當〻方へ御廻ニ罷成、追る武備可ありニ相整、國用等粗差支無之時節ニ罷成、日光〻義御再興被遊候ハヽ、天下一統格別〻傷ニも相成間敷、時宜〻御了簡被爲在候樣、委曲水野殿迄申立ニ相成候處、水野殿如何了簡被致候哉、日光
御社參彌御治定ニ相成、是等〻御懸りハ一家〻小事ニ有之、御豫參被遊兼候程、御勝手御不如意ニ御座候ハヽ、其旨御申立、御辭退可被遊云〻被申越、全く　中納言殿ニた公義ニ託ー、私を營み候樣ニ取り候義ニも可有之哉、畢竟
公邊御爲、彼是と憂慮被致候故、前件〻義も御申立ニ相成候義ニて、何程國用ニ逼迫ゆゑーー候迚、數十里行旅〻用ニ差支候義ハ有之間敷義、勿論ニ候處、
公邊御懷合如何〻御嚙合ニ相成居り候哉と、其節君臣一統苦心仕候事ニ御座候、四月中ニ
將軍樣日光山
御社參被爲濟、隨る　中納言殿ニも御豫參相濟、其節　鶴千代麿殿未夕乘出ーも不相濟候ニ付、習禮〻爲、當年一抔も在府被致、
公邊勤向等〻義敎喩被致度旨、水野殿へ御問合ニ相成、且又御守殿并奥御殿ゟも御願ニ相成候處、水野殿ゟ〻挨拶ニた、最初被仰出候御年數ニも未至、當月中旬ニた御暇被　仰出候御思召〻よーー、御沙汰ニ御座候、又候御在國と申さた御劬勞〻義ニ奉存候、乍去、右〻

褒賞ノ翌年嚴譴セラル

盛慮何共仕方無御座云々被申越、却る直様御歸國〻方、御前〻御模様御宜く可然よーニて、御暇被仰出、間も無之、國政向行屆候廉を以て、御傳來〻御太刀御鞍御鐙幷黄金被賜、此上益　源義殿遺志を被繼候様、

御直ニ御懇〻御褒賞を蒙り、君臣一統、無此上面目ニて、歸國被致、益國政向被相勵候事ニ御座候、然る處、右翌年ヒ、近年御政事向御驕慢氣隨〻趣を以、嚴重被　仰出候仕合ニ御座候、扨御褒賞以來國政向被取行候義ハ、常盤山　御宮御祭祀幷寺社改正〻二事ニ御座候、是も　源義公〻遺志を被繼候様、

台命も有之、打續勵精被致候義ニ御座候、併シ改正向專ら〻中ニヒ、一時思慮〻不詳と役人共取扱不行屆〻儀ニて、とさらは御法ニのけ候義ニハ無之候へ共、只今ニてヒ公邊を重ー、何れも以前〻通り、本ニ復候事ニ御座候、前件〻意味合ニ相成候義、如何〻不運ニ可有之哉、　中納言殿身ニ取り、扨〻進退度ニ迷ひ恐惶千萬〻事ニ御座候、是等〻意味合を以そも世路〻險難得ト御勘考ニ仕度奉存候、私儀先年政府方相勤、内〻極密ふる義も承知致居候間、荒增申上候、

〔高橋多一郎書翰〕○遠近橋所載

一平三郎發足後、先方〻模様如何、尚又此節柄ヒ申、途中伏セ勢横槍等を恐れ、物見等も不指出、唯〳〵義氣一片ヒ存ー、相侍チ居り候處、其砌豆屋平藏江戸表町人、平三郎兄ふり、平三郎登りニ、千住ニる摺り違ニ參り、三十日程此表ニ逗留致居候處、内用相辨シ候由ニて、七月初發足〻振沙汰有之ニ付、幸便ヒ存ー、否〻模様聞旁〻平三郎方ゟ一封指出ス、七月九日〻夜ヒ、

平三郎方迄遣候書簡〻扣

一簡申入候、打續殘暑强候得共、御障りも無之候や、相伺度候、扨先日御下り之節ハ、乍例蒼卒旁御麤抹申候、定る無異儀上著被成候や、心配仕候、扨其表、定る好キ鹽梅ニ濕り合、四様四番町坂幽玄、御骨折不斜御配慮〻御儀ヒ奉存候、扨まゝ古賀・福田・水野等無事ニ御屆被下候哉、返翰ニるも參り候ハヽ、安心ニ存候、此度ハ萬事御骨折、何共申様無之事ニ候、否御次第相分り候ハヾ、又〻貴地へも隱れ、五日計も微行致吳候様賴入存候、礫〻板も板橋源介大丈夫ニ候得共、秘封ハ渡し兼申候、事有之節ハ、御下りニ致度、六ヶ敷候ハヽ、大丈夫ふるをの使ニ尼子迄ふり遣吳候様存候、

奥醫坂幽玄盡力ス

一大奥姉之小路御用掛り老女阿部へ殊〻外同腹ニる、　大將軍様ゟ出候事一ゟ十迄姉ゟ御廻シ被遊、阿ニ御相談有之、何事も此兩人ニる内密相謀り候由、申事ニ御座候、尤先日姉〻里方、京都ニ有之、是ニ鵜飼吉左衛門(知信)說を入候得ハ、その里方ゟ姉へ廻シ、姉ゟ阿へ廻し、

老女姉小路ハ阿部正弘ト同腹ナリ

阿ゟ三連へ廻候ゝのよし、京師ニる、(信順)住谷承り罷歸申候、坂様抔御如才ハ無之御事ゝ存候へ共、御心得ニハ相成候事故、何ゝふく風説〻由ニる、申上置候様ゝ存候、京師も鷹司藤公　二條公　有栖川公、何れも御正論〻由、水府公〻事幾重ニも相含、御盡力も可被下置旨、長大夫下り候節、被爲召、　御懇〻　尊慮蒙り候由、一ト安心ニ御座候、委細ハ豆氏ゟ御聞可有之候、何も幸便取急キ草〻不備、

六月廿七日　　小杉莊左衞門（高橋多一郎 隱名）

中村平三郎様

尙〻、洩泄等〻儀申迄ハ無之候得共、何分ニも愼密ニ致シ、心懸候様吳〳〵も心配いさし候、

（朱書）此節、奸目ヲ避候爲メ、洛陽願出稍相濟、七月十三日、日光へ發足、後事弟へ托す、

〔高橋多一郎書翰〕（○遠近橋所載）

謹る奉申上候、

御大藩御仁德深く被爲渡、天下〻御大政にも御携り被遊、於公邊、一旦被　仰出候義ニるも、天下〻御爲メ、御居り合不宜と被爲　思食候御儀も御座候得ハ、夫〻御論建被爲在、總る天下〻御爲ヲ被爲　思食候難有　尊慮〻由、追〻奉傳聞、

水戸藩政ノ内容ヲ述ベ偏ニ宥免ノ斡旋ヲ請フ

既ニ先年川越庄内移封〻義、御居へ置ニ相成候も、其本ハ御大藩〻御建白ゟ出候御義〻由ニる、天下有志〻者共、御正論ニ奉感伏、隨る上様御納諫〻御美德も天下ニ顯然と被成、旁以　御代萬歳〻御基と上下奉恐悅候御儀ニ御座候、一昨年中(嘉永)納言殿御不興被蒙候砌も、御大藩ゟ御建白被成下候義、天下〻御爲とハ乍申、於愚臣共ハ徹心根難有奉感慕、日夜御宥免〻程仰望被在候處、三ヶ年〻今日ニ至る迄、登城〻義ハ勿論、國政に携り候義迄も　御宥免無之、左候得ハ、御不興〻御程も不容易御義と、殊ニ以　嚴命ヲ奉恐懼候處、中納言殿平日〻行跡、奉輕公邊候様〻義一點も無之ハ勿論、一體忠孝〻兩道ニ背キ不申様ニと被心懸候ハ、若年ゟ〻志願ニる、繼統已來ハ、別る右忠孝ヲ實用ニ施候義、益練熟被致、天下〻御爲ニハ一廉〻御奉公被致度、然る所、追年外虜〻警彌增ニ相成候ニ付るハ、外虜ヲ禦キ、邪法ヲ拒候義、當今最第一〻御奉公と被存候る、學校ヲ設候るハ武備文敎ヲ張立、忠孝ヲ敎へ、田地〻經界ヲ被正候るハ小民〻貧苦ヲ救ひ被申、其他神道ヲ尊ミ、胡法ヲ抑へ候様〻義、一〻〻て天下此御爲ヲ不被存候事無之處、不存寄も政事向

公邊御法ニ觸候段御咎ニ付、誠ニ當惑被致候義ニゐ、右ゑ改政多端〻中ニハ、不圖御法ニ觸候義も可有之哉ニ候へ共、夫レハ一時思慮〻不詳と、役人共取扱〻不行屆義ニゐ、とさらに御法ヲ犯候ニハ無之、中納言殿忠誠無二〻義ハ、天地神明も照覽被爲在候事ニゐ、俯仰共ニ耻入候義無之哉と奉存候、扨右〻通忠誠無二ニ候故、被蒙御咎候ヘハ、卽日別邸ニ被移、敬上〻念無怠、暑寒〻差別ふく、一室ニ端座、嚴重ニ被相慎、嚴命ヲ恭敬〻餘り、政事ニ携候役人共ニハ、一切目通りヲ許され不申、身近ク被召使候者も、過半被退ケ、諸事不自由ニ被致、被慎御内、尤歎敷義ハ、中將殿（駿篤）ニ對顏〻義も被致遠慮、一昨年已來〻對面三數度ふらでハ無之、其色ニハ被出不申候得共、雙方〻心中嘸〻と推量仕候義ニゐ、申上候迄ニも無之候得共、父子隔絶仕居候程〻悲敷義ハ無之處、右〻深情ヲも被仰、嚴命ヲ被致恭敬候義、朝暮歎息仕候義ニゐ、何卒片時も早く　御宥免〻蒙御沙汰、父子〻親被行候樣仕度、臣下〻身分ニゐハ、別ゐ悲歎ニ沈罷在候、忠孝〻義ハ中納言殿平日精〻心ニ被懸、被履行候道ニ御座候處、五倫〻第一と有之候父子〻親さへ、心ニ任せ不被申義ヲ深察仕候得ハ、誠ニ以涕泣ニ堪へ不申義、此等〻情實深く蒙　御憐察、御宥免被　仰出候樣、御建明被下置候樣奉願上候、中納言殿忠誠〻義ハ、一朝一夕〻事ニ無之故、永キ月日〻内ニハ、自然と明白ニ被成候事ニ候へ共、右ニ奉申上候父子隔絶〻情合、如何ニも難忍儀、仍ゐハ一日も早く父子同座被致候樣、臣下共〻大願ニ御座候間、幾重ニも　御垂憐〻程、偏ニ奉願上候、迫切〻情ニ不堪、恐れヲも不顧、奉瀆　台聽候段、大罪〻至ニゐ、御咎ヲ蒙り候義、毛頭辭避不仕覺悟罷在候間、何卒大願〻條〻、被爲聞召分、御不興相晴ま、、中納言殿兩御所樣へ御對顏相濟候樣、中將殿儀も御奉公向〻儀、別ゐ精勤被致、當年十五歲ニ罷成候得ハ、不遠親政被致候樣、奉祈願候儀、再應奉申上恐入候得共宜敷、御建白奉願上候、此段御序〻節宜敷御披露所仰候、恐惶謹言、

丙午閏五月日

水戸殿馬廻組
高橋多一郎

（渡邊鄕綱、田安家老）
渡能登守樣
閣下

○高橋愛諸ハ、前年齊昭蒙譴ノ當時ヨリ之カ融解ニ盡力セシモ、其切ニ幕府大奥ニ入說ヲ試ミシハ、是月ニ起レリ。故ニ暫ク玆ニ揭ケ、以テ他日ノ參看ニ資ス。

七月 大盡 朔甲申

朔日甲申 田中藩主本多正寛豐前守・今治藩主久松定保若狭守・加納藩主永井尚典肥前守 就封ニ依リ、新谷藩主加藤泰理大藏少輔 參府ニ依リ、各登營ス。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

七月朔日、○中略、土井能登守・松平左衞門尉・内藤因幡守・小笠原備後守、坂城加番命せられいとま下さる、本多豐前守はじめ就封の暇たまはるもの三人、

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

七月朔日

一今巳上刻御表ニ

公方様 右大將様 出御、月並〻御禮相濟

御白書院

御暇

本多豐前守（正寛、田中藩主）

諸侯參府登營

同

同

同 銀馬代二

七月廿八日

一今巳上刻、御表ニ

公方様 右大將様 出御、月次〻御禮相濟、

御白書院

代物二 銀馬代

右畢る 入御、

參勤

松平若狭守（定保、今治藩主）

永井肥前守（尚典、加納藩主）

參勤

加藤大藏少輔（泰理、新谷藩主）

勅使接伴役ヲ任命ス

二日乙酉 幕府、高鍋藩主秋月種殷佐渡守ニ勅使接伴役ヲ命ズ。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

七月二日秋月佐渡守・毛利左京亮、ことし參向公卿・門跡奔走の事命せらる、

加藤大藏大輔（泰理、新谷藩主）

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

七月二日

勅使　秋月佐渡守（種殷、高鍋藩主）
大乘院御門跡　毛利左京亮（元運、長門府中藩主）
代り
龜井隱岐守（慈鑑、津和野藩主）

右當秋、公家衆參向ニ付、御馳走人被仰付旨、於帝鑑間、老中列座、伊勢守（阿部正弘）申渡之、（高麗環雜記）

行裝ニ關スル格例ヲ定ム

五日戊子　幕府、諸侯及麾下士ニ令シ、行裝ニ關スル格例ヲ上申セシム。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

七月五日、諸家從僕行裝の事によて令せらるゝむねあり、

〔續泰平年表〕○東京帝國大學所藏本

七月五日、諸家供連〻儀ニ付、御書付、

諸家供連行裝〻儀ニ付るゝ、去丑年以來被仰出候趣、何ゝも質素節儉〻義堅相守、拜領并免許〻品さゝり共可致遠慮旨、相達候得共、今度御沙汰も有之候義ニ付、銘〻家〻拜領并免許〻品も有之向ゝ、調〻上可被相伺候、

〔老中口達書〕○東京帝國大學所藏本高麗環雜記所載

弘化三丙午年四月廿七日、○弘化雜記

五月三日、牧野備前守（忠雅、老中）殿御口達〻書取、○高麗環雜記

伊勢守供連行粧〻儀、去巳年中格別〻譯を以、拜領并御免〻品・家格〻品共平日可相用旨、厚被

仰出有之、一旦相用候處、内願〻趣茂有之、當時式立候節而巳相用候得共、御役柄に對ー、兼る心底不安存ー居候處、最早壹ヶ年茂相用、規摸茂相立候間、當御役中ゝ差扣置度旨、猶又此度内願有之、達

御聽候處、格別〻譯を以被　仰出候儀不苦事ニゝ候得共、勤柄段〻申上候心底〻處、尤ニ御聞屆被遊、當御役中ゝ、去巳年迄相用候供連ニ復ー候樣、相達候事、

右〻通、備前守殿、被仰渡候ニ付、心得候樣御目付中ゟ被申渡候、

午四月廿七日○弘化雜記

弘化三年七月五日

（弘化雜記）

○參　考

○本令ハ、天保度ノ節儉令ヲ寛ニスルノ趣旨ニ、出タルモノナルベシ。仍テ其史料ヲ

左ニ載セ、參考ニ資ス。

〔徳川禁令考〕

天保九年ノ節儉令

天保九戌年二月

御旗本之面々江申聞候覺

一衣服諸道具等隨分有合を用ひ、古く候とも見分無構可用之、新規之儀可爲無用候、朔望廿八日其外御式等之節ハ格別、平日ハ、白小袖着用ニ不及候事、

但、上着ニハ、只今迄縞類着用無之候、向後ハ有合ニ着用たるへく候、

一家來之衣服、猶以見苦敷候共被用候程ハ可用之、并綿布取交候共いつれニも勝手ニ能樣可申付候、尤女之衣服可爲同前事、

一家作等不急儀、無用之事、

一惣而公儀江掛り候儀ハ格別、家督嫁娶を始、一類中之贈答、只今迄之半分たるへき事、

一冠婚嫁娶之振舞ハ、近年御定之趣を以、猶又輕くいたすへし、其餘之祝儀ニハ、吸物盃事ニ而振舞無用ニ候、小身之輩ハ、一向に吸物盃事たるへき事、

但、常々參會平日用ひ候給物之外、少も取繕申間敷事、

一可成程ハ、知行所之者召置可然候、惣而相對ニ召置候ものも、何樣ニも用事辨候ハ、、男

振不構可召置事、

右之通、天明七未年、相觸候處、近來忘却致し、衣食住共奢侈相募、又ハ供連等之外見を飾り、自然困窮ニ及ひ候族も有之哉ニ相聞候、殊ニ此度西丸炎上ニ付而ハ、莫大之御入用ニ候間、公儀ニ而も格別御儉約被仰出候事ニ候得ハ、何も厚く心を用ひ、來々子年迄三ヶ年之間、嚴敷省略可被致候、且又右年限中ハ、供連之儀一統格別ニ省略いたし、減少之趣等、銘々大目付御目付江相屆候樣可被致候、尤衣類等隨分麁服を着し、召連候家來共衣類見苦敷候とも苦しからす候、都而無益之費を省き、武備非常之手當專一ニ心掛ヶ可被申候、

右之趣、可被相觸候、

四　月

八日辛卯　老中阿部正弘（伊勢守○福山藩主）前水戸藩主德川齊昭（前權中納言）ノ海防意見ニ答ヘ、且請ニ依リ、米國國書及我諭書ヲ內示ス。

〔徳川齊昭書翰〕（○公儀德川圓順所藏本　新伊勢物語所載）

○六月十七日老中阿部正弘宛

不順之候、起居萬福可賀〳〵、當年去、諸國有年〳〵由沙汰承り候へ共、拙老抔ハ左樣斗とも

八丈島對馬兩方面ニ手ヲ伸スベシ

異國船應接ノ内容ヲ承リタシ

不存候、出穂ニ至り候ハヽ、存之外と察申候、尤一小島とハ乍申、　日本も廣き事故、南西國〻抔ハ、豐作之所も可有之候得共、平均候ハヽ、中ニハ至り申間敷、内川運送の國〻ハ、別る不作候半と心配致候、殊ニ水害なと可有之哉と被察候、異船等之義も、承及候へハ、尚更有年ニ致度候、御掛りニてハ、別る御心配と推察致候、拙老兼〻先見上書建白致候通り、此度ハ琉球も六ヶ敷と被察候、一寸逃れニ御内〻福建等よて交易爲御濟ニも相成候ハヽ、少〻の内ハ穩の樣ニ見へ可申候得共、又〻八丈・對馬等之島〻へ手伐出し候儀、無疑被存候、且又浦賀之儀も被下物等有之候へハ、來年ハ勿論、當年中ニも、又〻來候半も難斗、其時々被下物有之候ハヽ、船ヲハ度〻寄可申、其時〻人數を出し候ハヽ、大名と勝手も痛ミ、初ハ千人出候者ハ五百人三百人と申如く、段〻ニ減し、萬一事有之節ハ、如何ニモ御手薄ニ相成候ま、、尤大名の義、順番ニ被仰付候ハヽ、痛も同人のミ出候とハ相違可致候へ共、總いさゝか相成、夷狄ハ船ヲ寄候へハ、益ニ相成のミニて、乍憚御無術ゟと奉存候、日夜寢食を忘レ、御爲筋存上候身ニゟハ、心配不啻候、此度浦賀へ寄候舟よりハ、如何の願申立候哉、又如何樣の御答ニ相成候哉、不苦候ハヽ、相伺申度候、世上風說よてハ、米穀鷄薪水等莫大ニ被下候樣、傳聞致候へ共、米ハ百俵ゟ千俵位も被下候義、鷄薪とても右ニ順可申、先ツハ水斗ゟ多事と被察候、前文巷說程ニハ有之間敷とも存候、乍然少〻ゟありとも船を寄セ候度〻被下候事と存候ハヽ、異國〻船〻、追〻聞傳へ寄セ可申、又寄候上ハ、津〻浦〻何レ〻海よても測量致し、圖面へ記候て、勝手も相分り、何日何時いつれの處へ寄候ニも、案内ニ可相成、此方ゟ事を御求被遊候やう相成可申候、追〻上書建白致し候愚論ハ、御取用ニ不相成候とも、只今の内何卒よき御策略ニゟ、永代　日本万國ニ孤立致し候ハ勿論、　德川家の天下ニて、開闢以來孤立ニ相成居候　神國危難の緒口御開ニ相成樣ニてハ、決て御すゝ不被遊候故、厚く　御評議ニ致度事ニ候、兼〻建白いさし候へきゟ、此度抔薩州ゟ琉球へ兵革渡海〻事ニも相成候ハヽ、必舟難可有之哉、兼〻鏡ニのけさる如くと申置候通りと存候、只渡海候ニてさへ、日和等見すま〻不申候てハ、乘出し兼候舟ニ候へハ、右ニて夷狄の堅牢ゟ舟と戰爭ハ勿論、火急ニ乘出し、時化ニ合候ハヽ、夫斗ニても兵士を無術ニ海中へ志つめ可申、遺憾不少候、船の義ハ、一日も早く御見開有之樣致度御事ニ候、處〻島〻奪レ候てより、船製造ニ取ゟ〻り候へハ、　此方ニて船出來候よりも、夷狄ニて城を築候方早く候へハ、ゟさ〻御手おくれと相成候、浦賀へ寄候船の義、別る不堪苦辛、相伺申度、内〻申進候也、

艦船ヲ造リ兵備ヲ嚴ニスベシ

六月十七日

尙〻夷狄於琉球ハ、何をのぞミ申候哉、何レ天主通信交易の三ヶ條と存候所、書面ニゟ去

異船ヘ物品ヲ給與スベカラズ

夷狄ヲ近付ク可ラズ

三色ニ分レ候ヘ共、其内何レニゐも一ッ御聞濟ニ相成候ヘハ、其尾ニ取つき、外二ッハ追〻出來候ハ、彼ゞ心算まて、且追〻島〻を奪ひ、國〻海岸へ寄候事、鏡ニゟけ候如くニ候ヘハ、願ハ一切御濟せ無之ゟ御宜と存候、唇やふれて齒寒と申候、何卒只今の中、御良策被爲在候やう奉存候、あとへハ出火ニても小き内ニ候ヘハ、防留相成申候處、外へゑれ不申やうニと秘置候中、大火ニ相成候ヘハ、容易ニ消候事ハ不相成物ニ候ヘハ、御先見ゞ專一と奉存候、扨又浦賀等へ寄候時〻、被下物等有之候てハ、此後とも年〻夷狄近付樣相成候ヘハ、夷狄を率て人を食ーむるニ至り、あとへ夷狄ニてハ、　御仁恵と申候とも、内地の人〻ハ、御怨ミ申樣相成可申、且夷狄ニてハ、表向ハ如何申候哉、内實ゟ　日本を呑候心ニ候ヘハ、右位の義を、　御仁恵と難有存候事ニハ無之、臆ー候故被遣候と斗可存候、左候ヘハ、夷狄ゟ格別難有ハ不存、大小名初ハ痛候て、如何樣御爲を存上候ゐも、出來不申樣終ニハ成行可申候ヘハ、兼〻申上候事ニハ候ヘ共、夷狄ハ一切御近付無之樣、御深謀御遠斗被爲在候樣至願候、彼ゟ術ニおち入候ゐ、前みの中一ヶ條ニても御濟セニ相成候ヘハ、後ニハ振放ー候事不相成樣成行、益義理立不致候てハ、不相成樣ニ成、左候時ハ、彼ハ大國、我ハ小國、とても御六ヶ敷御事ニ候得ハ、一切寄付不申ゟ　日本の御爲と奉存候、病も陽症ハ治安く、陰症ハ治難く、一時ニ防禦候方ハ致易く、段〻ニ喰込候て、長くかゝり候中ニハ、彼ゟ術ニ落申候、吳〻も開闢以來、万國ニ孤立申候　日本を、今　德川の天下ニて、永世の害ニ相成候緒口御開ニ相成候ゐハ、決て不被爲濟候故、厚く御評議ニて、苟安姑息を御用無之やう、至願ニ候、例〻通り存分、丹心吐露申進候也、

勢州殿へ参

齊昭

〔德川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月五日老中阿部正弘宛

兎角不定〻天氣、彌御淸勝御奉職候ゟ、欣抃〻至ニ存候、扨所〻洪水も有之ゟ、兼〻苦心致候通り、丙午〻厄證ニも候哉、此後風雨順候ニ致度候、尙又異船來り候由、頃日浦賀へ來候願幷御示諭ハ、如何〻御振合、又此度〻願如何ニ候哉、長崎へハ願指出ー、直ニ出帆とも承り候、過日も御内〻御賴申候所、昨年〻御答書等、赤心〻愚意餘り存分ニ吐露致候故、定ゐ此度ハ拜見不相濟儀と察候得共、右樣存分ニ申候者ハ、外ニ有之間敷、乍然惡々れハ御用ひ無之迄ニゐ相濟ゐく候、此度拜見致候ても、乍例愚意建白致候ハゝ、万〻一御爲ニも可相成事も候ゟ、何も貴兄迄内〻〻事ニ候得ハ、可相成ハ、又〻惡口致候とも、願文幷御諭書等拜見奉願度、御周旋御賴申候、扨又過日御申聞有之候一斑抄改認候、御熟覽の上、御引替御下ヶニ致度願候、不一、

七月五日

不順〻氣候、爲天下御自愛專一ニ存候、拙老如先見、此儘ニゐハ月〻歳〻異船〻憂ハ深く相成可申、果〻て南地北地抔ハ六ヶ敷、夫ゟ段〻喰入可申候、早く御手を廻され候樣、至願此御事ニ御座候也、

勢州殿　參　　齊昭

〔老中阿部正弘書翰〕○新伊勢物語所載

○七月八日德川齊昭宛

尊書奉拜讀候、如尊命不順〻候御座候處、益御機嫌克被成御座、奉恐慶候、扨諸國作方〻儀ニ付、段〻御賢慮〻趣奉敬承、御尤至極ニ奉存候、追〻出穂〻時節ニ相成候處、此節〻霖雨ニゐ御明察〻通、所〻水害有之年柄と申、若當年飢饉ニも相成候得ゝ、近年諸國疲弊〻折柄故、別ゐ人氣穩なる間敷と、不一方心勞罷在候儀ニ御座候、將又異船〻儀、被爲及御聞、掛りニゐゝ、別ゐ心配可有之と〻趣蒙仰、奉拜謝候、兼〻心配罷在候處、被仰下候通、琉球浦賀等へ渡來、殊ニ大患此事ニ御座候、右ゝ追〻仕寄を附、夫より段〻島〻等へ手を出一可申儀ハ、御賢察〻通りと奉存候、扨浦賀へ渡來〻異船より申立候願書并御答振被下物等〻儀、被成御承知度旨、其外夷狄を御遠ケ、軍艦一日も早く御製造相成候樣、萬端御心配蒙

沿岸防備不備ノ間文政八年ノ打拂令ニ改ムルコトハ困難ナリ

仰候條〻、一〻御尤〻御儀奉存候、右等〻趣、具ニ奉達　尊聽候處、日夜御苦心〻段御尤〻儀、　御滿悅被　思召候、斯迄御配慮被爲在候事故、右異船ゟ申出候願書并諭書其外共入御覽可申、且是迄同列中內評〻趣も密〻申上置候樣ニと　御沙汰ニ付、則左ニ奉申上候、尤委密〻儀ハ難認取儀も御座候間、大意奉申上候、

一異船打拂〻儀、文政八年〻觸出一ニ改、復無二念打拂候樣觸出一ニ不相成候ゐゝ、實ニ日本永世〻御爲不宜、彼是と事を設、仕寄を付、本邦〻動靜を伺候度每ニ、國力を費一、終ニハ交易ニ事寄、追〻蠶食いゐ一候ゟ、又ハ度〻渡來、內〻此方〻越度を伺、夫へ附込、爭端を開き、戰爭を企候ゟ、何ゟ兩端〻內ニ陷候儀を相待居候事ゟと、推察罷在候間、早速觸直一有之度儀ニハ候得共、一旦觸出し候儀を、事故なく打拂ニ相復一候ゐゝ、自分鬪爭をむゝへ候場ゟ有之、勿論昨年來諸方海岸へ異船來、測量抔いゐ一候儀を有之、且此度琉球浦賀等へ、軍船差向ケ品〻不穩振廻も有之儀ニ付、右を申種ニいゝ一候得ゝ、觸直一候謂、更ニ無之と申ニハ無御坐候へ共、當節海岸御備向、いまゝ全嚴重とも難申、既ニ此度浦賀〻儀も、無事ニ出帆仕候間、無故相濟申候得共、若亂妨〻儀共有之節ハ、中〻打留可申見居も無之程〻事情ニ相聞へ、右樣〻處へ此方ゟ打拂〻儀觸出一、渠ゟ及異儀候節ハ、必勝〻利甚無覺束、左候得ゝ、　日本〻耻辱、實ニ無此上儀ニ候間、先ッ浦賀

軍艦製造ハ最モ必要ナリ

表を始、諸國海岸御備向今一際嚴重ニ被　仰出、夫〻手厚ニ相整、御國内充實いさ〻候上、取斗候方と奉存候得共、右を相待觸出〻候ゐハ、中〻早急〻取斗ニハ難相成ニ付、先ツ浦賀表を始、近海〻御備向一際行屆、彼〻軍船ニ對〻、可也戰爭ニも可被及程ニ警衛も相整候上ニゐ、觸直〻候方と、此儀專評議中ニ御坐候、尤其内少〻ニゐも渠ゞ亂妨狼藉〻ゐ〻方等も有之候ゑ、御備向充實を不相待、其越度を申種ニ、卽時觸直シ可申心得ニ罷在候、何分早〻御備向一際嚴重ニ相成候ゐ、渠ゞ術中ヘ陷り不申内、觸直〻有之候樣、いさ〻度勘考罷在候、

一軍艦〻儀、以前ゞ段〻御建白〻趣拜見仕、御尤〻御儀御同意奉存候、素ゞ　日本〻荷船等ニゐも、中〻異船ヘ對〻、戰爭ハ勿論、荒浪〻節ハ漕出〻候儀さへ難相成、此後萬一浦賀沖抔ヘ異船滯留罷在候節ハ、廻船運送〻通路を絶候得も、御當地ハ忽兵粮糧ニ差支可申、左候迚、堅牢〻船無之候ゐハ、打退ヶ候儀難相成、嶋〻ヘ手を出〻候ゐも防禦相成不申、既ニ今般琉球國ヘ渡來〻佛朗西船ゞ交易等〻儀申出候得共、右交易〻儀、　日本ゞ決て　御免も難被遊事ニ御坐候、且琉球國〻儀も、大隅守一手〻進退ニ御委任〻事故、此度〻儀も存寄一抔ニ取斗、尤　御國躰を不失、寛猛〻所置勘辨〻上、何彼ニも後患無之樣、熟慮および取締向等、機變ニ應〻、取斗可申旨、大隅守ヘ　御直ニ被　仰含候儀ニ

異船ヘノ物品給與ハ船中必要品ニ限ル

欄外記事

御坐候、乍併琉球國〻儀ハ、南海〻一小島ニゐ、場所ニ寄、大炮被打掛候得も、表裏被打貫候程〻事ニゐ、國人も誠ニ柔弱、武器ハ勿論、兵糧等も甚手薄ニ相聞、加之軍艦等も無之事故、當節〻姿ニゐハ、防戰等必勝〻利ハ無覺束事情ニ後御座候間、　御國躰を不失、事穩ニ取斗候含〻趣ニ相聞え申候、右模樣故、第一軍船製造無之候ゐハ、實ニ永久守衛、存分ニ戰爭も相成間敷と奉存候、依之海岸〻内、浦賀・長崎・松前・薩州等へも堅牢〻船製造御免ニ相成　公義御船為製造被仰付、夫ゞ樣子ニ寄、外〻へも製造被　仰出可然と致評議、當時取調中ニ御座候、

一浦賀表へ渡來〻異國人へ被下物〻儀、御議論〻趣、御尤〻儀と奉存候、此度渡來〻船も、素ゞ漂とも違ひ、渠ゞ事を設、渡來ゐ〻ゐ〻候儀故、被下物等可有之筋合ニも、毛頭無御座候處、食料薪水等願出候ニ付、可被下哉〻趣、奉行ゞ伺申越候ニ付、強ゐ奉願候上ハ、薪水ハ差遣可申、食料〻處ハ容易ニ與へ候儀ニハ有之間敷、乍併自然及餓死候程ニゐ、達ゐ願出候も、奉行心得ニゐ、聊食料相與へ可申旨及差圖候處、異船ゞ歸路食料ニ差支及飢餓候故を以、強ゐ願出候ニ付、不得止事奉行手限ニゐ相渡候趣ニ御座候、尤船中貯高をも不見留差遣候段ハ、手拔〻儀と奉存候、且品數并員數等も相增差遣候趣ニ付、奉行歸府〻上、委密承り候へも、守衛向も前段〻次第ニゐ、其場事情無謂取斗ニも相聞不申

候、依之被下物品書付幷願書和解諭書請書和解寫差上申候、御覽上、御返却可被下候、此段御請旁奉申上候、以上、

七月八日　阿部伊勢守へ

御請

○欄外記事
本文不得已トハ聞え不申、此方ゟ手引候やうニ被察候、

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月十三日老中阿部正弘宛

朶雲披閲、不定〻氣候ニ候得共、先以　大樹公益御平安被遊御座、御同意恐悦至極、千〻萬〻奉壽候、隨る貴方ニも精勤被在之、令抃賀候、扨去申進候廉〻、御繁劇中縷〻御答ニ預り、異船〻願書幷御諭振等〻義も達　高聽候處、年來　御爲苦辛致候義、尤ニ被爲　思召、右願書幷御諭書等拜見被　仰付、加之ニ御一席〻御内評迄も密〻相伺候樣蒙　仰、退隱愚昧〻身分、面目を施〻候儀、難有不堪感涙奉存候、御禮〻儀、御序〻節厚執達賴入存候、謹言、

七月十三日　水戸前中納言　齊昭（花押）

阿部伊勢守殿　御報

幕府要路ト討議センコトヲ求ム

九日壬辰　前水戸藩主徳川齊昭、幕府要路ト外國處置ヲ討議センコトヲ求ム。老中阿部正弘、之ヲ謝シ、文書ニ披陳スベキヲ答フ。

〔徳川齊昭書翰〕○公爵徳川頼順所藏本　新伊勢物語所載

○七月九日老中阿部正弘宛

御繁多中昨日〻〻御懇切〻瑤報忝存候、御書中　尊慮云〻も有之候得ハ、右御禮且異船〻事ニハ、愚昧なの〻御爲〻儀相考、昨夜も一寢不致、今朝認取可申と存候所、赤心〻多端、迚も筆紙ニ難盡御坐候付、可相成ハ御面晤も致度候所、就夫源文代ニ〻越中・伊豆等四閣老退出より度〻被越候事も有之候得共、當時ハ下官退隱〻身、御越ハ御六ヶ敷事ニ可有之候へ共、若哉御相談〻上、　尊慮御伺ニる、不苦義ニも候ハヽ難有仕合奉存候、左候時ハ、貴兄御勘定奉行よても御同道ニ致度候、實ハ何レニて成共、三奉行評議〻席、御同職御出座、下官も相加り、相互無伏藏衆論詳悉ニ　天下萬世之御爲、御模通り宜敷遺策なき樣仕度、併此會議〻〻御六ヶ敷事ニ可有之候、依るハ前〻〻通ニも可相成哉、尤異船防禦〻儀も、兼る三奉行初良策心算も可有之候得共、又愚者〻一得、外目八目とやらん、万ニ一ッ御爲ニ相成候心付も有之間敷物ニも無之、無已候得ハ、何と〻〻認取可申候へ共、不文不行屆候、御爲と斗胸懷不絶存入、寢食をも忘れ候故、不レ顧ニ貴慮、此段急き御問合申候也、

七月九日

勢州殿　參　　齊昭

〔老中阿部正弘書翰〕（○新伊勢物語所載）

○七月十二日徳川齊昭宛

御書拜見仕候、兩三日ゝ季候も相復ー、追〻川〻減水ニも相成、大喜此事ニ御座候、先以益御勇健奉拜賀候、然ゝ此程御請〻書中ニ申上候尊慮云〻〻御禮被仰越、卽奉入　御聽候、將又異船〻事、終夜御賢考〻御多端、御筆紙ニ難被爲盡、就夫源文殿御代ニゝ越中・伊豆等度〻參上〻義も御座候得共、當時御退隱〻御事ニ候へハ、六ヶ敷事ニハ被　思召候得共、伺〻上不苦候ゝ、御勘定奉行同參、天下萬世〻御爲、衆論被爲盡度段、縷〻御帋上〻趣、御尤〻至ニハ存候へ共、右御推考〻通、當時〻御場合ニるゝ參上〻儀、如何可有之哉と評議仕、猶　尊慮〻程奉伺候處、先ッ差控候方ゟ被思召候、乍去異船〻義ニ付るハ、多年格別ニ御心勞被爲在、是迄も粗思召〻處相伺居候義ニゟ御坐候得共、此度〻一擧、實ニ大切〻義ニ付、御勘考〻條〻をも相伺、評決可仕旨被仰出候、左樣御承知乍御多勞、御書中ニる委細蒙　仰度、奉希上候、實ニ萬世〻御爲、乍不及無他苦心罷在候義御座候、此段御請申上度、如此御座候、艸〻、以上、

書中意見ヲ承リタシ

七月十二日

十三日丙申　前水戸藩主徳川齊昭、書ヲ老中阿部正弘ニ致シ、外國船掃攘・軍艦製造及琉球・松前ノ防備等ニ關スル意見數條ヲ陳ブ。　　阿部伊勢守

〔徳川齊昭書翰〕（○公爵徳川圀順所藏本　新伊勢物語所載）

○七月十三日阿部正弘宛

忝令被閲候、如貴諭追〻川〻減水御同意大喜存候、一兩日ハ殘暑强候處、無御障も雀躍致候、扨ゝ尊慮云〻、御禮被　仰上候よー、御申聞ハ有之候へ共、尙又此度御禮ゝ相認、御手元迄指出ー申候、隱宅へ御越御六ヶ敷よー、依て認申候、尤草稿ニて、反古同樣ニ候へ共、是迄も追〻御ゝ通致候事故、其まゝ進申候、何も此さん、早〻不一、

七月十三日

勢州殿　參　　齊昭

〔徳川齊昭書翰〕（○新伊勢物語所載）

○七月十三日老中阿部正弘宛

一別紙令披讀候、愚論時〻申進候處、御繁務中每度縷〻御返書令氣〻毒候、扨田畑景氣〻愚考申進候所、尤ニ被存候よー、汗面〻至候、當年飢饉ニも相成候得ハ、諸國連年疲弊〻

米麥不作ニ對スル處置ヲ豫メ講ズベシ

折柄故、人氣も別る穩ふる間敷、不一方御心勞〻由、御尤至極ニ候、乍去領主地頭ハ收納次第ニハ候得共、飢饉ふ及候て、百姓騷立候程の事ハ、先ッ有之間敷候、春中より初夏北風多く候得き故、大方諸國共麥ハ相應得申候ま、（但麥作不宜國ハ米必す當り候ま）且何レニても丙午厄年と申ハ、兼る存居候故、麥も多く仕付候事と存候、夫なれハ夫食も足り可申、尙又米の出來不宜候へハ、麥の直高く相成候故、ろさ〳〵百姓の騷動ハ有之間敷ふ、只今如此降つゝき候へハ、當冬ゟ來春へゟけて、必雨雪ふく、繁花の地ハ、風火〻災氣遣ハ敷、國〻土地惡敷所ハ、麥の根を吹拂ひ、本薄ニ相成、麥作の出來も不宜上、來夏ニ至り、又〻ケ樣降つゝき候て、麥も米も不足ニ可相成、來暮〻處自今心配致〻候、當年〻處ハ武家の方ゟて指支候とも、百姓の方ハ前ゟ〻通り、其上無如才風雨出水等を申立、何レ〻場も引立候ま故、ろさ〳〵内證ハ左まて痛ミ申間敷、乍然小民ゟて常〻麥をとゝのへ食候程の者ハ、指支可申候へ共、騷動ニ至候程の事ハ有之間敷候、愚昧の百姓共、今より先の事を考へ不申、今ハかて飯等ニもいさ〻不申、有れハ有るふ任せて欲ニ目くれて賣出〻、又ハ飽食すれハ來夏ニ至り麥作不熟候ハゝ、其時ニ至り狼狽致へく候、（來年不作〻ても、騷動不致樣〻愚策ハ、國〻御領所ニて今の内可然程ッゝ、麥籾等御買上ケ（時の相場ヨリ少〻高直ニ御買上ケ）被遊、直ニ其場へ御預ケ置、若來年不熟ニて騷動可致樣子ニ候ハゝ、其地時の相場より二三段も下直ニ御拂被下候得ハ、御救ニも相成、御益ニも相成、第一ニ御仁德を人〻難有奉存候樣可相成候、當暮麥蒔候以前ニ麥御拂、來春籾蒔候以前籾御拂と申つり合ゟよろしく種やすき時ハ仕付候事も自ら多かるべし、只今飽食いさ〻候節ハ、御買上ケゟ人〻何とも心付申間敷候、今少〻機會をのゞ〻候ゟ、高直ニなり、御買上ケニ相成候てハ、御不仁と申樣ニゟハ不宜、是等ハ扱候者大切ニ御座候、豫備不虞と申事も有之候間、心附候故一寸認申候、兎角來暮ゞ心配ニ候へハ、當冬麥作ハ多く蒔付申度事ニ御座候、定ゟ御如才ハ無之事と存候、

異國船持參ノ願書ヲ返還シ、且ツ六月長崎ニテ提出シタル願書ノ一覽ヲ請フ

一異船願書并御諭書願候處、御周旋ニる達　高聽、段〻厚　尊慮ニる拜見、尙又御同列御内評迄伺候樣被　仰出候よ〻御申越、實以難有仕合、右御禮〻儀ハ別紙ニ認候故、宜敷御賴申候、愚評致候ハ恐入候へ共、此度の於御諭書ハ、一所も愚昧喙を入候義無之、且辭達而已とも可申、奉感伏候、拜覽相濟候故、則返上仕候、御落手可給候、（但シ、六月初旬、長崎ヘ指出候願書ハ、拜見難相成事ニ候哉、可相成ハ拜見仕度奉願候、）

一異船〻義ニ付、十ヶ年來　御爲と存、恐入をも不顧、苦心〻義共存分ニ度〻申上、又ハ建白も致候所、此度ハ尤と御聞受ニ相成候段、實〻以　天下〻御爲、不堪感佩奉存候、扨ケ樣申候ゟと、自負の樣ニハ候得共、世人今ニ至り憂苦致候者も可有之處、下官事ハ、前ゟ〻通り、年來懸念致〻、夜半目覺候ゟも、大銃大船等〻事考、不待旦〻て圖取、或ハ書付、起臥心ゟ離レ不申、實ニ　天下の大患と苦心不啻事ニ御座候、

一打拂云〻〻儀、元來御止メニ相成ゟ不宜候故、其節も度〻建白致候處、最早異船へも被仰渡候儀、今次第も無之御打拂ニ相成候ゟハ、名目の有之戰爭ニ相成可申と存候故、先日も申進候得きゟ、如何と又々心配致居候處、此度〻御書面〻趣ニて大ニ安心致候、一體寅年（天保十三年）〻聖人臭き御達ハ、以の外ニ候得共、今ニ相成候ゟハ無已候處、右御達ニても、

再ビ甲比丹ヘ打拂ノ趣旨ヲ通達スベシ

「逢難風漂流等ニて、食物薪水を乞候迄ニ渡來候を、其事情不相分ニ、一圖ニ打拂候ハゝ、万國へ被對候御處置とも不被思召候、」云々との御達ニ候處、追々渡來ハ、漂流よハ無之候へハ、御打拂ニ相成候とても、寅年の御達ニ觸候御次第ハ無之候へ共、不宜事ニハ候へ共、浦賀故次第も無之候へとも、下官初大名の領分ニ來り候へハ、漂流ニ無之事故、御達通りニ候へハ、打拂候ゝ、召捕候ゝ、事兩端ニ相成、扱候者、甚指支可申候、夫も一昨年長崎へ來り候節、不打拂又浦賀ニゐも不打拂上ハ、此後迚も直ニ御打拂ニ相成義、於此地ハ御觸ニ無相違候へ共、於彼夷ハ名を求度、元來喧嘩を仕懸ケ來り候船故、如何樣ニゝ無理ニ名を拵へ候て、戰爭致ゐく候へハ、今一度「カピタン」へ、寅年よ云々御達ニ相成候處、漂流ニも無之、求て渡來候船、追々有之處、畢竟「カピタン」よりの通達不行屆儀ゝ、又ハ　御仁政ニゐまへ、如此來候義と相見え候處、不屆の義ニ付、以來ハ如以前打拂ニ改候へハ、此後海瀕迄寄來候へハ、無二念漢蘭の船并日本漂流人送來候とも、長崎の外ハ一圓ニ打拂候條、諸國へ達候樣扨と申意味ニて、御達有之上ニ無之ゐて、今ニゐハ打拂も相成兼候姿ニ、可有之候へハ、御評議も御尤ニ存候、無理ふる義ニゐハ、一旦ハ押勝候樣ニても、長き内よハ御損ニ相成申候、異人ニて名を付候のミならば、此地の人ニゐも、やたり此方ゞ御無理と存候てハ、御損ニ相成申候、貴書ニも有之候通り、此地の備向も、何分ニも嚴重ニ致ー、夷人ニてハ名目付候事不相成樣、御仕向ニ致度候、付札、又此後大名へ被仰出候ニハ、如以前無二念打拂候ハ勿論、漢蘭の船さり共見ゝけ次第打拂、又ハ以計策召捕候共、勝手次第、於此地堅牢の船御免ニ相成候上ハ、燒捨候ニ不及、依其功并船中の品共被下置候故、夷狄ハ一足も不殘樣、召捕次第打殺切殺候やう、嚴重御達ニ相成候樣致度候、内地の戰爭ゝ、勝利有之候へハ、少ーハ勵みの爲ニも可相成候、船も上への異樣の飾等さへ取ゝへ候へハ、骨ハ用ニ立申候、燒捨ハ無術之、付札の付札、又曰漢蘭兩國の夷狄さへ此地ニ居り不申候へハ、下官の策を御用被遊候へハ、浦賀等へ寄候夷人ハ、一足不殘召捕死刑ニ致ー、船をも取上候へハ、如何樣の策ニて有之候哉、夷狄の方へハ、一切不相分、打拂止候まても策と心得、此後容易ニ舟ハ寄申間敷候所、兩國の夷狄共長崎ニ入込居候故、蘭學等致ー、夷狄ひいきなる者ゞ通ー候も難斗、又ハ自慢ニ申聞候人有之も難斗、万一其義夷狄へ通ー候節ハ、却て害ニ相成候故、無一足召捕候ハ、易く候へ共、此策ハ致兼候まま故不認、

一備向云々ー義、御尤至極ニ御座候、本文御尤ニハ候へ共、寛政の頃も四閣老等、評議を見候へハ、やはり同樣ニ候へ共、寛政より只今迄ニハ如何樣ニも出來可申處、同樣ニ御座候へとも、此度とても、一通りの儀ニてハ、まへり不申候、俗ニ猪を見て矢をハぐと申者ニ候、くれ〳〵此度軍艦を初國々濱々手厚ニ備出來、永續致候やう至願ニ候、くれ〳〵空論ニ不相成樣ニと奉存候、諸大名も窮迫多く、窮迫の者ニゐハ、手厚く備度存候ゐも、心底不任も可有之、又勝手よ泛ーき者まても、存の外右樣の事、かまゐ不申者も有之間敷者ニも無之、乍然、夫々祿を給り居候上ハ、夫々備無之候てハ、上へ對ー候て、不相濟候事ニ御座候故、別紙密啓ゝ趣ニてハ、如何可有之哉、御尤と被存候ハゝ、御相談ゝ上、達　高聽、機會を不失、直ニ御扱ニゐハ如何、

一軍艦ゝ儀云々、此度御評議よも相成候よー、實ニ難有御事ニ候、先日中ゟ憂候ハ、異船へ番船付置れ候處、万一大風大時化等も有之候ハゝ、番船中の者ハ、不殘海中へ打入レ候ゟ、又も却て異國船ゟ助船ニ相成、恩を受候もの多く可有之と、此間中ハ、夜中も兩三度

艦船建造許可ノ評議決定

ッ、戸を明ケ、空をなゞめ候へきゞ、先ッ〳〵異船も出帆のよーまて大息つき申候、實ニ危き事ニ有之候、一度前々〳〵如き次第ニる、人數多く死亡候へハ、此後ハ如何様被命候ゐも、出候者ハ無之、又無理ニ出ー候様ニてハ、　上をうゑ〻候様相成勢と存候、一日も早く堅牢の大小船を御製造ニ相成候へハ、危き船を千艘出ー候處へ百艘出ー候ても、其方異船も恐れ次第有之候節ニも可然候、ゐとへ打拂不申ニもいさセ、堅牢の軍艦ニて、番ハ致度事ニ御座候、

一堅牢〳〵船製造〳〵義、浦賀・長崎・薩州・松前製造御免ニ相成、　公義御船も製造被　仰付、夫ゟ容子ニより、外〻へも製造被　仰出可然との御評議の由、實ニ下官兼〻建白致候所、御評議ニ相成候得ハ素望を慰ー申候事ニ御座候、又例の通り存分申候得ゟ、御評議ハ有之候とも姑息ニて、先年御出來の如く蠻船ニもふく、日本船ニもふく、木厚ニ出來候位の事ニ相成候てハ、走りも悪ーく、風波の難ゟやむり有之、御模通りニハ相成間敷、是ハ先年御出來ニて、御模通りニ不相成ゟ、眼前の明證ニ御座候、人ニとつて善を爲候事、第一ニて、孔子も不如老農不如老甫と申候如く、鳥を取ハ鷹、魚を取ハ鵜、舟を製造するハ夷狄ニて、年中夫のミ事と致ー候へハ、船の事ハ夷狄ニて致候ニ御ゐらひ被遊御製造ニて、其上ハ　思召付て便利の御下知も可有之、又諸有司并御船手等乘試候上、便利の考も付候ま、兎角數年日夜朝暮、其義を考候者ニハ、勝候事ハ不相成候故、最初ハ先ッ異船を手本ニて御作り御尤と存候、扨長崎ハ、　上の御入用まて、長崎御蓄金〳〵内ニる、御製造ニも相成候事ゟ、又ハ長崎〳〵者へ被　仰付候ゐ、公役ニ致候事ゟ、其段ハ御書面ニ無之候得ハ、不相分候得共、公役ニて製候義ニるハ、手入〳〵度〻麁末ニ相成、大船故入用夥ーく相成候様申立、終ニハ相止ミ可申候、　上の御入用ニる、手入〳〵時ニ乘出ーて、防禦致候者立合まて、御手入等有之度、夫ニてさへ異船〳〵來り候事、遠く相成候ハヽ、人物次第ニハ候へ共、其入用不思寄方へ引ケ可申、況乘出し候者ニも無之人、立合候てハ製造手入とも行屆申間敷候、其上一艘二艘の事ニ無之候へハ、とても六ケ敷候故、初發の御定、御大切ニ御座候、浦賀の御船を初、　上の御船ハ皆　上ニる御製造并御手入も有之事ニ候處、先ッ西洋の軍艦大小も有之候へ共、二十餘間の船ニて、入費一万兩、百日斗ニて出來候ゟ覺申候處、此方ニるハ船大工も習れ不申義、又ゟ何事ニ不寄、　公邊之義ハ御入用も莫大（か、りカ）ー候へハ、追〻ゟ不知、初て御製造ハ船の大小ニも寄可申候へ共、一艘一万五千ゟ二万もかゝり可申、船具ニも又同斷ゟゝり可申、工人の多少ニハより候へ共、半年ゟ一年ニて漸〻御出來可相成候へゟ、中〻急ニハ數艘御製造相成間敷候、右、御船出來候とても、十艘廿艘ニて足り候被仰出、何レも製候ハゝ、何時ニても御用ニ足り可申候、又一ッニハ、海岸大名ニて何程製候ても、海岸大名の數何程も無之候へハ、一人百艘ッゝと見候ても、何程も無之、西洋ニてゐ軍艦と又只の船とハ、別ニハ候へ共、其製方組立ハ一ッニ候へハ、只の船ニても軍艦〻用ニ相成申候へハ、寧波邊の舟斗集來候ても、此地海岸大名船よりゟ多可有之候へハ、御軍艦出來、如以前打拂ニ相成候段ハ、恐悦ニ候處、海岸の大名へ船御濟ゐ無之時ハ、異船來り候とても舟ハ出ー兼、左候とて大名領分〳〵迄、　公邊の御舟を御廻ーニて、御打拂ニ相成候義ハ、とても御行屆ニハ不相成、浦賀の義ハ、御膝元ニて大切るハ勿論ニ候へハ、堅固ニ御船數も多御出來ハ、御尤ニ候へ共、何レの地を奪れ候ても、御苦難ま相成候ハ同樣ニて、　日本を大見する時、何レニても左までの相違ハ無之候へハ、海岸の大名ハ勿論、ゐとひ海岸無之大名とても、非常の節、被　仰付間敷者ニも無之候へハ人〻心掛候ハ、勝手次第ニて可

二十餘間ノ船ニテ建造費一萬兩

西洋製の船舶ハ使用年限百五十年ナリ

然事ニ候、三ツニ也、薩・松へ御濟セハ、御尤至極ニて、船ふくてハ不相成場ニ候へ共、又内證交易等致ー候憂ハ、外大名大名と違ひ、是まてさへおきニーも、ならぬ處故、法を犯ー候ハ有勝と存候、然ニ此兩家へのミ御濟せニて外大名へ御濟せ無之候へハ、法を犯ー候節ハ、必ス船不宜と申事ニ相成可申候、外大名へも、一體ニ相濟居候へハ、法を犯ー候ハ、薩・松の不行屆ニて、船有之事の惡ーきまハ成不申候、薩・松のミニてハ後年ニ相成、不行屆せこ、何とゝ申事ニ相成、相止候事ニ成可申候、一體ニ候へハ不行屆者有之候へハ、其者斗ニて、御備の舟ハ、日本中ニ永續致ー居り可申候、只今製造初り不申内ゟ止候事、苦勞存候、尤西洋ゟ製作ニ候へハ、百五十年位ハ用ニ相立申候物ゟよーニ候へ共、右御船御入手等の義、初ゟ御見通ーー付不申候ゟハ、異船の來候も、遠ゝーく相成候節ハ、無益ふりとて止候樣相成事、是亦鏡ニかけ候如くニ候へハ、御船も數艘御製ゝ上ハ、第一ニ永年御手入行屆候御目當を立候と、又御役ゝへまゝと御掟を被定、御不益抔申出候者有之候共、一切取用ニ不相成樣御定ニて、大目附御目附等へも被　仰付置候程ニ無之候てハ、一度ハ御出來ニ相成候ても、又異船の沙汰薄く相成候時ハ、御役ゝ心弛ミ可申候、海國ニてハ軍艦ハ第一の御備ニて候へハ、ゟとへ異人來る事無之とも、以後止不申やう、初ゟくれ〳〵も御規定御立ニ致度候、左ふき時ハ此後御出來ハ御費用と申物ニ成行申候、惡口まハ候へ共、犬追物御初の節恐悦ニ存候所、　御慰ニ候ハヽ格別、天下永世の御爲ニ被遊候御事ゟらハ、御永續無之候ゟハ事體荒得不申樣存候、十ケ年もつゞき候ハヽ、其節奉感伏ゟきよーー申候へきゞ、果ーて其後何御沙汰も不伺、御入用莫大ニて、戰爭の足りニも相成間敷、落馬ーてけゞ候者ハ、一生の疵ニ相成候迄也、是ゞ戰爭の爲と申事ニ候ハヽ、武士の事故何人落馬致候とも、御入用有之とも、永續いさーー不申候へハ、何の御用ニも立不申事ニ候、此度御製造有之船の義とても同斷、堅牢の軍艦御免ゝ上ハ、帆柱一本形也如此抔申、姑息ふく出來候ゟらハ、　上の御船ニても、大名の船ニても、免角ーて人ゝ工夫をゟらー、西洋ニ優り候樣製作致ー候やう、「異船防禦の爲堅牢の軍艦御免ニ相成候故、人ゝ工夫を運シ、異國船防禦不怠やう」抔申、公ケの御達ニ致度候、寛政四年松平越中守より同列への書面ゟと覺申候、「大船御製造ゝ義ハ勿論ふれ共、日本船ゟ大洋海ハ乘候事不相成、殊ニ北國冬中渡海不相成など、不自由ゝ事ゟ付、寛政ゝ頃一艘被　仰付候義も有之、近くハ安永ゝ頃ゟも被仰付、右船也破損仕候云ゝ、唐蠻製被　仰付候ハヽ、御要害の爲ニも可然哉と評議仕候」云ゝ、下官覺候ても、右御評議故ニも候哉、　公邊ニる北地御持ゝ時、前ゟ評議ニて出來候と申、御船の雛形、長サ九尺斗　船道具迄も揃、小石川屋敷ニ有之、下官抔度ゝ泉水へ浮へ見候へき、源哀（徐修）代ニ烏有と成申候處、船の義ハ毎度心ニろけ居候故、大閤ハ覺へ居り申候處、御入費ハ餘程かゝり候よーニも承り候處、右形ゟて見候へハ、やたり　日本荷船の風ニる、大砲仕ろけ候迄ゝ樣覺申候、此度御出來ゟても、右樣ゝ拙製ニ候てハ、五十歩百歩の相違、松平越前守ニて先年出來候も、右ニハまーー候ま、人傳ニ承り居申候、依ゟハ御入費かゝり候共、夫ゟけの御用ニ立候大小此軍艦御製造ニ致度、前ニも申候通

琉球王ヲ封ジテ諸侯トナスベシ

り、堅牢ニ候得ハ、船ハ重く、帆一ッ二ッニてハ、當時の船よりも走り遅き道理まて、却てけゞ出來可申候、御製造又御免よも相成候からハ、御法度〻荷船の外云〻ハ、常船〻儀まて、海軍艦よハ無之候へハ、海軍艦〻儀ハ、如何樣作り候ても、帆何本ゝけ候ても、兎角便利を考候る、勝手ニ出來候やう、公の御達ニ致度事ニ候、但シ、夷狄の如、舟異樣の虚飾ハ不致樣、御達ニても可然歟、舟の形ハ、異樣ニ出來候へハ、必ス不便利ニ候へハ、如何樣製候とも其まゝニ致置候へハ、十ケ年斗の内ニハ、皆一ッ便利の形ニ相成可申候、今刀劍の形ハ、天下一統同樣ニ候へ共、追〻色〻の形ニ致ー見候處、只今の形便利故、天下一統一ッ形ニ相成申候て、是ゞ　日本の刀劍と相成申候、舟とても如右勝手ニ任ニ候へハ、皆便利ゐる形の一ッニ落入候へハ、夫を　日本の舟と定め候ゝよろ〻〻く候、實の處を申候へハ、舟持共迄も公然と御免ニ相成不申候てハ、非常の節ハ引張り足り不申、夫を況大名迄も御濟ニ有之間敷樣ニてハ、乍恐　公邊の御力斗ニて、非常の節引張足り候程御出來ハ、何共安心不致候、其上海舟の義ハ、敷も深く候へハ、内川へ入候事も不相成候へハ、荷舟の外、大舟不相成云〻と申ハ、内川軍船の事ニ候へハ、海軍艦ハ前ゟの通り、大舟程内川へハ入不申事故、御懸念ニ不及樣存候、　公邊ニて海軍艦無之候て、防禦被遊兼候程ニてハ、大名ハ大筒人數共少く候へハ、尚更の事ニ御座候、

一薩州ハ琉球を界と〻て、同所ニ交易無之候得ハ、中山立切不申云〻抔可申と被察候へ共、其交易ニ付云〻、不可言義可有之、毎度故加州御同列の頃、下官と咄合歎息致候へき、扨中山ハ南北五七・東西五或ハ六斗ニゐる、まゝも瓢の中央ニ城を構へ候姿ニ候得ハ、御申聞〻通り、丸ン城へもとゝき可申程の地勢、國とハ申候へ共、全く一ッの洲也、諸侯を封するの地ニハ不足、夷狄の出城とするゟハ足り申候地ニ可有之、近來清國も、「イギリス」ニ餘程奪れ申候へハ、行〻ハ不殘奪れ候ニ疑無之候ニ付てハ、大論ニハ候へ共、下官の四閣老の中ゟ、又ハ大隅・薩摩の主ニ候ハゝ、或ハ命を出し候ゝ、又ハ願候ゝニて、中山を初、大隅・薩摩の中ニて可然程土地を遣ー、琉球へハ大隅・薩摩ゟ勤番を多く渡し置候へハ、非常の事有之候ても、老人妻子等も無之候へハ、働も存分ニ相成、且ハ何レも死地ニ陷り候ての戰爭故、防禦ニハ必利可有之、又御當代ニ相成、琉球王を大名ニ被遊候ハゝ、後世への聞もよろ〻〻く、且年〻是迄被遣候金銀被遣候ニも不及候へハ、御益ニも相成可申候、又ゑとゐ被下候ニも致セ、　日本中へ散候事故、被下候ニハ申物の、又廻りて　上の御品と相成物也、然ニ今大隅ニて入ヨリ候て、穩ニ見え候て、自分の利益も不失、又上前もよとても、是迄の姿ニ清國へ屬居候樣ニても、清國人「イギリス」ニ相成候上ハ、やゝり琉球迄も天主教ニ相成、其上ハ大隅・薩摩の人も、やゝり内〻ハ天主ニ相成可申と見拔申候故、下官四閣老の中ニ候へハ、上の方ゟ大隅へ命を下ー、大隅ニ候へハ願候て、琉球人を日本人ニ、只今の中致ー申候、清國も「イギリス」ニ恐縮致候上ハ、中〻琉球へ援兵出ー候事不相成候へハ、此方へ引取レ申候とて、又いゝり候力も有之間敷、「イギリス」「フランス」等ゟ清國の命の、何のと申て、撫込ニ來り候斗ニ候へハ、夫さへ防禦候ハゝ、中〻防禦候ハゝ、然れハ爲防禦、薩州へ堅牢ヒ舟御濟セハ御却て清國方ハ、手を出ー申間敷歟と、大決斷致ー可申候、

尤ニ候、北地の義　上の御持ニ候へハ、御尤ニ候へ共、松前〻義ハ其元祖武田九郎といふ商人故歟、今以町人風ニゐる内〻交易有之、是ハ薩州方も危く候、處へ、船御濟セハ如何と存候、乍然内證交易無之御見通ーよてハ、實ニ防禦致候やうの御仕方ニハ、船おくてハ、迚も不屆候へとも、御濟セと存候、扨又兩家へ爲防禦、大小堅牢の軍艦御濟セニ相成候ハゝ、其地海岸有之大名有志之者方ハ、必ス願出候ハ指見え可申、又願出候上ニて御濟セよてハ濟候ても、一同ニ御免ニ相成候程、快く存申間敷、拙家ニてハ、源義の代、快風丸と申、額心越認申候二十八間餘の舟有之、鐵炮鎗抔も飾申候手舟、年〻領分納米を積、品川へ入、又松前へも度〻遣ー候處、後年源肅代手入不行屆、止ニ相成申候所、右舟〻例も有之候故、水野越前守御同列の節、度〻願候へ共不相濟、然ル處、御屆不申方抔ニて、内〻拵候ハ其まゝニ相成候やうニてハ、正直ニ申願候せん無之、殘念ニ〻〻存候、此度ハ何卒相濟候樣仕度候、左候得ハ、何レ〻海岸とても同樣の事ニ候得ハ、三家初一統爲防禦、御免被　仰付候方可然、御濟セニ相成候とても、本方防禦ニ心無之者ハ、製造も致ー申間敷候へハ、　日本中ニへハ、何程も出來申間敷候、　日本の地ハ何レとても同樣ニ候處、誰〻ゝ限り、外ハ不相成と申事ニゐハ、人氣ニ拘り候のミふらず、防禦抔も麁ニ

致候やう相成可申、万一の節防禦相成兼候とて、右を申譯ニ致候へハ、御咎も相成間敷、又異船寄せ候所へ斗、追〻御濟せニ相成樣ゟてハ跡廻りニて御手延と可申候へハ、一體ニ御免被遊候樣仕度事ニ御座候、堅牢の大小船ふく〳〵て防禦不相成と、十ヶ年來上書建白も致候義ハ、外大名ニも有之哉ハ不存候へ共、下官申上候ハ、　上ニても御承知被遊、四閣老ニても被存候事ニて候へハ、是非〳〵下官へハ爲御濟ニ致度、三家の義ハ一同の事ニ候へハ、三家一同へ御免ゟ相成候やう奉願候、尙又下官國許湊ゟ浦賀迄ハ、海上ゟ〻つゝ〻義ニ候へハ、房總間ハ難船も有之場、萬一の節大洋後詰手當ニも相成、浦賀の御備ニ相成候事ニ候へハ、是非〳〵堅牢の大小軍艦無之候てハ不相成候故、何分御周旋御賴申候也、

高野長英召捕ノ有無ヲ問フ

二白蘭學者高野長英と申者、下官抔とゟ兼て論合不申候へ共、　日本の御爲をハ存候者のよ〳〵、尤一度も見候事も無之男ニ候、然所、久〳〵く入牢ニ相成居候て、一昨年ゟ牢拔致候よ〳〵、元ハ　日本の御爲と建白等も致候ゟふ承り候へ共、久〻入牢ニ相成候上ハ、難有ハ存申間敷、其後召捕ニ相成候事も不承、何ゟ日夜奥齒ニ物のかゝり候やう氣ニ相成申候、若薩州・琉球等ゟ異舶の方へ移りハ不致哉と存候、彼ゟ此方を敵と見候上ハ、品〻扱惡き事ニ可有之、其後御召捕ゟ有無不承候故、乍序御聞申候也、

七月十三日

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月十三日老中阿部正弘宛

又曰、御書面〻中、當節海岸御備向、いまゝ全嚴重とも難申、既ニ此度浦賀〻義も無事ふ出帆仕候間、無故相濟申候得共、若亂妨〻義共有之節ハ、中〻打留可申見居も無〻程〻事情ニ相聞え、右樣〻處へ此方ゟ打拂〻義觸出〳〵、渠ゟ及異議候節ハ必勝〻利、甚無覺束、左候得ゟ、　日本〻恥辱實ふ無此上儀ニ候間、先ッ浦賀表を初諸國海岸御備向、今一際嚴重ニ被　仰出、夫〻手厚ニ相整、御國內充實致候上取斗候方と奉存候得共、右を相觸出〳〵候ゟハ、中〻早急〻取斗ニハ難相成ニ付、先ッ浦賀表を始、近海〻御備向一際行屆、彼軍艦ニ對〳〵、可也戰爭ニも可被及程ニ、警衞も相整候上ニゟ觸直〳〵候方と、此儀專評議中ニ御座候、尤其內少〻ニゟも、渠ゟ亂妨狼藉〻いさ〳〵方等も有之候ゝ、御備向充實を不相待、其越度を申種ニ、卽時觸直〳〵可申心得ニ罷在候、何分早〻御備向一際嚴重ニ相成候ゟ、渠の術中ニ陷り不申內、觸直〳〵有之候樣いゟ〳〵度、勘考罷在候、

沿岸防備ヲ一層嚴ニスベシ

本ゟ御ゟ面〻通りニ候へハ、實ニ以有ゝさき次第、年來至願致居候處ニ御座候故、何卒右やう相成候やう仕度奉存候、乍然御備向充滿云〻等ハ、寛政の時も追〻右評議ニ候へ

大船建造ヲ諸藩ニ許可スベシ

共、今以同様不手當ニ候ヘハ、此度とても御評議の様ニハまへり申間敷候、下官も感伏仕候程ニ、御屆きニ致度候、いつも〳〵小田原評議ニゐ、年月を過、猪を見て矢をたげ候ハ、　公邊初天下一統大平の弊よ御座候、ゐまゝ　御爲を存、眞闇ニ相成候て、手當致候者ハ、下官の如く成行申候、古今其例不少、畢竟　御爲を厚く存過候と、先見との二ッご却て害と相成候事ニて、只今ニ相成、驚きて手當致候ハヽ、御賞美ニも相成事と察申候、海岸大名へ不殘堅牢ゟ軍艦御免ニ相成候て、人〻手當致候とても海岸の大名數の知れ候義、況　公邊のミまて御出來ニ相成御船斗ニてハ、何百艘御出來ニ相成候ゟハ不存候へ共、寧波・福建邊の船斗引まとゐ來候とても、右數程ハ有間敷候、　公邊是迄御手當の御船〻舊記手留ニて見候へハ天地・鳳凰・八幡・天神・難波・三浦・竹内・麒麟・光陰・永壽・田市・大川・小川・御座船等ニて、御召舟も四十餘、惣御船數も二百艘餘と覺申候所、此御船〻とても内川ニ非常〻〻事有之節ハ、御入用御止ニハ勿論相成兼候處、又其上へ大船御出來と相成事ニ候へハ、何程公邊の御富ニても、數百大船御造作ハ相成間敷と存候へハ、一統へ御免ニ相成候様至願ニ候、　日本ハ何レの地ゟても同様、又兵士とても御直參倍臣等の義ハ相違可致候へ共、命のを〳〵きハ同様ニて、非常〻〻節危きニ付、　公邊ニて堅牢の艦御製ニ相成、薩・松へも御濟セニ相成候て、外國へ御濟セ無之候てハ、外〻の國ハ海防麁ニ致候てもよろ〳〵きゝ、又ゟ薩松の兵士のミ御厭ニて、外〻の兵士ニハ御かまゐ無之ゝニ有之候、付札、本邦舟〻義、海岸大名等へも御免被仰出候上、品川より兩國川邊の舟ニも、迫〻西洋ニて「バツテイラ」とゝ申候舟を、常ニ用候やう被仰付候樣仕度候、右舟小きハ五六間、大きゐるハ八九間斗ニて、是ハ全くハシケ舟ニ候へ共、海川とも用ニ相立申候、尤此方舟ニ合セ候てゟ水入深く、又ふちも高く候へハ、淺き處へハ付兼、又櫓ゟきゝも不宜、ボテさる船故、水主共ハ好不申候へ共、第一兩國川・品川等ニて追〻ハ敗舟も有之候へ共、右舟ニ候へハ敗舟も有之間敷、屋形舟抔ハ涼舟ニてゐくても宜敷候へ共、ゐくて不相成ハ、前廣「バツテイラ」へ屋形付候ても可然、「チヨロ」舟の外ハ、大方迫〻右舟ニ相成候樣、尚又漁事の舟も、前廣の舟ニ以來改候やう御達ニ相成候へハ、非常〻〻節ハ、自然有用の船ニ多有之候故、御益ニ相成申候、使ゐれ不申中ハ、人〻彼是申候へ共、十ヶ年も其まゝニて御指置被遊候へハ、其後ハ是迄の舟ニ致候やう申付候ても危く存、誰も好不申やう相成候義、指見えニ御座候、右舟ハ形抔置申候へハ、御用ニも御座候ハヽ、いつにても指出〻可申候、五六間ニ出來置申候へハ、内川を廻〻候へハ、何時ニても登セ候事相成申候、さ〻越候樣ゐれ共、有之まゝ申候、軍艦の義も鏃形ニ、先年六尺斗の大サニ抔置申候故、御用ニも候ハヽ、入　御覽候事も相成申候、尤是ハ秘舟ニ候得共、　上へハ何もゐく〻候事ハ無之、行〻舟ゐく〻てハと存候故、兼て抔置候事故、入御覽候へハ、有ゐさく奉存候、

「バツテイラ」及ヒ軍艦鏃形ヲ上覽ニ供スベシ

諸藩ノ大船建造許可ノ節ハ兵粮ノ運送ニモ便ナルベシ

又御書中ニ、

萬一浦賀沖へ、異船滯留罷在候節ハ、廻船運送〻通路を絶候得ハ、御當地ハ忽兵粮ニ差支可申、左候迚も、堅牢〻〻船無之候ゐハ、打退候義難相成云〻、

是ハ下官建白致候を、御尤と被存候てゝの御書中ニ候處、本邦〻〻通り、滯留罷在候節、御當地兵粮ニ差支申候とも、上の御船〻浦賀をたづ〳〵、他國へ米を求候義相成間敷、然る處、大名一統へ御濟セニ相成居候へハ、御一左右次第人〻の船へ積入候て、浦賀へも入レ申候へハ、　上の御備ハ不動〳〵て、米穀ハ入り可申候、是等もよく〳〵御考ゞよろ〳〵く候、

鹿兒島藩ニ琉球處分ヲ委任スト雖交易ソ許ス可ラズ

此度浦賀ニて異船へ御申諭ニ相成候處、無何事よく聞請候て、一切手を出ー不申引取候ハ、外ニ策可有之も難斗候、願〻面ニて見候ても、日本ハ外國と交易不致ハ、兼て承知ニ候を不知顔ニて願候ハ、元ゟ願の不濟ハ乍存、船を寄て測量等致ー候策ニ可有之候、琉球をゟ大隅一手の進退ニ御任セハ、御尤至極ニ奉存候へ共、交易有之候へハ、廻り〳〵て大隅の益も有之候へハ、必ス寧波・福建等ニて交易を内〻濟セ候義と察申候へ共、夫ニてハ此地ニて交易を直ニ不濟と申迄ニて、夷狄の願を濟セ候と申者故、當分穩ニ候とも手際ニハ勿論無之、後患を殘し候扱と可申、堅牢の船御免ニ相成候とも、万〻右樣の扱ニも候ハヽ、交易船ニハ相成候とも、防禦の船ニゟ安心不致、松前ハ尙更也、外大名ハ右等の憂ハ無之、前文兩家ハ其人次第ニて、堅牢の舟、よくも悪ーくも可有之候、琉球〻柔弱幷武器無之ハ、如何ニ候へ共、其本ハ　公邊より御内達有之候て、右樣らと覺申候へハ、今更無已事ニ候、

近海備向の一條云〻、

近海沿岸防備ニ關シ意見ヲ陳ブ

是ハ極密ニ候へ共、御使番御目附等へ被　仰付、俄ふ海岸備場へ參り見分致候ゞよろーく候、但シ、夫〻次第有之候、何分備も可有之方より先へ廻り、備無之方へハ、出來候頃廻り候ゞよろーく候、俄ニ備無之方へ參り候へハ、其者不調法ニ相成候のミニて、もとや見分も相濟候故、先ツ久ーくハ參る間敷と存候て、やとり意り可申とさつー申候、第一ニ下官、國へ參り見分致候樣致度候、下官退隱、戸田銀次郎・藤田虎之介等朝暮　天下の御爲異船を憂候人〻、今の姿ニ相成候へハ、必ス國許も、下官在職中の如く防禦等の世話無之ハ、指見え申候へハ、折角拵申候筒も車も腐候やう相成申候へハ、不時ニ見分の義も有之、於臺場素拂ニても同心へ成とも御申付ニ相成候へハ、人〻又〻目覺申候て、下官等退隱ニても此後怠り不申爲ニよろーく候、尙又不手當ニも候ハヽ、下官在職中世話不行屆よーニて、又〻御咎ニ相成申度候、一年や一年半戸を閉居候とても、どの道退隱の事ニ候へハ、一切不苦、不手當と有之候ての御咎ニ候へハ、實以後日の爲ニ相成候て、何程戸を閉引込居候ても、有らさく奉存候、右の沙汰承り申候へハ、防禦不好大名も、夫〻手當致候ニ無疑候へハ、風聞御聞セニて、夫〻手當致方より追〻御吟味ニ相成、格別の方へハ、御賞しも有之候ハヽ、日本一體備全備致候事、傳レ命よりも速ニ可有之候、寛政年中よりいつも〳〵同樣の御達ゞ出さと申位ニて、不心得の人ハ、やとり平〻無事此度御達ニ相成候ても、又例の御達ゞ出さと申位ニて、是まて全備不致候へハ、ニて備ハ致し申間敷候故、何卒前〻〻通り、一術御行被遊候やう奉願候、下官より内〻ニもケ樣御咄申候義、奥御右筆等へ御もらーゟ相成候へハ、直ニ下官國へも響き、さらニ用ニ立不申候、策ハ密と申候へハ、四閣老御相談ニて、

上のミ御申上ニて御扱ニ無之てハ參り不申候、扱又下官、一昨年、ケ樣被　仰付候より

大筒鑄造ノ許可ヲ請フ

水戸藩備向檢分ノ上成績ヨケレバ戸田藤田ノ罪ヲ免ゼラレタシ

ハ、拵らけ候大筒等、其まゝニ致置候處、外大名ニハ追〻鑄立候人も有之候處、甚殘念ニ存候へハ、又〻鑄立候ても可然哉、不苦候ハゝ、此義ハ家來へ爲見候てもよろ〳〵き樣、御別紙へ御認ニて可被下候、依此さん極密御咄申候也、

吳〻も本多へ認候通り、下官國許を初ニ御見分有之やう致度、筒其外共不手當不手入ニ候ハゝ、本多へ認候通り、又〻下官義御咎ニ相成度、若又外〻同祿等へ引合セ、手當よろ〳〵く候ハゝ、御賞美被下、戸田・藤田等も御免ニ被　仰付候やう奉内願候、何レ又〻御咎ニ相成候ゟ、御賞美ニ相成候ゟ何レニてもよろ〳〵く御座候、御咎ニ相成候ても、御賞美ニ相成候ても、外〻大名へ響き候て勵ミ候ハ、同樣ニ候へハ、御咎ニても御賞美ニても　公邊の御都合次第ニて、免角　天下の御爲海防手厚く相成候ゟ、肝要ニ御座候、以上、

七月十三日

何レも下書不認、心ニ有之まゝを認候義故、不文言ハ勿論、不敬〻義も可有之、又長々の事故、前後致〻或ハ同事出候事も可有之候へ共、何も貴兄御一覽の上、御火中と存候故存分認申候、乍然如何樣認候ても、片言ニて面晤致候やうニゟ不相成、只一己の了簡を述候迄也、

三家塗船使用ノ件

兜ヲ贈ル

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月十三日老中阿部正弘宛

一船〻義ニ付、存出候故申進候、拙家抔ニても、三代將軍御代より、於　御府内、塗舟用來（モチキ）、只今以用申候處、一昨年ゟ水野越前守ゟと覺申候ゞ、尾州ニて船手入出來、於品川乘試申度よ〳〵御屆申上候節、於　御府内塗船用候義ハ、不相成よ〳〵、御達ニ相成候處、右ゟ何そつき當り有之候ての御事ゟ、左も無之候へハ、下官ニてさへ用申候へハ、紀州ニても同斷ニ可有之、尾州斗不相成と申ハ、如何ニ御座候故、如以前、三親藩一同於　御府内塗舟用候樣、尾州へ御達ニ致度候、○中略、一昨年、下官退職以來、大筒製作指扣居候處、取掛置候てさへ、中〻急〻ゟも出來不申處、諸家の沙汰承り申候ニ、追〻製造仕候へハ、此時節ニ當り、三親藩の者打捨置可申時とも不存候、如以前、製造申付、苦かる間敷哉、此さん御問合申候、

七月十三日　齊昭

勢州殿（參）

別紙、此兜ハ、田舍細工の拙作ニ候處、下官在職中世話いさ〳〵、漸〻見苦敷程ゟも出來候樣相成申候、此度出來候分手元ニ有之候故、御一笑迄ニ進申候、御貸物〻用ニも相成候

ハヽ、令大悦候也、

○欄外記事 別紙ニ認ル

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月十三日老中阿部正弘宛

齊昭下策

一昨年、琉球へ兩夷指置候て、當年ニ相成、右の者を尋候て參り申候ニ付、考候へハ、前ゟ兩夷ハ居鳥（チトリ）ニ致候事ニて、必ス此上ハ松前等へも、右樣の者を何とゟ名つけ、居鳥ニ指置、又ゝ夫を一兩年の中ニ尋ニ參り、（一兩年の中ニハ、其國の貧福强弱も相分り候へハ、其頃尋ニ來り可申候、）扨滯流夷の扱、惡ーく候ハヽ、夫を塩ニ難題を申ゟけ、戰爭ニも及可申、又よく候ハヽ、懇ニいたしー候て、其地の人へ品ゝゟさへ、撫込候て、天主を施、通信を結ひ候手段と存候、琉球・松前、夷狄の存候樣相成候ハヽ、外　日本廻りの島ゝへ、追ゝ右手段を以、疑物の漂流夷指置、內地湊ゝへも指置候やう相成可申候へハ、若此上万ゝ一松前・蝦夷を初、島ゝへ疑物の漂夷等、指置候ハヽ、皆海船へ乘せ、早ゝ長崎へ送り可然候、尋來候節ハ、漂流の義ハ何レの場と申も無之候へハ、無已上陸候とも、於此地外ゝゟ歸候義不致國法故、漂夷ハ長崎へ廻ー置

漂民ヲ長崎ニ護送シ國內ノ事情ヲ知ラシム可ラズ

欄外記事

候故、請取候ハヽ長崎へ越候やう申聞可然、左候ハヽ、必ス滯留夷を居鳥ニ致候策ハ止、又外ゝの策ニかへ可申候へハ、ゐへ候ハヽ、又此方ニても夫ニ付、一策致ー候ゟよろーく、一手ッ、彼ゟ先へ策廻り候程ニ無之てハ、必勝ゟ得難く御座候、但シ長崎へ廻ー候ハ、海上ニて廻ー候義勿論也、右疑漂夷ハ、一日も不置、風次第ニて直ニ長崎へ廻ー可然、其內ハ家へ入置候て、一切外を見せ不申ゟ宜候、打拂以前のまゝニ候ハヽ、ケ樣の事ハ出來申間敷、くれ〳〵も殘念ゟる事ニ、

七月十三日

○欄外記事 本ゟ下策申遣候義、有志ニて後ニ見候ハヽ、拙と可申候へ共、迚も當時の有樣上策申候とて、空論ニ相成、取用ニハ不相成ハ、本ゟ下策ゟれとも、疑漂民を其まゝ指置て、尋ニ來り、難題申サセ候ニハ、まー可申と、下策とハ知ゟら、可被用事を、申遣ーさるニ、後の見る人、其心得有べー、

三家ニ軍艦製造ヲ許可スベシ

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○七月十三日老中阿部正弘宛

一書奉願候、異船防禦ゟ付、堅牢〻大小船御製作〻儀、此度上〻御船を初、浦賀・長崎・薩州・松前等製作　御免被遊模樣ニより、外ゝ大名へも同樣〻御內議被爲在候由、不肖儀十ヶ年來追ゝ申上候赤心も、乍恐符合仕、難有仕合奉存候、且海

瀬〻藩屏故、兼〻素願仕居候所、尙又尾・紀兩家も同樣〻儀、未御内議中ニて候得共、表向薩州・松前へ御達も御座候節ハ、一同ニ御濟ニ相成候樣、爲天下奉内願候、御申上等宜敷賴入存候、謹言、

七月十三日

水戸前中納言
齊　昭（花押）

阿部伊勢守殿
机下

〔老中阿部正弘書翰〕○新伊勢物語所載

○七月二十七日德川齊昭宛

尊答奉拜見候、如尊命、不定〻氣候御座候得共、先以　公方樣益御機嫌能被遊御座、御同意恐悦奉存候、　尊君ニも益御勇健被成御座、奉恐慶候、扨先頃蒙仰候條〻〻儀、達　御聽候云〻、將又異狄願書幷諭書等、入御覽、且同列共、内評〻趣申上候樣、被　仰出候儀ニ付、御禮〻義、委細蒙　仰候趣奉敬承候、御紙表〻趣、具ニ達　尊聽候、此段御請奉申上候、恐惶謹言、

七月廿七日

阿部伊勢守

尊答奉拜見候、如尊命殘暑强御座候處、益御勇猛被爲渡奉恐慶候、扨　尊慮云〻〻儀ニ付、

佛艦提出ノ願書ノ一覽ヲ許ス

蝦夷地漂着ノ外國人ハ長崎ヘ護送スベシ

大筒製造ハ苦シカラズ

高野長英ヲ未ダ捕ヘ得ズ

尙又御禮文御差出奉拜見候、早速達　御聽、則別紙ニ御請奉申上候、且又御館ヘ參上難仕候ニ付、思召込〻條〻、御別紙ニ蒙　仰候趣、逐一奉拜見候、打拂〻儀幷軍艦製造〻儀、琉球・松前等〻御高論、且御密旨〻趣共、何も5得合考評議仕候上、從是可奉申上候、將又御三家方軍艦御製造御願〻趣幷塗船御用ひ〻儀等も、追る評決〻上、可奉申上候、

一六月初旬、長崎ヘ渡來〻異船より差出候願書、被成御一覽度旨、蒙仰、奉拜承候、其段達　御聽候處、入御覽候樣被　仰出候間、則書類一冊、爲御見合奉差上候、

一一昨年、琉球ヘ兩夷人差置、當年右〻者を尋參り候ニ付、御明考〻趣、御尤至極奉存候、仰〻通、既ニ蝦夷地にも、今般夷人漂着ニ付、早〻致歸帆候樣、手眞似を以相諭候得共、不致出帆候由ニ付、彼地ニ片時も難差置、依之早速長崎ヘ相廻〻候樣、志摩守ヘ差圖及置候事ニ御座候、

一大筒御製作、當時御指扣置被成候處、此節柄如以前製造被仰付、苦のる間敷哉〻段、蒙御尋候趣、是亦奉拜承候、右ハ聊不苦候儀ニ御座候間、中將殿ゟ表立御屆御座候樣奉存候、

一高野長英事、召捕ニ相成候哉〻旨、段〻御心配御尋〻趣、奉拜承候、精〻遠國迄へも、夫〻申達相尋候得共、未差押不申、甚以心配罷在候、

一五家〻者共〻儀ニ付、縷〻〻御趣意、是亦奉敬承候、其内思召〻程奉伺度奉存候、

一琉球國へ、佛朗西船渡來〻儀ニ付、過日も申上置候處、去廿日、大隅守ゟ別紙〻通相屆候、御尋之無御座候得共、兼て御配慮被爲在候御儀故、奉入御覽候、一先ツ歸帆ていゐ〻候得共、又〻壹人殘置候次第、向後〻處不啻心配罷在候、

一御國許製作〻御兜拜戴被　仰付、千萬難有仕合奉存候、堅固出來、殊ニ細工も見事ニて、七十二間ノ兜

兼〻御世話も被爲在候御品〻由、別ゐ難有奉存候、早速仕立可申付と奉存候、

右奉申上度、再御請旁如此御座候、以上、

七月廿七日　阿部伊勢守

尙〻、早速御請可奉申上〻處、彼是取紛延引仕、其上亂筆御高免可被成下候、以上、

幕府、松前藩主松前昌廣志摩守ニ命ジ、擇捉島漂著米國人ヲ長崎ニ護送セシム。

〔通航一覽續輯〕○內閣記錄課所藏本

弘化三年七月十三日、御下知、

書面漂著〻異國人共、彌小船ニゐ歸航難相成旨、申聞候上と、强ゐ申諭候筋ニと無之候間、追ゐ長崎表ニ差遣〻候樣相成候節〻辨利宜敷場所ニ引取置、番人附置、猶取計方相伺候樣可仕候事、

幕府松前藩ニ命シ漂着米國人ヲ長崎ニ護送セシム

〔松前藩主松前昌廣伺書〕○通航一覽續輯所載

○十月十三日幕府へ

十一月廿七日、御用番牧野備前守樣ゟ差出候處、御落手ニ相成候得共、御差圖ゟ無之、相濟、伺書左〻通、○朝路聽宜

弘化三年十月十三日、志摩守伺書、○通航一覽續輯

私領分ヱトロフ嶋〻內ニ、上陸仕候異國人〻儀ニ付、六月十二日、家來〻もの〻奉伺候處、追ゐ長崎表ニ被差遣候樣、相成候節〻辨理宜場所へ引取置、番人附置、猶取計方相伺候樣可仕旨、七月十三日、靑山下野守殿〻御差圖被成下候ニ付、早速以飛脚、ヱトロフ島勤番所へ、可申遣〻處、クナシリ島〻內、アトヱヤと申場所へ、八月廿三日、到着風待仕候へ共、最早時節後レ、海上荒く相成、迚もヱトロフニ〻渡海難相成趣ニゐ、九月九日、クナシリ勤番所ニ、飛脚〻もの罷歸申出候段、同所勤番家來共〻私居所へ申越、依之兼ゐ御差圖〻趣、來三月末、四月初、渡海相成次第、早〻ヱトロフ場所ニ申遣、夫〻同所出帆、クナシリ島へ渡海仕、陸通箱館表ニ來五月末、引取候樣可相成奉存候、左候得と、引取置取計方可奉伺筈ニ御座候得共、遠境渡海場〻儀ニ付、陸通箱館表ニ引取候上〻取計方、此節奉伺、來春夫〻手配仕置度、此段奉伺候、以上、

弘化三年七月十三日

十月十三日

〔松前藩届書〕○通航一覽續類所載

松前志摩守

（胡路護瞞宣）

○十一月十四日幕府へ

弘化三年十一月十四日、松前氏家人御屑、

志摩守領分エトロフ島に、漂着異國人〻儀ニ付、取計方、最前奉伺候處、七月十三日、以御書取、追る長崎表に差遣候樣相成候節も、辨理宜場所に引取置、番人附置、猶取計方相伺候樣可仕旨、御差圖被成下候趣、七月廿七日、於在所志摩守承知仕候、夫かクナシリ島勤番家來共に申遣候處、八月九日、御達〻趣奉承知、風順次第、エトロフ詰勤番家來共に相通し可申段、飛脚を以在所表に申越候、然ル處、クナシリかエトロフに〻渡海秋かハ海上荒く、貳百十日後も、先渡海難相成趣申傳、殊更此度も餘程時節も後レ、數日風待候共渡海難相成哉ニ奉存候、クナシリかエトロフへ〻渡海難相成段、申越候飛脚も、雪中時節柄延着可仕奉存候、彌渡海不相成候へも、兼る御達〻趣、來三月末、四月上旬ふらてハ、エトロフ勤番〻家來不奉承知候、此段先各樣迄、申上置候樣、志摩守申付越候、已上、

松前志摩守家來

二百十日以後ハ海上波浪高ク「エトロフ」島ニ渡海出來ズ來春幕命ヲ「エトロフ」島勤番役人ニ傳フベシ

十一月十四日

〔老中達〕○通航一覽續類所載

田崎與兵衛

弘化三年十二月廿四日、志摩守ゟ渡ス書付、

○十二月二十四日松前藩主松前昌廣へ

先達るエトロフ島に漂着致一候異國人共、取計方〻儀、追る長崎表に護送、辨利〻場所へ引取置候樣相達候處、左候るゑ、無用〻費用相懸り候而已ならば、夫丈手數も相延手間取可申候間、矢張最前場所ニ其儘差置、手當申付置候上、可成丈ケ手繰致し、渡海可相成時節ニ至り候ハヽ、一日も早く長崎表に海上を送越候樣可被取計候事、

漂着異國人ハ可及的速ニ長崎ニ護送スベシ

〔徳川齊昭書翰〕○公爵德川圖書所藏本新伊勢物語所載

○十月二十二日阿部正弘宛

一去ル十五日ゟ御答ニ、北地〻疑物漂夷、長崎へ早〻廻候樣御達被成候へ共、遠路日數相懸り、右御差圖クナジリ邊迄ハ、無差支可相達と御存被成候へ共、エトロフ渡海難相成時節ニ至り候故、早急ニ難相屆可有之、依るハ、箱館へ送越候ゑ、來春ニも相成、夫かゟ長崎へ送屆候事ニ可相成と御懸念被成候よ一、尤時〻志摩守家來共、御呼寄セ否〻答、御催促被成候との義、一〻承り申候へ共、此段ゟ於下官不得其意事ニ御座候、定て松家家

漂着異國人移送ニ關スル件

來の咄ニて被仰越候義と被存候處、先ツ下官より若〻北地へ疑漂夷（物脱カ）指置不申候へハ、よろ〳〵と過憂の餘り申進候ゟ、七月十三四日方と覺申候處、右の御答ふ、既ニ蝦夷地へも、今般夷人漂着ニ付、早速長崎へ相廻候樣、志摩守へ御指圖有之よ〳〵御申聞有之ハ七月廿七日ニ御座候、然る處、南部ハ江戸ゟ百三十九里斗、津輕ハ江戸ゟ百八十里斗ゟて、尾崎・大閊等青森・三馬屋等迄至り候とも、二百里内外と存候處、三百里と見候ても、京都へ江戸ゟ百二十里を六日切ニて、（六日ハ、格別ニ早飛脚と申ニハ無之候、）參候ニて見候へハ、一日二十里ツ〻、三百里ハ十五日斗ニ相成べ〻、扨又松前城下迄ハ、少〻く海を隔て、難所ニ候へ共、大名等の渡海と違、便船ハ常ニ有之、尚又重き御用ゟ品ニ候へハ、如何樣ニろゟさ〳〵渡海不相成義ハ有之間敷、又城下ゟエリモ岬迄ハ、海上百里内外の渡海ニ候へ共、西海ゟの流れも早く、ろさ〳〵エリモ岬迄渡り候義、遲〻致〻申間敷處、直ニエリモ岬へ渡り不申、先ツ箱館へ渡り、夫よりエリモ岬へ渡候事と存候處、

箱館より、（エリモ岬迄、七十五里斗、）エリモ岬より、（アツケシ迄、七十五里斗、）アツケシより、（子モロ迄、十八里斗、）子モロより、（クナシリ島中アトエヤと云所へ入津、同十八里斗、）アトエヤゟ（エトロフ島ゟ海上ヲへて、直ニラツコ島ウルップシマ也、）まて、十八里斗也、

西蝦夷地ハ三月ゟ九月中旬迄の間、通船不苦、九月中旬ゟ二月迄ハ通船無之難場、（但し氷不申、中難場といふハ堅牢の船無之故ナリ、）東蝦夷地ハ四月ゟ十一月中旬迄ハ、通船不苦、十二月ゟ三月中旬迄ハ惡

「エトロフ」島ヘノ渡海不可能トハ承知シ難シ

〻、依通船ふ〻、（是亦船惡敷故之、）東廻り〻船、九月ゟ二月迄ゟ、松前へ下ルふ惡〻、南部〻シリヤ岬へ廻〻難〻、松前より登りハ、不苦よ〻、（本々〻義ハ、時ニ松前へ往來の船頭等ニ、御聞被成候へハ、直ニ御分りニ相成ゟ〻、）右〻通りニ覺申候へハ、クナシリへ無差支相達候て、エトロウへ難達譯ハ無之、ゟつゟの場合、其上北風ニ相成候時節故、エトロウより長崎へ廻〻候ニハ、順風多有之ゟき時ニ候、畢竟ハ松前ニて、不好故ト被察候、且又來春迄、エトロウへ指置候うへハ、其まゝ長崎へ廻〻、可然エトロウ此模樣存候上、又來春箱館へ送越、箱館の模樣見セ候へハ、後日此者案内ニ可相成、ろさ〳〵不策のミと被存候、右樣の風故、兼て松家へ御任セハ如何と申事ニ御座候、（來春ニ相成候ハヽ、南風勝故、又其節ハ何のゟのと申、長崎へ送り不申、内〻尋來候ハヽ、ゟさ〳〵遣候心得ニも可有之哉、）遠國ハ兼て伺置候て、御差圖無之とも、早速ニ取扱御屆申候やうニ無之てゟ、何事も機會ニ後れ申候、前々〻事も松家ニて不好故と存候、「まら河此關まてゆゟぬ東路ゟ、日數經ぬれハ秋風ぞ吹、」と申如古歌、好ぬ事ハ遲〻相成可申、不〻爲也非不能也と遺憾不少候也、

十月廿二日（燈下大亂筆、御推覽可給候也、）

尚〻、前々〻義を以、松の家來へ御談ゞよろ〳〵く御座候、定て風の何のと申ゟげ、口上ゟ可致候へ共、前々の海陸里數を以、御考相成候ハヽ、逆風斗も有之間敷候へハ、エトロウへ達不申筈ハ有之間敷被存候也、（疑らくハ、松家（マツ）の樸いふ處ハ、便舟を待事成べ〻是天下の大事を〻すれて、損益を見る故也、）

伊勢守殿　御報　　齊昭

〔徳川齊昭書翰〕○新伊勢物語所載

○十一月十六日阿部正弘宛

寒氣〻節、萬福御精勤珍重ニ存候、過日拜見被仰付候屆書、返納仕候、御落手可給候、尚又跡引ゟへ拜見奉願候、扨又北地疑物漂人云〻ニ付、不審〻義、乍例心付ニ任セ、存分相認候段、御海恕可給候、下官申候通り、以前の御申聞ハ松臣ゟ御聞〻所と察申候處、「クナシリ」迄屆候て、「ヱトロウ」へ屆不申義ハ、何分下官不承知ニ御座候、其後又松臣へ御尋被成候哉否、薩州ゟハ今以御屆無之候哉、日數よて考候ても、最早御屆ゟハ可相成事と被察候、于今海軍船海岸備〻義、御達も出不申候處、執法の良策如何と、　天下の御爲日夜心配仕候、何も序故申進候也、

十一月十六日　　齊昭

勢州殿　參

〔異船探微〕○内閣記録課所藏本　通航一覽續輯所載

弘化三年七月廿三日、松前志摩守家人御屆、翌廿四日、御下知、

志摩守樣御領分東蝦夷地クスリ持場〻内、字コトロンベと申所〻渚ゟ、閏五月十九日、四ツ時頃、異國船橋船半ゟ折候樣〻物流ゟ上リ有之候段申來候、

御下知、

書面〻船、直ニ燒捨、屆ニハ不及候事、

〔松前藩江戸詰用人伺書〕○帝國圖書館所藏本　胡路譏隣宜所載

○十二月二十六日老中へ

一十二月廿六日、阿部伊勢守樣御勝手ゟ、左〻御内慮伺書差出、

松前藩異國人移送心得ヲ伺ヒ出ヅ

先達ゐヱトロフ嶋に、漂著〻異國人共、矢張最前〻場所ニ、其儘差置、可成丈手操仕、渡海可相成時節ニ至り候ハヽ、一日も早く長崎表に、海上を送越候樣、被　仰渡候付、左〻通奉伺候、

一異國人共、若病氣〻節ハ、外異國人より願ニ候ハヽ服藥爲仕可申哉、

一万一病死仕候ハヽ、鹽詰ニ仕、長崎表に著〻上、御奉行所に御屆申上、御差圖次第ニ相心得可然哉、

一長崎表に著仕候ハヽ、御奉行所に御屆申上、此度被　仰渡〻趣申上、異國人共幷所持品相添、其引渡申上候心得よて可然哉、

一乘船〻儀ハ、七百石以上〻船相用、物頭壹人、目付役壹人、侍貳人、徒士目付貳人、足輕小

頭貳人、足輕十四人、小人七人、醫師壹人、此外供方一同乘組仕候心得ニる可然哉、
一海上浪高ニ相成候節ハ、何國〻海岸ニるも、上陸爲仕候る、不苦御座候哉、
一異國人漂著〻節、乘來候小船〻儀、如何取計可申哉、
右〻趣奉伺、在所表ニ申遣度、此段各樣迄奉伺御內慮候、以上、

十二月廿六日

松前志摩守家來　田崎與兵衛

〔幕府達〕（○胡路譲瞞宜所載）

○十二月二十四日松前昌廣へ

一十二月廿四日、阿部伊勢守樣ゟ御呼出、公用人ヲ以、左〻御書取御渡、

折表

覺

先達るエトロフ嶋ニ、漂著いたし候異國人共、取計方〻儀、追る長崎表ニ護送辨利〻場所ニ、引取置候樣相達置候處、左候ると無用〻費用相懸り候而已ふらほ、夫丈日數も相延、手間取可申候間、矢張最前〻場所ニ其儘差置、手當申付置候上、可成丈ケ手操致し、渡海可相成時節ニ至り候ハヽ、一日も早く長崎へ、海上を送越候樣、可被取計候、

紅葉山祖廟參詣

十四日丁酉　征夷大將軍德川家慶、紅葉山總靈屋ニ參詣ス。

〔愼德院殿御實紀〕（○續德川實紀所載）

七月十四日、紅葉山　諸廟に、御詣あり、

〔弘化年錄〕（○內閣記錄課所藏本）

七月十四日

一今五時〻御供揃ニる、紅葉山惣　御靈屋に、　御參詣、

〔愼德院殿御實紀〕（○續德川實紀所載）

七月十七日、紅葉山　御宮に、牧野備前守（忠雅、老中）代參す、

〔弘化年錄〕（○內閣記錄課所藏本）

七月十七日

一今朝、紅葉山　御宮に　御名代　牧野備前守、

盂蘭盆會

十五日戊戌　盂蘭盆會。

〔愼德院殿御實紀〕（○續德川實紀所載）

七月十五日、盂蘭盆會により、東叡・三緣の兩山に施物をおくらせらるゝ事、例の如し、

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

七月十五日

一當日〻爲御祝儀、御三家方ゟ使者、被差出之、於躑躅〻間、謁伊勢守、

御使者由良播磨守

日光御門跡

（銀二百枚 時服二十）

右、爲盆料、被遣之、

上使松平市正

增上寺方丈

（同二百枚 同十）

右、同斷ニ付、被遣之爲御禮登城、於御白書院緣頰、謁伊勢守、

松平頼熙卒ス

十九日壬寅 高松藩世子松平頼熙右京大夫卒ス。征夷大將軍德川家慶、忌ニ服ス。

〔愼德院殿御實紀〕○續德川實紀所載

七月十九日、松平右京大夫病危篤により、奏者番諏訪因幡守して問はせらる、○中略、二十二日、○中略、松平右京大夫うせしかば、その養父讃岐守のもとに、奏者番土屋采女正して、香銀

高松藩世子卒去ノ爲將軍忌服ノ事

三十枚をおくらせらる、

〔讃岐高松〕松平家譜〕○維新史料編纂會所藏本

養子右京大夫頼熙、幼名兒之助、實ハ養父頼恕四男、母ハ實父頼儀女實姉、文政九年丙戌十一月十五日、於江戸誕生、天保七年丙申四月廿六日、十一歳ニ〆、頼恕願之通頼胤養子ニ被仰付、十二年辛丑十月十五日、初る愼德院殿ニ謁見、十三年壬寅十二月五日、被敍從四位下、被任侍從、右京大夫と改、弘化三年丙午七月十九日、二十一歳ニ〆於江戸死去、室ハ有馬玄蕃頭頼德女、天保十年己亥三月廿四日、緣組願濟、弘化二年乙巳十一月廿七日、婚姻、子無之候、頼胤侍女、五男二女を生、長ハ禎之助、早世、次ハ篤之助、早世、次ハ女子、大原正四位重實室、次ハ女子、次ハ鎭之助、早世、次ハ頼溫、爲頼聰嗣、次ハ竹雄丸、

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

七月廿日、阿部伊勢守殿御渡三通、

松平右京大夫卒去ニ付、昨十九日ゟ、

公方樣（家慶） 右大將樣（家祥）、定式〻〻

御忌服被爲 請候事、

七月廿日

弘化三年七月十九日

松平右京大夫卒去ニ付、爲伺御機嫌、明日四時、溜詰詰衆御奏者番計、　御本丸西丸ニ出仕〻事、

一右〻向、病氣幼少〻面〻ヒ、月番〻老中和泉守（松平乘全）宅ニ使者差出、在邑〻面〻ヒ、老中和泉守ニ飛札可被差越候、

此外〻面〻ハ、出仕幷　御機嫌伺ニ不及候事、

右〻通、可被相觸候、

七月廿日

七月廿一日

一松平右京大夫卒去ニ付、爲伺御機嫌、溜詰詰衆御奏者番登　城、於席〻謁老中、

七月廿二日

銀三十枚

右、養子右京大夫卒去ニ付、爲御香奠、被遣之、

上使土屋采女正

松平讃岐守

〔高知藩廳記錄〕○侯爵山内豐景所藏本山内家御記錄（弘化三年）所載

一七月廿日、大目付中廻狀を以、阿部伊勢守殿被渡候由〻御書付寫三通、松平安藝守殿・松平出羽守殿ニ到來ニ付、右留守居共ゟ最寄廻狀を以申來、寫左〻通、

大目付ニ

松平右京大夫卒去ニ付、昨十九日より

公方様　右大將様、定式〻　御忌服被爲請候事、

七月廿日

大目付ニ

松平右京大夫卒去ニ付、爲伺御機嫌、明日四時、溜詰詰衆御奏者番計、　御本丸西丸ニ出仕〻事、

一右〻向、病氣幼少〻面〻ヒ、月番〻老中和泉守宅ニ使者差出、在邑〻面〻ヒ、老中和泉守ニ飛札可差越候、此外〻面〻ハ出仕幷　御機嫌伺ニ不及候事、

右〻通可被相觸候

七月廿日

二十日癸卯　鹿兒島藩主島津齊興（大隅守）　琉球ニ於ケル佛國提督應接ノ顚末ヲ幕府ニ報ズ。

〔鹿兒島藩主島津齊興屆書〕○公爵島津忠重所藏本 島津家國事御掌史料所藏

○七月二十日幕府へ

琉球國之內、那覇港へ當四月七日ヨリ卸碇居、同五月七日、同國之內、運天湊へ乘廻候佛朗西船一艘、同十三日、右同湊へ卸碇候佛朗西大總兵乘船等二艘、都合三艘共、三司官初役々差越、晝夜勤番、且大總兵ヨリ琉球總理官へ致面會、和平之事申談度申出趣有之、追而可及返答旨申達置候趣ハ、追々御屆申達候通御座候、然處、總理官之名目ニ而國頭按司、役々召列、大總兵乘船へ差越、致面會候處、外兩艘之乘頭ニモ列席、滯留之唐人ヲ以、本國皇帝之命ヲ請差越候旨、殊歐羅巴數國之樣子强大申立、琉球ニモ必佛國ニ親ミ候樣、且佛國淸國和好交易免許之文書ヲ見セ、商道之儀共委細申聞、終ニハ和好致交易度趣、國頭按司へ申聞候付、此儀ハ國家之大事故、國王へ申聞何分可及返答旨申達置、猶又篤ト遂評議、琉球ノ儀ハ小國屬島偏小、全體產物相少、金銀銅鐵類ハ全無之、淸國之屛藩ニ而、度佳喇島迄致通融候、淸國へ代々貢職ヲ供フ故、入貢之使ニ日用品物買取、又藥種ヲ求、療用相達候、右貢物幷淸國へ持渡候諸用物、皆琉球之產ニ而無之、專度佳喇島ヨリ買求、國用之米穀材木鐵鍋其外器具等モ、彼島之商人持來、漸致用辨候へ共、風早之逢災難候節ハ、米穀之代リ都而蘇鐵ヲ食用ニ致シ、專度佳喇島之商船持來候米穀而已ヲ以、日用相辨候、實以窮國之事情、

右次第廣ク他邦ト交易和好致シ候儀ハ、迚モ不及國力候、再往遠國ヨリ渡來芳志之情合、誠以感激之至候得共、舊來度佳喇島ヨリ通商恩惠之好モ有之、何分ニモ難應其意候間、深ク仁慈之仰許容候、歸帆之後宜預奏達旨、折角丁寧相斷候處、大總兵不致信用、琉球ハ屬島偏小、米穀モ無之窮苦之孤島ト申事候へ共、此國ハ唐日本へモ通商、萬辨利ノ國柄ト兼而承及、此度暫逗留、致見聞候處、彌其通之事ト被察、其方ヨリ申聞候通ニハ難心得候、就而ハ佛國通商文事於許容ハ、以來琉球國益ニモ相成候樣可取計、再往種々申掛候情合、難默止候得共、猶餘儀ナク及理解、再三相斷候處、此度ハ致歸帆、申立之趣、皇帝へ具々奏達ニハ可及候得共、大總兵心底不致落著候間、國體之樣子見屆候形行致奏聞候ハ、、皇帝何分議定可有之、然ハ皇命之旨爲可申諭、今一ヶ年程ニハ可致來著、去々年以來、滯留之佛朗西人幷唐人ハ、此節列歸、三四ヶ月後、右佛朗西人ハ、又々可差渡、外佛人壹人重而皇命到來之節、爲通事殘置候間、琉球言語可相敎旨申聞候付、國禁之旨譯而相斷、一同列歸候樣申達候得共、更不聽入、佛人壹人卸置、一昨年來逗留之佛人幷唐人共、大總兵船へ召乘、都合三艘、閏五月廿四日、一同出帆、子之方へ乘行候、滯船中任望食料等相與、殘置候佛人壹人ハ、如最前、寺中明除、召置、柵ヲ結、番所數軒相構、三司官初役々晝夜勤番、堅取締申付置候、且又閏五月十四日、同國之內豐見城間切沖へ、異國船一艘干瀨へ走揚、難義之體見受候付、

役々差越、早速小船差遣、挽卸相助候處、乘組異國人之内一人致溺死、死骸ハ不相見得候、翌十五日、那覇湊へ挽入、本國幷漂著ノ次第相尋候處、言語文字聢ト不相通候へ共、佛朗西國之船乘組十六人來著、挽檣損居、右調用之木致所望度樣子、手樣等ヲ以、漸相通候付、晝夜取締申付置、所望之木相與候處、右乘頭ヨリ運天へ差越、大總兵に致面會度旨、手樣等ヲ以相達、强而難指留、役々附添差越、爲致面會、直列歸候處、未致滯船居候付、猶又取締申付置候、將又當四月五日、那覇へ渡來致滯留候、暎咭唎國之醫師幷妻子唐人共、今以無異事罷在候旨、琉球ヨリ飛船ヲ以、屆來候段、長崎奉行へ委曲申達候由、國元家來共申越候、此段及御屆候、以上、

七月廿日

松平大隅守

（新伊勢物語　湖泣輯書）

〔鹿兒島藩主島津齊興屆書〕○維新史料編纂會所藏本　湖泣輯書所載

○七月

私領分琉球國ゝ内久米沖に當三月十七日、異國船壹艘渡來、橋船三艘異國人十七人濱邊に漕來候に付、役ゝ差越相尋候處、言語文字聢と不相通候得共、食料拂底ゝ体、手招いたし候に付、爲取之候處、本船に漕返、無程夜に入、翌朝帆影も不相見候、同四月五日、同所に異國船壹艘渡來、橋船に異國人六人乘、濱邊に漕來、言語等不相通、是又食物拂底ゝ体致手招候に付、爲取候處、本船に漕返、子ゝ方に致出帆、同八日、同所沖に異國船三艘に異國人十八人濱邊に漕來、右同樣食物拂底ゝ体致手招候に付、爲取之候所、本船に漕歸、無程夜に入、翌朝帆影も相見へ不申候、猶取締向嚴重申付置候段、琉球より屆來候に付、委細長崎奉行に申達候由、國元家來共より申越候、此段及御屆候、以上、

七月

松平大隅守

（異船渡來一件　新伊勢物語　島津家國事執掌史料）

幕府使者任命ノコト

二十二日乙巳　新清和院欣子内親王○光格天皇中宮　崩御ニ因リ、征夷大將軍德川家慶、天機奉伺ノ爲、高家宮原義直攝津守ニ上京ヲ命ズ。

〔弘化年錄〕○内閣記錄課所藏本

七月二十二日

女院崩御に付、京都に

高家

宮原攝津守

弘化三年七月二十二日

御使

右大將樣御使兼

代り
戸田加賀守

右、被　仰付旨、於芙蓉間、老中和泉守列座、伊勢守申渡之、

（高麗環雜記）

〔高麗環雜記〕○東京帝國大學所藏本

七月二十四日

御座間

女院崩御ニ付、京都ニ　御使

右大將樣御使兼

高家

宮原攝津守

金十五枚
時服三　羽織

右、就御暇　御目見、

但、拜領物ハ於羽目間、老中出席頂戴之、

（弘化年錄）

〔老中達〕○內閣記錄課所藏本　伊勢京都日光持參之留所載

女院崩御付ゐ、

禁裏　准后御機嫌依被　聞召度、宮原攝津守被差登候間、可被得其意候、委細攝津守可爲演說候、恐〻謹言、

七月廿四日

酒井若狹守殿（忠義、所司代）　連判

西丸

同文言

松平和泉守

〔老中奉書〕○伊勢京都日光持參之留所載

女院崩御付ゐ、

禁裏　准后御機嫌依被　聞召度、宮原攝津守被差登候、右〻趣可被達叡聞候、恐惶謹言、

七月廿四日

德大寺大納言殿（實堅、武家傳奏）　連判

坊城前大納言殿（俊明、同）

西丸

弘化三年七月二十二日

弘化三年七月二十二日

同文意　　松平和泉守

幕府、長崎・浦賀兩奉行ニ諭シテ、外國軍艦ノ處置天保令ニ泥ムコト勿ラシム。

〔老中達〕○内閣記錄課所藏本　弘化雜記所載

弘化三年年七月廿二日　　長崎奉行ヘ　浦賀奉行ヘ

異國船渡來〻節、取扱方〻義ニ付、去寅年、相達候趣も有之候處、近來度〻渡來いたし、品〻願筋等申立、剩漂流ニ無之船も、必薪水食物等乞求〻趣ニ付て、卸〻望ニ任セ、與へ候といへとも、畢竟　御憐恤〻　御趣意ニ甘へ候ハ、或て此方ハ薪水等〻有無相尋候ハ、乞求候ハニも可有之ハ、又其品乞求候ニ事寄、　御國地〻樣子を伺候ハ、　御國法を犯し候樣成ハ迄も望〻品〻差遣候儀、有之候ハて、　御國威ニ拘り、不輕事ニ付、是等て、無用捨嚴重　御國威を示し可申て勿論〻儀ニ付、去寅年、相達候　御趣意て、若外國〻漂流船等全く薪水食物乏敷、及飢餓、是を乞ふ迄ニ渡來〻類を無下ニ打拂候事ニハ、彼是〻無差別、穩便ニ而已取扱候得て、　御憐恤貫キ候と申儀ニて無之候間、是等〻趣、心得違無之樣、能〻勘辨を相加へ、機變ニ應し、　御國威を不失樣、可被取計候、

午七月

二十三日丙午　新清和院ヲ泉涌寺ニ葬ル。

〔示羊記〕○野宮定祥日記　宮内省圖書寮所藏本

七月廿三日、丙午、天晴、今夜奉葬前新清和院於泉涌寺、先今朝、辰剋、有遺令奏之事、使實愛(正親町三條)朝臣右中將院司、上卿德大寺大納言(實堅)・辨光愛(柳原)・外記權少外記職孚(平田)、警固々關上卿以下同上、少將(定功)供奉、且御枕火所役蒙仰、仍申剋、催申一點也、着衣冠・單、奴袴、各亮陰裝束也、參本所、戌一刻、御出車、亥七刻、入御龕前堂、葬場使、(正親町)實德朝臣、亮陰裝束、然る依當朝咲之、警固中懸老懸云〻、不懸云〻、丑一剋過歸參、山頭使、(小森藏人)丹波頼永、寅剋、歸參云〻、議奏不及參集〻間、予不參内、所傳聞也、橋本黄門(實久)、參入本所、兼殿下伺定、依一卿可參向也、戌一剋、參内被言上、無異御出棺〻事云〻、少將御枕火御前火等、所役年中兩度勤仕、希代〻事也、

〔野宮定功日記〕○東京帝國大學所藏本

七月廿三日、丙午、霽、今朝被奏遺令之、催辰剋云〻、使別當右中將實愛朝臣、著亮陰束帶、帶劍、笏、但、入本所門〻時撤之、其隨身鈍色袴、參候於本所、漸及巳許、自禁裏奉行職事(坊城)俊克朝臣案内之後、内府(近衛忠熙)、亮陰直衣白單、被著西

遺令奏ノ儀ヲ行フ

遺令奏

庇奥座、西面御輿寄西庇之、實愛朝臣、降尋常車寄、入塀重門、隨身留此門外、庭中東行南折、經御輿寄西方、南行昇北面階殿上代北面階、著殿上代端座、東面、即起座、經簀子、入西庇、參進於内府前、内府、傳遺令曰、新清和院、去月廿日、崩シ給、遺令曰、緣喪ノ雜事可被停止、此旨奏聞、實愛朝臣、承之退去、直降北面階、經本路、出大門、帶劍笏、參内裏右衞門陣外、宜秋門、不向門、立於門南掖北面、此立樣傳奉伺執柄治定〻〻、不向門事有先規歟、外記師身(押小路)朝臣、出門向立使正笏、不揖、申遺令趣、申了外記歸入、使即退去、歸參本所、脇束帶著狩衣、直侍候云〻、先之上卿德大寺大納言、亮陰東帶、著左仗座、師身朝臣、參宣仁門外、申使參入〻由、上卿、移著端座、令官人敷軾、次外記、來軾、申遺令〻趣、次上卿、以官人招俊克朝臣、奏遺令〻趣、次俊克朝臣、歸出、仰遺令〻趣聞食、任遺令緣喪雜事令停止、廢朝五ヶ日、警固〻關任例可行〻由、次上卿、以官人召外記、依遺令可停止雜事、可爲廢朝五ヶ日〻由等仰之、外記、退去、於陣腋仰内竪、令止音奏、次上卿、以官人更召外記、問諸衞參否、外記、申候由、上卿、仰可召内竪〻由、次内竪、來小庭、上卿、仰可召司〻〻由、内竪、退去召之、次諸衞、入日華門、列立軒廊南庭、上卿、仰可警固〻由、諸衞、稱唯退、若有不候〻衞府去、令外記傳仰、次上卿、以官人召辨、光愛、來軾、上卿、依遺令、可停止雜事、可爲廢朝五ヶ日、警固〻關依仰可令成宣旨〻由等仰之、光愛、退出於陣腋仰史了、次上卿、退出了云〻、以上〻事以傳語記之、次第一帖借請、別寫留之、今夜酉剋、御葬送於泉涌律寺、予供奉〻事、去日被催仰〻間、未半許、著衣裳、橡袍・白單平絹、鈍色奴袴・帖紙自禮紙香・夏扇、春來平生所持物之、具雜色三人細烏帽・縹上下・黃單、白丁二人、尋常朱傘・胡床等、令持之、參本所、告參候〻由於傳奉、于時人〻少〻參仕、小時漸〻參集、本所付人〻、今朝巳剋參集、爲出御棺之、著狩衣・奴袴、午半許、奉挽始御棺、自御在所常御殿、引出之、漸及申許、奉移於御車了、其後三人ッ、交替奉守護云〻、此後本所付人〻、脫布衣、著亮陰袍、素服人、著素服、公卿、冠黑布、袍同、袴、殿上人、冠黑布・〻衣・同袴、爲供奉〻支度、内府遺令奏之後被退出、鷲尾前大納言(隆綱)・山科中納言(言知)・右兵衞督(持明院基定)・平宰相(右井行弘)・長順(藤原)等、自里亭著素服於當色去猶臨期著之、參入、殿下(鷹司政通)・仁門(寶仁法親王)(鷹司法親王)・知門(輪王寺宮)・偷加定院(惟淳)等、午半許令參給云〻、予等賜饌菓、稱御出立時刻差押移、黃昏有催、予等著藁履、其體如當奉、素服人幷下北面等、著當色、令支度〻後、予等所役人參御輿寄、此間無所役輩、公卿以下、降尋常車寄、入塀重門東行、經庭中列於御輿寄北庭東方、南上西面、公卿一列、殿上人在後列一行、又上北面代以下、同入塀重門進行、列於同庭西方、南上東面、上北面代・主典代等一列、下北面一列在後列、實愛朝臣・予、持脂燭、件脂燭、豫傳奏被授之、經御輿寄・南廊下幷巽角間等、候上間南障子際、東上北面、公前朝臣(公野)・保美朝臣、參進常御殿、御在所、昇御棺、如形由計之、其實昇御棺覆絹、件覆絹相帖、在御座上、御棺〻〻跡也相並上首西方、出來、内府、前行、殿下宮達等、被從後方、經廊下幷御輿寄巽間上中下間、進寄於御車、奉覆御棺、其實、只置御棺上之、南北相並置之、肝煎兩卿、移御枕火於蠟燭立於手燭臺、持之、左右前行、留於巽間置之、隆聲(八條)朝臣・長順等、取三具足、件三具足載机、置御車中御枕方、以紐結付、本儒僧之近代寺門執奉紐付之香爐〻蓋并瓶等二品殘置於御輿寄巽間、隆聲朝臣、取件蓋、參御車、覆香爐、長順取瓶、同置香爐邊、机上置於御車中、御枕上方、次閉御車戶、肝煎卿并御棺昇・三具足等所役輩、役了退去、經廊下、降尋常車寄、入塀重門、加立庭中列、香爐役人、先之同降尋常車寄、入塀重門、徘徊於御輿寄西頭、次實愛朝臣・予、進寄於御枕火前、予北、移付脂燭、出上間西簾、垂簾〻、自褰之、經西庇、出於西簀子、實愛朝臣、北行至北端、召炬火者、第一下北面(三上)、景文宿禰、持松明參進、

不昇簀子、燃移之、此間予、立西簀子相待、了實愛朝臣、猶持脂燭歸來、予相共降北面階、殿上代前階之、聊出庭中、召列奉行、著布衣、修理職并傳奉家僕〻、取松明燃移之、手自燃移之、了投棄脂燭、經上北面代列前北行、立御車前、實愛朝臣西方、東面持左手、予、經御車前、不蹲居、立東方、西面持右手、不合火先之、凶事例之、以景文宿禰所持〻火、炬火者各燃移之、進出左右相分、立於實愛朝臣・予等次北方、此間定德朝臣・胤保等、昇北面階入西庇、先定德朝臣、取香爐香袋等、取副持之、至西簀子北端、召重政朝臣授香袋、即懸頸、歸立本列、次召光德朝臣、授香爐、同懸頸復本列、了定德朝臣、歸入、次胤保、取香爐袋等至同所、召俊璹朝臣授香袋、召資施朝臣授香爐、了定德朝臣・胤保等、相共降本階、經炬火者列北、加殿上人列、此間燒香者火舍持等、左右相分立御車前、實愛朝臣・予〻上方南、各相對立、內府、降北面階、於此所被著藁沓、廻炬火者列末、被加立公卿列、殿下・宮達等、降北面階、令列立西庭給、北面、源三位通兮、肝煎卿、留守人之、留守人新宰相中將・雅典・公利等朝臣、降同階立後列、各奉見送之、次炬火者上首三四人、離列參進、昇御車寄、此間所持〻火預次〻人、奉押出御車、了逡巡歸本列、車副・廳官等、付轅引之、炬火者以下前列次第進行、西行出堺重門、雜色一人密〻候此邊、予出堺重門〻後相從傍行、向坤斜行、西折、出大門、不被構假門、被用尋常大門之、於此所後乘僧杲海長老、乘御車後、執奏經理、持蠟燭走來、於實愛朝臣傍移付火、歸至立御車中、三具足燭臺之、了鏁扉入貫拔掛御簾、次懸御牛、三頭、次引廻御車、行列經舊院門前南行、聊西折更南行、出堺町門、雜色二人、候此門外、此後相從傍行、一人持挑灯、一人持胡床、堺町南行、前火所役、極熱〻比難堪、殊苦勞〻間、手替〻人保美朝臣・長順等兼ゐ被定置、每〻替合不苦

御出車

御路次

由、傳奉被示之、仍示合置〻間、於二條邊被追來、則授前火了、密〻傍行開扇納涼、一町許行〻後、取返持之、替〻人密被傍行、三條東行、自柳馬場邊又交替、實愛朝臣相共離列進時、立出返取火、京極南行、於四條邊、又暫時交替、東折渡五條橋、於此所又交替、離列早足進行、至大佛邊、玉屋庄五郎宅之、構休所例之、休息、伏見街道南行、東折渡大路橋、松林東行、入泉涌寺惣門、尙東行、至龜前堂、北方竹柵口寺僧二人出來、迎火、實愛朝臣・予、即授之、了入竹柵徘徊西邊、雜色二人相從入、消丸挑灯、燃替箱挑灯、自本所御車寄至龜前堂、幸路悉敷白砂、路頭人家每軒掛白張挑灯、燈火一切不點之、雜人拜見成群、路頭每辻立竹矢來、禁往來、又寺門、自大路橋以前松林左右、至門內構竹矢來、路頭行列殊速〻、異當春、適兩三度許佇立、其間立胡床休息、路間續替松明、列奉行六人、進之、或列奉行下仕〻白丁、持來授雜色、件松明載釣臺、下部舁之、在列前、

路頭行列

路頭行列 武家輩在前列

先炬火者、下北面十人、吉服・狩衣・指貫・單紅或黃、著當色、著藁沓、各ワランズ〻、取松明不合火先、爲先下萬、二行相並、以御車左方爲上首、各雜色一人從傍、

三上大和守、後院北面〻、年來御雇、景文宿禰
川端左衞門大尉、後院北面、居益
藤木周防守、昭直
岡本右衞門少尉、同上、清省
姉小路左衞門大尉、後院北面、弘隆
速水右衞門大尉、後院北面、年來御雇、裕益
松波右衞門大尉、後院北面、近日御雇、光貞
世續右衞門少尉、同上、藤原重遠

富左近將監、下毛野敦邦　　岡本出羽介、賀茂清永

次前火院司、殿上人二人、

右中將實愛朝臣、素服・布衣（布黑染、袴同、）白單、冠（巻纓、赤緒、）著當色、藥杳、具杖、（白杖令持、）諸大夫一人（五位、巻纓、）雜色四人（纓上下、黃單、）一人持挑灯、一人持胡床、白丁一人等相從、自餘白丁并傘朱持等、在惣行列最末、

予、（裝束以下僮僕等見前、）人車記、久壽二年、近衞院御葬、炬火者取杖之、先蹤者雖令具之、無巨難者乎、

次持火舍者二人、（上北面代、）在御車左方、懸香爐於頸、上首

九條家諸大夫鹽小路大藏權大輔、光德朝臣　吉服・狩衣・指貫・單、　二條家諸大夫松波大炊頭、資施朝臣　吉服・狩衣・同上、

次燒香者二人、（上北面代、）懸香袋於頸、上首在御車左方、雜色一人從傍、

近衞家諸大夫佐竹主殖頭、重政朝臣　吉服・狩衣・指貫・單、　鷹司家諸大夫高橋兵庫頭、俊璹朝臣　亮陰・狩衣・指貫・白單、

次上北面代二人、空手、上首在御車左方、時々相代持火舍、

一條家諸大夫保田刑部權大輔、利壽　吉服・狩衣・指貫・單、　近衞家諸大夫小山兵部權少輔、長敎　吉服・同上、

次廳官二人、持松明在角下、上首在御車左方、

後院所衆大石右衞門大尉、信載　廳官代

次御車

牛童四人、舍人四人、御車副八人等、在御車前列、

棧持一人、榻持一人、（以上二人相竝、）掛杖持二人、雨皮持一人、掛竿持一人（以上二人相竝、）等、在御後列、

次主典代三人、（空手、爲先上萬、二行相竝、下萬一人在後、）右、吉服・狩衣・指貫・單、

左少史山口大藏大丞厚生　　右少史虫鹿豐後守秀興　　外記史生青木治部少丞宗岡行光

次公卿一行、（各藥杳、具白杖、多不突之故、遣不見及、）雜色二人、持挑灯箱在前、

（近衞忠熙）内大臣忠　素服、黑染布袍・同袴・冠・卷纓・白單・著當色、左右番長各一人在前、諸大夫三人、布衣隨身六人、雜色長、雜色八人、下品雜色六人、白丁四人、傘持、

別當德大寺大納言實堅　亮陰直衣・白單・鈍色指貫、諸大夫二人、衞府長、雜色（朽葉、赤單、）六人、走雜色四人、白丁四人傘持、

三條大納言實萬　裝束同上、諸大夫二人、衞府長、雜色（朽葉、黃單、）六人、白丁四人、笠持、

鷲尾前大納言隆純　素服同内府、雜色（白張、黃單、）六人、白丁四人、笠持、

山科中納言言知　素服同上、雜色（花田、黃單、）四人、下品雜色四人、笠持、

別當中山中納言忠能　亮陰袍・鈍色指貫・白單、諸大夫一人、雜色（朽葉、赤單、）四人、白丁四人、笠持、

源宰（綾小路）相有長　亮蔭袍（茶染、）鈍色指貫・白單、雜色（花田、白單、）四人、白丁四人、笠持、

右兵衞（持明院）督基延　素服同内府、雜色（白張、黃單、）四人、下品雜色四人、笠持、

平宰（石井）相行弘　素服同上、雜色（白張、黃單、）以下人數同上、

大藏（豐岡）卿治資　亮陰袍・鈍色指貫・白單、雜色（白張、黃單、）四人、下品雜色三人、笠持、

弘化三年七月二十三日

式部權大輔（高辻）以長　裝束同上、雜色白張・黃單、四人、白丁三人、笠持、

大原三位重德　裝束同上、雜色朽葉・黃單、四人、白丁二人、笠持、

堀河三位康親　裝束同上、雜色萌黃・黃單、以下人數同上、

外山三位光親　裝束同上、茶染袍、雜色白張・黃單、四人、下品雜色三人、笠持、

治部卿（鈴鹿）久雄　裝束同上、同上、雜色同上、人數又同上、

六角三位能通　素服同內府、雜色同上、四人、白丁二人、笠持、

池尻三位延房　亮陰袍・鈍色指貫・白單、雜色萌黃・黃單、四人、白丁三人、笠持、

安三位（倉橋）泰聰　素服同內府、雜色花田・黃單、四人、白丁二人、笠持、

次殿上人二行、以右方爲上首、雜色一人、持挑灯箱在前、

散位定章（今城）朝臣　亮陰袍・鈍色指貫・白單、雜色白張・黃單、三人、白丁二人、笠持、

右中將公正（濱水谷）朝臣　裝束同上、雜色色目人數等同上、

右少將公前（梅小路）朝臣　裝束同上、雜色朽葉・赤單、以下人數同上、

兵部大輔定德（梅小路）朝臣　裝束同上、雜色萌黃・木、以下人數同上、

左衞門佐保美（高野）朝臣　素服、布黑染布衣・同袴・白單・冠卷纓、布張、雜色花田・黃單、三人、下品雜色二人、笠持、

侍從隆聲（八條）朝臣　亮蔭袍・鈍色指貫・白單、雜色萌黃・赤單、二人、下品雜色二人、笠持、

判官代藏人左少辨（勸修寺）顯彰　裝束同上、侍一人、雜色白張・白單、三人、白丁二人、笠持、

藏人右少辨（柳原）光愛　亮陰束帶、侍一人、雜色白張・黃單、三人、下品雜色二人、笠持、

侍從（廣橋）胤保　亮陰袍・鈍色指貫・白單、侍一人、雜色色目以下人數等同上、

判官代侍從（葉室）長順　素服同保美朝臣、雜色花田・黃單、三人、白丁三人、笠持、

判官代中務權少輔（勸解由小路）資生　亮陰袍・鈍色指貫・白單、雜色同上、三人、下品雜色二人、笠持、

散位（梅園）實紀　裝束同上、雜色萌黃・赤單、二人、白丁二人、笠持、

藏人中務丞大江俊常（北小路）　裝束同上、雜色萌黃・黃單、三人、下品雜色二人、笠持、

此次、前火殿上人白丁傘持幷公卿殿上人輿笠籠等雜具持、步列、次武家面〻少〻、

大工棟梁等、步列追從、

別帋

人車記、久壽二年八月一日、

次炬火十二人、

皇后宮亮師國朝臣（南、日來著皇后宮從服、今夜其上著當色役之、）右京權大夫俊長朝臣（北、）已上兩人副煎、散位清職・爲範・宗賢・正遠・經國・範實・清賴・信國・加賀權守憲賴・散位憲忠、

已上十二人、各衣冠卷纓、著當色、取白杖、炬火列二行、下蔦爲先、（杖行別所儲松私用之、）

御車入竹柵、著御於龕前堂、乾砌攪放御牛、先後乘僧下車、（從僧、掛棧昇、撤御簾解鏁開扉、卽杲海長老、下車、從僧、介抱、出竹柵向休所、御車如元）

弘化三年七月二十三日

閉扉懸御簾、引廻廉於龕前堂內、內府、參入、被候御簾、不見及、次奉移御龕、稱鳥日傭等、奉仕之、頗狼藉、此間內府公以下殿上人等、雜色二人持桃灯相從、經龕前堂西方、至南頭著連床、東上北面、內府別床之、人々僮僕候後方、下北面、同著最後連床、先之葬場使實德朝臣、未令到於龕前堂御〻程、出宿坊戒光寺、參向、於竹柵入口撤劍笏、著床子、供奉人々連床ノ西邊、置箱挑灯二張於前、僮僕候後方、女房二人不聞名、乘白木輿、在連床東南方、內女房准后上臈等、少〻乘輿在同所、經半時許〻後、奉移於寶龕、了奉安置於正面、次實德朝臣、進出、立於南砌、東西中央程之、東面、中山中納言（忠能）凶事傳奏、自龕前堂內出來、向立實德朝臣、一揖問云、黃門答揖〻後、唯今何レノ御程ニ候哉、黃門、勅答申云、御龕ニ移シ奉リ候ヲ、申了一揖、勅使、答揖、直左廻經本路、不着床子、於本所帶劍笏退去、乘輿、又暫向宿坊、休息〻後、歸參內、次有法會、見式文、了擧經、唱光明眞言、大衆、同音、乍唱讀行列、寶龕出御龕前堂、自龕前堂至山頭、敷莚道布等、公卿已下、各起連床蹲居、寶龕出東竹柵、經東山門前南行、東折入竹柵、渡御於山頭、日用等奉舁之、人數不聞、僧數十人、或又人數不聞、著白張上下、圍繞之、內府以下殿上人北面等、奉供奉、殿上人尙二行步列、實愛朝臣・予、不前行、加列、供奉至山頭、著北西邊連床、東上北面、當春〻時寶龕御三匝〻間、各立連床前、御鎭座〻後、著連床、是可然之、今夜無其儀、內府以下直著之、仍無左右從各所爲卽著了、寶龕、入菩提門、逆繞御三匝〻後、入御於葬場殿、御鎭座了、次有法會、見式文、導師燒香、了山頭使第二度勅使、丹波賴永、龕前堂法會〻間參向、著床子、件床子公卿連床〻上邊之、一事同葬場使、進出、立菩提門北脇邊、南面、中山中納言、出同門向立、丹波賴永、一揖、黃門、答揖〻後、問申云、何レノ御程ニ候ヤ、黃門、勅答申云、御茶毗ノ程ニ候ヲ、申了一揖、賴永、答揖、右廻經公卿列前、西行退去、黃門、勅答了右廻、歸

山頭ニ渡御

入同門、次又有法會、擧經、讀廻向文、了供奉輩公卿以下、各退散、次大衆、退散、於御法事堂安尊牌、諷經奉修行云〻、

葬場殿ノ儀

予等、向戒光寺、宿坊之、大臣悲田院之、先脫棄藁履、洗足休息、于時丑前許、開破子聊羞食、又宿坊羞强飯、小時逐電、乘輿就歸路、寅剋過歸宅了、長途供奉殊疲勞者之、前火所役無異勤仕、火一度不消滅、頗安意了、實愛羽林所持〻火、途中三度消滅、以予所持〻火、被付之、予當春御葬夜、取前火、古來同人兩度取前火事、無所見、剩如予年中兩度勤仕〻條、殊希代〻事歟、不堪悲歎者也、

御葬送次第

葬場殿、四方垂幕、奉移於輿〻後、御密行、長老・中老・役者、圍繞、渡御於御廟所、傳奏奉行・御世話卿三條、肝煎卿源宰相、幷僧侶等奉從、又武家輩少〻追從云〻、奉納御石槨、辰斜御葬儀悉終、巳半許傳奉參內、令言上云〻、

御葬送〻儀

剋限廉御車、廳官二人附輿、御車寄人參進、立几帳屏風等、兼自簾下設莚道、此間公卿以下、列立庭上東方、南上西面、公卿一列、殿上人一列重行、上北面代西方對列公卿列、中央程主典代列其北、絕列、下北面一列重行、以上南上東面、於便所著藁沓、先是素服〻輩著當色、次奉移御棺於御車、

寶龍前壇圖

山頭幕場殿圖

先是所役輩昇殿、殿上人不脱藁沓、其儀、先御前火殿上人二人、於簀子取脂燭、廳官自砌下進之、入西庇簾中、參御在所、燃移御枕火、於簀子召炬火者上首、於砌下令各燃移之、炬火者、候御車前左右、

此間本役人、奉移御棺、内大臣、被褰御車簾、本役人二人、供三具足、又二人、以御火舍香袋等、於簀子召本役上北面代、於砌下傳給之、先御香袋、次御火舍、各給之、懸頸候御車左右、各二人、廳官二人、取松明、在角下左右、

次内大臣以下所役人〻、降便階、内大臣被着藁沓、加列、御前火・院司殿上人、加御車前〻列、

次御車副・廳官等、附轅引之、

次公卿一行、殿上人二行、步行、

次於大門外、導師僧、乘御車後、西面〻間乘之、

次懸牛、御車副等、遣牛、々童取榻、

路頭行列

先下北面十人、取松明、二行、次院司殿上人二人、取御前火、二行、次上北面代二人、懸火舍於頸、二行、次同二人、懸香袋於頸燒香、二行、次同二人、二行空手、次廳官二人、取松明、二行、次牛童四人、二行、次牛、次舍人二人、二行、次牛、次舍人二人、二行、次牛、次御車副二人、二行、次御車、元牛、次御車副六人、二行、次棧持・榻持二人、二行、次掛杖持二人、二行、次雨皮持・掛竿持二人、二行、次主典代三人、二行、一人在右、次公卿十八人、在從一行、次殿上人十三人、在從二行、奉渡泉涌寺、引廻龕御車於龕前堂、

先是、後乘僧、下車、放牛、御車副・廳官等、附轅引之、

次奉移御棺於寶龕、　内大臣、被褰御車簾、

此後公卿殿上人、居連床、地下〻輩居後方、

次奉安置龕前堂正面、

次葬場使問答、

次有法會、見寺門式、

次渡御山頭、　公卿以下、從御後供奉、

寶龕、入菩提門、逆繞三匝〻後、奉安置、

此後公卿殿上人、居連床、地下同上、

次有法會、見寺門式、

次山頭使問答、導師燒香畢有此事、

次有法會、見寺門式、

次供奉公卿以下、退去、　此後〻儀、一向爲僧中沙汰、

寺門〻式

一番鳴鐘、大衆集會、　二番鳴鐘、大衆出仕于龕前堂、

次御車、著御々車寄前、　御乘添長老、下車、

次放牛廻轉、

次入御于龕前堂、諸衆平伏、

次大臣、被裹御簾、

次御棺奉移寶龕、　出御于正面、

次葬場使御問答、

龕前堂作法

先葬主、進於中央、燒香、直請宣疏師、

次宣疏師、到御導師前、問訊、到中央燒香、此時行者、捧宣疏、

次宣疏師、高聲唱讀、〻〻了行者、撤之、宣疏師、歸本位、

次葬主、進於中央、燒香、直到御導師前、慇懃問訊、歸本位、

次御導師、進於中央、燒香、　侍者、相從、

龕前堂作法修之、作法了御導師、歸本位、

次鳴磬、

次擧經、大悲神咒出音、大衆、同音、

次讃頭、出音、大衆、同音、合鈸、

次擧經、光明眞言出音、大衆、同音、

次行燈幡等行列、

次大衆行列、

次寶龕、出御自正面、

次御幸、

行灯　同　幡　同　灑水　鈴（鈸脫カ）　燒燭臺　御湯　威儀僧　藏司　大衆

行灯　同　幡　同　灑水　鈴（鈸脫カ）　燒華瓶　香爐　御茶　威儀僧　維那　大衆

燒香　宣疏　擧經　前住　奠湯　奠茶　葬主　挑灯　挑灯　御導師　御位牌　寶龕　天蓋

山頭作法

先行燈・幡・灑水・鈴・鈸・鐃等僧侶、直進荒垣〻內、隨于寶龕、逆繞三匝、天蓋隨之、

次大衆、群立、北京〻僧東頭、南京〻僧西頭、

次御導師幷前住・奠茶師・奠湯師・宣疏師・擧經・葬主・維那・藏司、著本位、

弘化三年七月二十三日

次御位牌奉安置中央机、

次葬主、進於中央燒香、直請奠湯師、歸本位、

次奠湯師、進於中央、此時侍者、捧湯、奠湯師、受之、謹薰香小揖、唱法語獻供、々々了歸本位、

次葬主、進於中央燒香、直請奠茶師、歸本位、

次奠茶師作法如奠湯師、

次葬主、進於中央燒香、直請御導師、歸本位、

次御導師、進於中央燒香、山頭作法修之、此時侍者、捧鋤子、御導師、唱法語、々々、畢歸本位、

次山頭使御問答、

次鳴磬、擧經、十重禁出音、大衆、同音讀經、了擧經、讀廻向文、〻〻〻了供奉公卿以下、御退出、

次大衆、退散、於御法事堂安牌、諷經奉修行、

次山頭四方垂幕、奉移御轜、

次御密行、長老・中老・役者圍繞、

宣疏文後日借見之、次寫留之、續左、山頭御導語未借得、

日本國洛陽東山泉涌寺

現前諸衆等、今月廿三日、恭値
新清和院尊儀慎終之辰、
營辨香華燈燭、諷誦大悲
圓滿神咒、以備覺路之莊
嚴者也、　右伏以
法空月明破蓋纏之雲、
心池水清洗從障之塵、
恭　惟
新清和院尊儀（神皇嬪胤、日嗣正配、）
淑德天高、　椒房咸浴其和、
孝心地厚、　叡室最稱其優、
其爲敬也、　不弛於師傅、
其爲仁也、　無遺於蒸民、
香霧遶深宮、　時發勝曼之信證、
妙舞調瑤臺、　每受樂邦之歡喜、
弘化三年七月二十三日

豈　例

掖庭夜閑　冥駕夙發、
鳳闕晝閒　靈棺頓鎖、
玳瑁牀頭空歎粧鏡之莫拭、
琴瑟閣上徒怨玉絃之無續、
普天之下无不呑聲、
率土之濱无不傷情、
於　是
集勤淨之緇侶、啓愼終之法筵、
伏　冀
尊儀　人法幷空、住心於那伽之
大定、　形神兩脫、遊身於風光之
玄門、
謹疏

葬場使右中將實德(正親町)朝臣、亮陰束帶銀造黑漆劍、不具隨身、具雜色(白張黃單)、六人、自今朝雖警固中、依勅使、不具綏弓箭等、乘輿、綱代、申半剋參內、及秉燭進發參向、至宿坊戒光寺、相待　勅使、

勤仕了丑剋過歸、參內屬議奏、申勤仕了由、卽退出云々、山頭使丹波(小森)賴永、藏人三萬、亮陰束帶、是又依勅使、不具弓箭、於綏去尙掛之、具雜色四人、不具隨身、寅剋前歸、參內言上、卽退出云々、素服當色冠等、於單衣私設之、今朝於本所請之、或依便宜昨日請之云々、當色體同去春、仍不注之、留守人、新宰相中將(四辻公績)・雅典(飛鳥井)朝臣・公利(中園)朝臣等、各內近臣之、去八日、被定仰、今日未半剋參入、狩衣・奴袴、殿上人奉仕、殿下以下陪膳如常、御出車〻時隨殿下・宮達等・肝煎卿(東久世通孝)、源三位、相共於御輿寄西庭奉見送御車、出御大門〻後、殿下以下、出門外、南腋、南上西面、又奉見送云々、天曙〻後退散云々、殿下宮等、御出車〻後被退出云々、

右衞門督(萬里小路)正房、爲院司、然る非供奉〻閒、申剋許參入、與留守人相共奉見送、了卽退去云々、
准后御方肝煎卿八條三位(隆祐)、申許參入、與留守人相連奉見送云々、

〔萬里小路正房日記〕○東京帝國大學所藏本

七月廿三日、丙午、快晴、今夜新淸和院御葬送酉剋也、爲拜見、長谷亭行向、供奉人々、

近衞內大臣(忠熙)　德大寺大納言(實堅)
三條大納言(實萬)　鷲尾前大納言(隆祥)
山科中納言(言知)　中山中納言(忠能)
綾小路宰相(有長)　持明院宰相(基延)